
翼を抱く者 - 紅炎のソレンティア -

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼を抱く者 - 紅炎のソレンティア -

【Nコード】

N0965M

【作者名】

海土龍

【あらすじ】

楓^{かえで}は修学旅行先の京都駅構内のトイレで、光を放つ不思議な封筒を見付けた。

驚いたことに、その封筒の宛名には楓の名前が！？

わけも分からず、始まりの言葉を口にしてしまった楓は、自身の意思とは関係なく、異世界への扉を開いてしまったのだった。

紅炎のソレンティアの二次創作小説です。

1・始まりの言葉（前書き）

この小説は、SNG「紅炎のソレンティア」(<http://solenatia.jp/>)の二次創作小説です。

1・始まりの言葉

君は自由だ。

どこへでも行くがいい。

君の道は君が選び、君の責任によって創られるべきもの。

君は自由だ。

君を縛るものは何もない。

君を定めるものは、君だけである。

君は他人の指図を求めてはならない。

君は何事にも囚われてはならない。

君は孤独だ。

だが、その孤独から逃げてはならない。

さあ、選びたまえ。

翼を抱く者、飛び立つがいい。

「なんで、私がーっ！」

これが叫ばずにいられようか。

目の前の塔は、天を貫くかと思うほど巨大で、見渡して目に映る景色は、まるで夢。

とてもとても信じがたい！

私は手にしていた荷物を地面に落として、両手で頭を抱えた。

順を追って、話そうじゃないの。

私、アキノカエデ秋野楓は、東京都内に住む、ごくごく普通の女子高校生だ。

そして、現在、修学旅行中。

行き先は、京都と奈良。

ほらね。ごくごく普通でしょう？

むしろ普通過ぎて、不平不満はてんこ盛り。

京都と奈良なんて、中学校の修学旅行でも行っただし！
なんでまた京都と奈良！？

でも、そうは何だかんだ言っても、みんなで出かけるというこの状況は楽しい。

新幹線の中。

持参してきたお菓子やトランプを広げながら、友人たちと和気藹々やっていると、あっという間に、京都駅に到着しちゃったの。

近代的な京都駅。

まず目に飛び込んで来たのは、恥ずかしながら、おみやげコーナー。
I。

だって、本当にたくさんの店がずらりと並んでいるんだもん。
目を引かないわけがない。

もう、おみやげ？

たった今着いたばかりだつーの、という自主ツッコミを入れながらも、目を奪われてしまい、友人の袖を引いた。

「ヤバイ。あれ、欲しい！」

「バカ。今買っても荷物になるだけだよ」

「じゃあ、後で買うから、覚えておいて！」

「え？　なんで私が？　自分で覚えておきなよ」

そんなやり取りをしながら駅を突っ切り、学校が用意したバスに向かう。

修学旅行生用のバスが停まっている隣で、担任がトイレに行くよう声を張り上げている。

これから長時間のバス移動が始まるのだという。

「行ってこようかな」

それほどしたいという気分ではなかった。

けれど、長時間いけないのだと聞くと、行っておきたくなる。そんな感じ。

「なら、荷物、持っていてあげようか？」

「うーん」

3日分の着替えやら何やらが入った旅行鞆。

普段なら頼んでいたと思う。

だけど、この時私は、何となく、その友人の申し出を断ってしまった。

重い荷物を抱えてトイレに向かう。

この時は断ったことを若干悔いた。

だけど、この何気ない選択は、後になってみると、正しかったと思わずにはいられない。

同じ学校の子や他の学校の修学旅行生。
その他の旅行者が並ぶトイレの列の最後尾に私も並ぶ。

想像に易いと思うんだけど、そこらの美味しいラーメン屋よりも、
かなり長い行列になっている。

しばらくしてようやく私の番になった。

個室に入って、用を足そうと思ったその時。
ふと、ある物に気が付いた。

（何これ？）

正面の壁に白い封筒が、金色の画鋏で貼り付けられている。

（なんで、こんなところに？）

一見すると、なにやら怪奇的だ。
いったいどこの誰の仕業だろうか。
どう考えてもイタズラである。

私の前にこの個室に入った人たちは、これを見て何も思わなかったのだろうか？

気味が悪いと目を逸らし、用を足そうとした。

だけど、その封筒がどうも光を放っているように見えて仕方がない。

もう！ 気になって、気になって！
用を足すところではない！！！！

よく見ると、封筒の縁は、金糸で細工いぢされていて、不潔さはない。
それどころか、蝋を溶かして封をされているあたりは、何やらアンティークっぽい。

私は画鋏を抜き、封筒を手にとってみた。

固い。

カードのような物が中に入っているようだ。

裏返して見る。

あつ、と私は声を上げた。

『T O カエデ・アキノ』

驚いたことに、封筒の宛名に私の名前が書いてあった。

（なんで？）

偶々自分と同姓同名の宛名が書かれてあったということなのかもしれない。

けれど、偶然にしてはずいぶんと偶然すぎる。

どうしようかと悩む。

このまま放っておけば、この先ずっと悩み続けることになりそう
だ。

私は恐る恐る封筒の封を切った。

封筒の中には、やはりカードが入っていて、二つ折りのそれを、
私はそっと開いた。

『貴君をここに招待する。』

扉に立ち、始まりの言葉を唱えよ。

エクス・ニヒーロー・ニヒル・フィット

ソレンティアの門は君を歓迎するだろう。』

銀色に輝く文字を読んで、私は首を傾げた。

さっぱり意味が分からなかった。

（招待するということは、招待状なんだろうけど。始まりの言葉を唱えよって、この次に書いてある呪文みたいな変な言葉のことなのかなあ）

ひらひらと、カードを裏にしてみたり、表にしてみたり、はたまた透かしてみたりした。

封筒の中にはカード以外のものは入っていないようだ。

楓は再びカードの文章に目を落とした。

「えーっと、何々？ エクス……ニヒロー、ニヒル……フィット……？」

唱えよ、と言われたので、口にしてみた。
そんな感じだ。

素直に従ってみただけのこと。

だけど、次の瞬間、目の前が真っ白になった。

白。

というか、眩しい。

蛍光灯を目の前に突き付けられたような感じた。

眩しさに、目を開けていられなくなる。

ばんっ。

勢いよく扉が開く音が聞こえた。

けれど、私がいるのはトイレの個室の中だ。
気のせいだったのかもしれない。

ふっと眩しさが和らいだのを感じて、瞼を開いた。

「うわっ！」

目の前の生き物に思わず声を上げた。
てんとう虫である。

だけど、なぜか、スーツを身に纏っている。
シルクハットまで被っている。

てんとう虫は片手を自分の胸の前に持っていくと、優雅にお辞儀をした。

「カエデ・アキノ様でございますね。私めは、チーロ・バルトロン
メーオと申します。アイン・ソフ・アウルより貴女様をお迎えに上
がりました次第にございます。さあ、お時間がございますん。急ぎ、
出発いたしましょう」

「はあ？」

意味が分からない。

さっぱり不明である。

きつとこれは夢か何かなのだろう。

そもそもトイレの壁に封筒が貼り付いているところから、おかし
かった。

あんなところに自分宛の封筒が貼り付いているわけがない！

（そうだ。きつと私、夢を見ているんだ！ まだ新幹線に乗ってい
て、寝ているんだ。そうに違いない！）

なるほど、夢の中ならば、

てんとう虫も人間の言葉を話すかもしれない。

私はてんとう虫をまじまじと見つめた。

じつに紳士らしいてんとう虫である。

襟元には赤いタイを締め、手には白い手袋をはめている。

（あははは。あり得ない！）

まったくもってあり得ない話である。

私はてんとう虫を指差して、ケラケラと笑った。

「あのう。申し訳ございませんが、私めもいろいろと多忙の身でございまして。あまりここでのんびりしている時間はございません」

早く早くと、てんとう虫は言う。

どうやらトイレのドアを開いて外に出ろということらしい。

私にしてもトイレの個室で長々と居続けるつもりはない。
外に出ることに異議はないのだが…。

（まだ用足してないんだけどね）

もともとそれほどしたくて来たわけでもない。
まあいいや、とドアに手を伸ばした。

ガチャリ、とドアを開く。

とたん、再び大量の光の波が押し寄せてきた。

いや、先程とは比べものにならない光だ。

暴力的にまで強烈で、圧倒的。

堪らず、ぎゅっと瞼を閉ざした。

風。

涼やかに駆け抜けていく。

私はゆっくりと瞼を開いた。

白く霞んだ視界が徐々に色づいていく。

そして、目の前には、

天を貫くばかりの巨大な塔がそびえ立っていたのである。

2・魔法の塔

圧倒されて言葉もない。

目の前に見える白い塔は、『巨大』という域さえも越えて、でかでかとそびえている。

そう。あまりにも大きすぎて、『塔』であることさえ疑いたくなるほどだ。

というのも、塔の真下に近付いた私の目には、真っ白い壁にしか見えないからだ。

その壁は緩く彎曲しながら、左右の地平線まで続いている。

だが、再び遠く離れて天を仰ぐと、やはりそれは塔で、その白い塔の先端は白い雲を貫いている。

直径も計り知れなければ、高さも計り知れない。
実に奇怪な塔である。

（でも、まあ。夢だし……）

これは新幹線の座席で眠っている自分が見ている夢なのだ。
夢であれば、わりと何でも“有り”なのだろう。

そう心に言い聞かせ、私は正面に視線を戻した。

門がある。

これもなかなか巨大だ。

横幅は10メートルほどで、向かって右側だけが開かれている。

門の左右には同じ制服を着た門兵が2人立っていて、長い槍を手
にしている。

「あの門がソレンティアの入り口でございます」

チーロが説明をした。

（ソレンティア？ なんだっけ？）

首を傾げた後で、そう言えば、と思い出す。

トイレの壁に貼り付けられていたカードに『ソレンティア』と書
かれてあった気がする。

「そう。この門の先がソレンティアなのね」

「そして、この塔はアイン・ソフ・アウルと申しまして、ルティア
のみが塔の中に入ることができるのです」

「ルティア？」

「“資格を持つ者”という意味です。さあ、門の中へ」

標準サイズよりやや大きいtentou虫に促されて、私は門へと歩み寄った。

門を潜る時、ちらりと門兵の顔を盗み見る。

門兵のガラス玉のような青い瞳がキラリと光を放った。
どきりとした。

何やら無機的で、ロボットのようだと思った。

「ねえ、今の人たち。ちょっと変じゃなかった？」

「変……ですか？」

「何だかロボットみたいだった」

ああ、と言ってチーロは頷いた。

「彼らはヴェーダです。機精人。機精界に住む人工生命体です」

「は？」

初めて耳にする単語に理解が追い付かない。

（キセイジンって、キセイカイって、何ですか？）

どうにもへんてこな夢だ。

無駄に設定が細かい。

だが、しょせん夢は夢。

覚めてしまえば終わってしまう夢なのだからと、私は理解することを放棄した。

「へえ、ヴェーダね」

適当な相づちを打った。

「つまり、普通の人間じゃないってことよね？」

「アキノ様のおっしゃる“普通”の定義が分かりかねますので、返答に困ります」

「普通の定義？」

「ここソレンティアでは、人間を“普通”とは申しません。まあ、追々と身に染みて分かっていくことでしょうが」

チーロは言葉を濁した後で、楽しげな笑みを浮かべた。

門の内側の壁には、細かいレリーフが施されている。
植物だろうか。

蔦のような模様もあれば、抽象的な図形模様もあった。

乳白色の中を進む。

霧のような、霞のような、もやに辺りは覆われている。

数歩先も見通すことができないので、チー口の羽音だけを頼りに
足を進めていると、やがて門の終わりが近付いてきた。

突然、もやが晴れ、視界が色付いた。

目の前に白く輝く道が真っ直ぐに伸びている。

道の先は、壮大な玄関エントランスを構えた石造りの校舎だ。

道を進みながら左右を見渡せば、青々とした芝生が広がっており、
その両脇を美しい並木が縁取っている。

あれ？ と思い、私は空を仰いだ。

そして、チー口に振り返る。

「ここって、塔の中だよね？」

「はい。ソレンティアです」

「塔の中に更に建物があるって、どういうこと？ 空まであるし」

「ここはアイン・ソフ・アウルの内側ですから」

さっぱり答えになっていない。

私は、ぶーんと羽音を立てて飛んでいるチーロに、じろりと視線を向けた。

（でも、まあ、しょせん夢だし）

矛盾は夢の十八番だ。^{おはじ}

いちいち気にしていたら、

老後を待たずに頭はツルツルピカピカになってしまう。

（気にしない。気にしない）

疑問も不思議もすべて投げ捨てて、鼻歌交じりに道を進んだ。

不意に視野が陰ったように思う。

あともう少しでエントランスに上がるという時だ。

私は腹に衝撃を受けて後ろにひっくり返った。

「ぐええー」

鶏を絞めたような悲惨な悲鳴が響く。

名誉のために言うが、その悲鳴は楓が上げたものではない。

主は、つい先程まで楓の顔の前をぶんぶん飛び回っていた虫だ。

「死ぬー。死ぬー」

哀れな虫は白目を剥いてジタバタしている。

「この虫！ やっと捕まえたぞ！ リンドを元の世界に帰せ！」

チー口を捕らえた人物は、チー口の入った両手に口を押し当てて怒鳴り声を張り上げた。

「リンドの言うことを聞かないと、このまま握りつぶしてやるからな！」

「ひー。お助けを！」

悲痛な声を聞きながら、私は地面にぶつけた尻をさすりながら、ゆっくりと立ち上がった。

並んで立ってみれば、怒鳴り声の主は小さな子どもだ。私の胸の高さもない。

浅黒い肌。

黒髪は肩に着くか着かないかの長さで、
湖のような蒼い瞳を大きく輝かせている。

（あれ？ この子……）

髪から横に飛び出した耳の先が三角にとんがっている。

世の中にはありとあらゆる個性があるとは言いが、さすがにこの
耳は個性の域を超えている。

なんと言つか、絵本に出てくる妖精のようだ。

顔も可愛い。

怒っているのだが、本当に怒っているのか疑いたくなるような愛
らしさだ。

甲高い声をきゃんきゃん言わせて、

両手の中を睨んでいるのだから、ますます可愛い。

しかし、だ。

実際に口になっている言葉は何とも物騒。

私をここまで案内してくれたてんとう虫を、握りつぶして殺すと
脅しているのだから。

「えーっと……」

義理というほどのものではないが、一応チー口に対して思うことがあり、

彼を握りつぶそうとしている子どもの気を逸らそうと、私は声を発してみた。

(だけど、何を言ったらいいのやら…)

ずきずきと痛む腹を抑えた。

そうだ！ この子に膝蹴りを喰らっていた。
とにかく謝って貰おう。

「あのお。お腹、痛いんですけど……？」

ちろり、と蒼い瞳が私を映した。

「お前、誰？」

明らかに、この子の方が私よりも年下である。
なのに、何という尊大な言い方だろうか。
私はムッとして名乗った。

「あきのかえで
秋野楓。 16歳！」

年齢まで告げてやる。

これで少しは態度を改めて欲しい。

ところが、“そうは問屋は降ろさない”というやつである。

ふーん、と鼻を軽く鳴らされただけだった。

「ふーんって。それだけ？ あなたが私のお腹を踏み台にしてチー口に飛び掛かったんでしょ！」

「そうだ。虫は飛んでいた。リンドは背が低い。だが、ジャンプ力には自信がある。飛び台さえあればな」

胸を反らして、実に偉そうである。

（このクソガキ！）

全身をわななさせて、

私は子どもを上から見下ろした。

「あなた、リンドっていつの？」

「響き谷のフリーゲルの姪、翼ある者だ。^{リンドフルム}…お前は人間だな。新人生か？ リンドも昨日その虫に騙されてここに連れて来られた

が、リンドは帰る！ 入学するつもりなんてないんだ！」

そして再び先の行動に戻る。

リンドブルムは両手に向かって怒鳴り声をぶつけた。

「リンドを元の世界に帰せーっ！」

ですから、と振り絞ったような哀れな声が響いた。

「リンドブルム様の世界へと続く扉は閉ざされてしまいました。帰ることは不可能です。何度もそう申し上げていますでしょう」

「騙された！」

「いいえ。扉を開かれたのはリンドブルム様ご自身です」

「リンドはこんなことになるとは知らなかった！」

「そのようにおっしゃっても。私めの役目は塔に選ばれた方々をソレントィアにご案内差し上げること。送り返すことではございません」

「じゃあ、リンドはどうすれば帰れるんだ！」

だからですね、と呆れ声。

「何度も申し上げています通り、それなりの許可を取る手続きをなさって……」

「ダメって言われた」

「それでは正統な理由だと認められなかったのでしょうか。残念です」

チーロはすまし顔で言つてのけた。
さつと青ざめたのは幼い子どもの方だ。ぼそりと呟く。

「……握り潰してやる」

「ひい！」

ぶーんと響いたチーロの羽音がいかにも悲しげだ。
私は思わず、リンドブルムの腕を押さえた。

「待って！」

「なんだよっ」

「可哀想じゃないの。それに、たとえ夢の中の出来事だとしても殺生は見たくないわ。てんとう虫だけど、しゃべるてんとう虫だもの。」

目覚めが悪いじゃないの」

そう言うと、チー口を掴んだままリンドブルムの頭が、こてん、と傾げられた。

「私は気持ち良く目覚めたいのよ。これから修学旅行だし。だから、ね？ チー口を離してあげて」

「お前の言っていること、よく分からない」

「分からなきゃ分からなくていいわよ。どうせ夢だし。理屈はもちろん、まともに会話ができるとは思ってないんだから。とにかく、あなたは両手を広げればいいの！」

「むう」

リンドブルムは眉間に皺を寄せて俯いた。
納得できないという表情だ。

「お前は好きでここに来たのかもしれないが、リンドは来たくてここに来たわけじゃない。リンドは響き谷に帰りたいんだ」

「あら。私だって好きでここに来たわけじゃないわ。けれど、夢は選べないもの」

「夢、夢って、さっきからお前の言っていること分からない。夢っ

て何だ！」

「夢は夢でしょう？」

（なんだか変な話になってきた。なぜ夢の中で、これは夢なのだと説明しなければならないのだろうか）

「私だってね、さつさと目覚めたいわよ。修学旅行中なんだから」

ぶーん、と羽音が響いて、

すみませんが、と申し訳なさそうな弱々しい声が聞こえてきた。

「アキノ様はどうやら勘違いをなさっているようです。これは夢ではございません。そう思いたいほど、ここソレンティアが不思議な場所であることは確かでございますが、ソレンティアは現実なのでございます」

「は？」

リンドブルムの両手の中でブンブン言っている虫に向かって、私は思いつきりどでかい疑問符を返した。

ばか言っちゃいけない。

どう考えても夢でないはずがないのだ。

（だって、てんとう虫が人間の言葉をしゃべっているのよ？ 巨大な塔があつて、その中には空があつて……。そんなはちゃめちやなことが現実であるはずがない！）

私は拳を振り下ろした。

「いいんや！ これは夢よ！」

言い張る楓にチー口は羽音で答え、リンドブルムは再び首を傾げて答えた。

沈黙が流れ、それじゃあ、と最初に口を開いたのはリンドブルムだった。

小さな唇を大きく開いて、きらきらと瞳を輝かせた。

「夢か現実か確かめてみたらどうだ？」

「どうやって？」

「こうやって」

バコンッ！

（！？）

「痛い！ 何するのよ！」

私は殴られた頬を抑えて声を荒げた。
すると、リンドブルムはにっこりと笑みを浮かべた。

「痛いか。おめでとう！ この世界は現実だ」

「ちつともおめでたくないわーっ！」

どこがめでたいのか説明して貰いたい。
頬は痛いし、このヘンテコな事態は夢ではないと照明されてしまった。

むしろ状況は悪化したくらいだ。

「嘘でしょ？ 本当に夢じゃないの？」

だって、てんとう虫が話してる！

子どもの耳はとんがってるし、塔は巨大だ。

私は両手を地面に着いて、がくりと頭をもたげた。

3・魔法使いの学園

もう何が何だか分からない。

夢だと思っていたからこそ、すべてを受け流してこれた。

なのに、これが本当に現実として起きていることだとすれば、ちつとも受け流せないっ。

とんでもない事態だ！

私は両手を地面に着いた“打ちひしがれている”格好のまま、ぼそりと地面に向かって言葉を吐いた。

「…虫に騙された」

「な、何をおっしゃいますか、アキノ様！」

いつの間にリンドブルムの手から抜け出したチーロは、私の顔の前をブンブン飛んで、甲高い声を上げた。

「騙したなど、とんでもない！」

「だって、夢だと思ってたのに！」

「それはアキノ様の勝手でございます」

「勝手？」

「はい。第一、扉を開かれたのはアキノ様自身です。これはアキノ様ご自身の選択の結果です」

「選択の結果ですって？ 私がいつ選択したのよ。だいたい私はトイレの個室にいたのよ！

普通ドア開けるよね？ それがどんな状況であれ、開けるよね？ トイレの中にずっといたくはないもの。これを“選択”って言うわけ？ 不可抗力よ！」

「それでも、アキノ様は……」

扉を開かれた、とチー口は続けようとしたに違いない。

けれど、今の私にチー口の言葉を最後まで聞いてやる義理はなかった。

「あなたはここに私を連れてくる前に、ここがどういう場所なのか、私はいつたいていどうなってしまうのか、ちゃんと説明した？」

しなかったでしょう？ それどころか、早く早くって、私を急かしたじゃないの。あの時あなたがちゃんと説明してくれていたら、私はこんなところには来なかった！」

騙された！ と再び大声を張り上げると、チー口は高く高く飛び上がった。

そして、みるみるうちに点ほどの大きさになる。

「それでは私めは、アキノ様をソレンティアまで案内するという、お役目を果たしましたので、これにて失礼いたします」

「ちょっと！」

「さあ、急がないと。トンボ俳句の会に遅れてしまう」

ぶーん、と羽音が遠ざかっていく。

その音が何とも虚しく聞こえてきて、私は途方に暮れた。

(どうしよう。これから……)

突然見知らぬ場所に連れてこられ、
しかも、リンドブルムが大騒ぎしている通りに帰る術^{すべ}はないのだ
という。

何やら無性に悲しくなってきた。

そんな時だ。

空気を読めない子どもが私に向かって荒げた声をぶつけてきた。

「どうしてくれるんだ。お前のせいで虫に逃げられた！」

むかつ、としたのは私の方。

こっちはこっちで忙しい身なのだ。

放っておいて欲しいし、ガキの苦情に付き合ってやる余裕はない。

けれど、売られた喧嘩は買わないと気が済まなくて、私も声を荒げて言い返した。

「何それ、私のせい？ 私だって最悪なのよ。だいたい“トンボの俳句の会”って何なのよ。今、五月だから、季節的にトンボの活動時期じゃないし、そもそもトンボは俳句なんてしないつーの！ もう。なんでよ！ なんで、私がここに連れてこられなきゃならないの？ 私がここににいる意味がサッパリ分らない。私、どうしたらいいのよっ！」

一気に捲し立てると、なんら解決にもなっていないのだけど、一通りスッキリとした気分になる。

肩で息をしながら、私はじろりとリンドを見やった。

すると、悲しいかな。

正気に返ってしまった。

喧嘩相手としてリンドブルムは、あまりにも幼すぎた。

10歳？

いや、12歳くらいだろうか。

とにかく小学生という感じである。

高校生の自分が小学生相手に本気で怒るなんて、
なんて大人げない！

気恥ずかしくなって私は、リンドブルムから目を逸らした。
すると、リンドブルムは拍子抜けしたようだ。
眉間に皺を寄せた。

「怒ったり、落ち込んだり、大変なやつだな」

「……誰のせいよ」

「リンドのせいじゃないのは確かだ」

じろりと、リンドブルムに眼をくれる。

それから、ふと思いついて、頬に右手を、腹に左手を添えた。

（“リンドのせいじゃない”で思い出したわ。 “リンドのせい”
なものもあるじゃない）

まずはそれを片付けておきたい。

（そうよ。問題は一つ一つ片付けていけばいいのよ。そうすれば、
次に何をすればいいのか見えてくるかも）

目の前にあるもの。それは、あれだ！
私はリンドブルムを真っ直ぐに見据えて、人差し指を幼い顔に突き付けた。

「リンド。一つあなたに要求するわ」

「何だ？」

リンドブルムは、こてん、と頭を傾げた。

「謝って欲しいの。あなた私のお腹を蹴ったでしょう？　そして、そのあと頬を殴ったわ」

「でも、それは虫を捕まえようとしてやったことだ。そして、お前のためにやったことだ」

「理由はどうでもいいの。あなたが私に暴力を振るった事実が変わらないでしょう？　暴力は良くないわ。謝りなさい！」

「むう……」

「むう、じゃないわ。謝るの！」

「うー」

リンドブルムの眉間に皺が寄る。

抵抗しているというよりも、本気で困っている様子だ。

私は、仕方がないなあ、と両手を腰にあてた。

「さん、ハイ！ ごめんなさあーい。…ほら、言つて。さん、ハイ！」

「……」

ため息を付いた時だ。

リンドブルムを呼ぶ声が聞こえて、

私は弾かれたように後ろを振り返った。

校舎の中から滑るように駆けてくる2人組。

エントランスから出てきたその姿を見て、私はドキリとなった。

美形。

これぞ本物の“美形”である。

テレビで“イケメン”なんて言われて

大量生産されているアイドルとは格が違う。

“美しい”という単語そのものの容姿をした少年たち。

「げ」

駆け寄ってくる美しい少年たちに対して、不適切な言葉を発した

のはリンドブルムだ。

心の底から嫌そうな表情を浮かべて、彼らの到着を待った。

先に到着したのは、黄金色の髪をキラキラと輝かした青年の方で、もう一人よりもこちらの青年の方が年上らしい。

すらりと高い身長は、私よりも頭2つ高い。

彼はスツと腰を曲げて、小さなリンドブルムを見下ろした。

「やっと見付けたぞ。ものすごく探したんだからな。ものすごく心配したし！」

「ブルー」

リンドブルムは苦々しそうな顔をして、ブルーと呼んだ青年から目を逸らした。

そこにもう一人も到着した。

美形であることには違いないが、先の青年がハッと眼を奪われる美しさならば、こちらの少年はじわりじわりと心惹かれてしまう美しさだ。

銀系のような髪をサラサラと揺らして、リンドブルムの正面に立つと、ゆったりとした仕草で腰を降ろした。

幼い子と視線を同じくすると、穏やかな声を口にする。

「昨日ソレンティアに着いたはずだよね？ 私たちは君を探して君

の部屋に行っただけど、君の姿を見付けることができなかった」

「うん。リンドは昨日ここに来て、それからずっとここにいたんだ」

「ずっと？　ここに？」

銀髪の奥にあるアイスブルーの瞳が驚きを含んで大きく開かれた。
リンドブルムは、こくん、と頷いてから胸を張った。

「リンドは帰る気まんまんだ！」

ため息が二つ。

彼らはお互いの顔を見合わせると、再びリンドブルムの顔を覗き込んだ。

「帰れないんだぞ、リンド」

「そうだよ、もう帰れないよ。リンドの入学手続きは済んでしまっているからね。寮の部屋も決まっている」

「そんなの嫌だ。リンドは帰る！」

ぶいっ、とそっぽを向いたリンドブルムに、青年たちは更にため息を重ねる。

「そんなに帰りたきゃ、ソレンティアでしっかり学んで、一刻も早く卒業すればいい」

「卒業？ どのくらい勉強すれば卒業できる？ 1時間？ 2時間？もしかして、3時間？」

「リンド…」

青年は肩を竦めて、空を仰いだ。

一方、もう一人はニッコリと微笑んで、リンドブルムに告げた。

「リンドが一生懸命頑張れば1年くらいで卒業できるかもしれないね」

「1年！ そんなんじゃないダメだ。リンドは響き谷に帰らないと」

「帰ってどうするの？ 何かしたいことがあるの？」

「したいこと……？」

リンドブルムは眼を瞬かせた。

そして、こくん、と咽を鳴らした。

「嘆き谷に行きたい。行きたいって、フリーユージェルにも言ったんだ。そしたら、フリーユージェルが招待状をリンドに手渡して、中を開いて声を出して読んでみろって」

「父上がそんなことを？ それじゃあ、まるで騙し討ちだ」

「そうなんだ。フリーゲルはひどい！」

「…けどね、リンド。きつと父上はリンドに、嘆き谷に行く前にソレンティアで学んで欲しいと思っていらっしやるんだよ。…ね？ そうだとは思わない？」

「……」

少年の柔らかい口調にリンドブルムは顔を俯かせた。

さてと、と青年が私を振り返った。

すっかり蚊帳の外になっていた私は、不意打ちを食らったかのようにはビックリして、青年の瞳とともに目を合わせてしまった。

かあつと顔が赤らんだ。

（こっ、こんな美形と目を合わせたことなんて、未だかつてないよ！…！）

焦りに焦ってしまつて、居たたまれない気分になる。

そんな私の様子など察することなく、彼はニコツと笑みを浮かべて尋ねた。

「えーっと、君は？ 見かけない子だけど、新入生？ もしかして、うちの可愛い子が何か迷惑を掛けたりしたかな？」

可愛い子。

確かにリンドブルムは可愛いが、それは見かけだけの話だ。

（迷惑ね。迷惑と言えば、迷惑を掛けられたのかも）

腹と頬の痛みを思い出した。

けれど、それをこの美形に訴える気にはなれなかった。

それよりも、幼いリンドブルムやてんとう虫では話にならなかったことをあれこれ聞ける絶好のチャンスかもしれないと、私は思い付く限りの疑問を彼らにぶつけることにした。

「あのお。私、秋野楓といいます。ここはどこなのでしょう？ 私、何も知らずにチーロとかいうてんとう虫に連れてこられたんです。私はここで何をすればいいんでしょうか？」

一思いに言い過ぎたのか、二人は顔を見合わせた。
そうして、苦笑を浮かべて私に向き直る。

「四つの世界がある。人間が支配する人間界、セリアン獣人が支配する獣人界、エルフ妖精が支配する妖精界。

そして、魔法力によって偽りの命を宿した精霊たちの世界……
機精界だ」

「この四つの世界の狭間に建つ巨大な塔がアイン・ソフ・アウル。ここです。そして、ソレンティアは、その塔の内部に存在する魔法使いの卵たちが集う学園です」

「ええっと、それはつまり…。ソレンティアって、魔法使いの学校だったの!？」

そう言えば、チーロが、ルティアがどうの、資格がどうの、と言っていたような気がする。

ルティア。

つまり、資格を持つ者というのが“魔法使いの卵”という意味だとしたら？

それは、魔法使いになる素質のある者という意味なわけで、楓は魔法使いになるかもしれないけどここに連れてこられたということになる。

「魔法使い？ 私が？」

あまりのことに言葉もない。

そんな私に銀髪の少年が柔らかに微笑んだ。

「おそらく貴女の入学手続きもすでに済まされているはずですよ。寮の部屋も決まっているはずですよ。どこの寮か、学生課に聞きに行ってみましょう」

一緒に来てくれるという二人に、いいんですか、と申し訳なさに聞き返した。

すると、明るく答えたのは金髪の青年の方だった。

「構わないさ。うちの可愛い子が世話になった礼、もしくは、迷惑を掛けた詫びさ。ところで、俺たちは君に名前を告げてなかったな。俺は響き谷の領主フリーゲルの子、イデアブルー 暁だ」

「私は弟の夕星です。ハルシオン。ちなみに、私たちはリンドの従兄にあたります。リンドの母親が僕らの父上の妹なんです」

へえ、と頷いた私は、彼らの耳がリンドブルムと同様に尖っていることに気が付いた。

「もしかして、あなたたちは人間ではないの？」

人間を普通とは言わない。

そう言ったチーロの言葉を思い出して、私はおずおずと尋ねた。

私のいた世界を人間界と呼び、他にも三つの世界があるのだとしたら、確かに、人間だけを指して“普通”とは言わないだろう。

私の問いに、イデアブルーはカラカラと笑い、ハルシオンは微笑

みを浮かべながら頷いた。

「はい、私たちは人間ではありません。エルフです」

4・種族の違い

（エルフ？）

私はイデアブルー、ハルシオン、そして、リンドブルムの顔を順繰りに見やった。

自分たち人間と、どこが違うのだろうか。
目立って違うと言えば、先がとんがった耳だ。
左右の横髪から、によつきり突き出ている。
あとは、すっと伸びた手足だろうか。

幼いリンドブルムは置いておいて、イデアブルーとハルシオンはどちらも背が高い。

いや、背がと言うよりも足が長いのだ。
腰の位置が欧米人のように高い。

そう、欧米人っぽい！

色の白い肌。

すっと通った鼻筋。

碧い瞳。
あお

さしずめ、北方系ゲルマン人という感じだ。

けれど、やはりどこか違う。

人間と比較するには、彼らエルフは美しすぎる気がする。

とすると、この美しさこそエルフの一番の特徴なのかもしれない。

「エルフは珍しい？」

凝視していた顔がニコリと笑みをつくって尋ねてきた。
ドキリとして、私は大慌てで首を縦に振った。

（珍しいというもんじゃない。初めて見たのだから）

「でも、人間とそう変わらないように見えます」

「そうかな？」

聞き返したようだが、答えを求めているわけではないらしい。
アイデアブルーは私の言葉に満足したようで、楽しげな笑みを浮かべた。

よし、と短く掛け声を放つ。

「学生課に行こうか。リンドもだぞ。学科の選択がまだだろ？」

「学科って、どういふものがあるんですか？」

すかさず尋ねると、穏やかな声が答えてくれる。

「学科は4つあります。戦闘魔法科、魔法史研究科、治癒幻惑魔法科、総合魔法科です。そして、各学科は更にいくつかのコースに分かれています」

「ソレンティアには、進級という概念がない。つまり、一年生、二年生といった括りがないんだ。だから、学生は学科を選ぶとそれぞれが専攻するゼミに所属して、学ぶんだよ」

「ゼミにもいろいろありまして、教師が開講しているもの、学生が自主的に行っているものがあります」

「教師の話を聞いているだけの授業を受けるのもいいけど、気の合う仲間同士で開いたゼミっていうのも、けっこう勉強になるんだ」

さてと、と言ってイデアブルーはリンドブルムを見下ろした。

ずっと両手をリンドブルムの両脇に差し入れると、よっ、という掛け声でリンドブルムを、まるで荷物を扱うかのように、肩に担ぎ上げてしまった。

「うわっ。何するんだ！ 降ろせ、ブルー！」

「何を言っているんだ。楽ちんだろ？ 優しい兄上様がリンドのことを運んであげているんだよ」

「絶対それは違う！ ブルーは優しくない！」

「どこが？ 優しいじゃないか。ほら、高い高い！」

言ってイデアブルーは、リンドブルムを高く持ち上げたり、ぐるぐると振り回した。

「ブルー！」

罵声が飛んだのも最初のうちだけ、そのうち、ぐーとも言わなくなつてリンドブルムはイデアブルーの首に両腕を回して大人しくなつた。

くすくすと、ハルシオンの口から笑い声が漏らされる。

「ブルーはね、リンド。また君を捜してあちこち駆け回らないといけなくなることを危惧しているんだよ。なんせ、私たちは昨日からずっと君を捜していたんだからね」

「リンドが入学してくると、父上から手紙があつたのに、まったくお前の姿が見えない。俺たちは本気で心配したんだぞ」

「…そんなこと、頼んでない」

ぶつくさと、ちつとも可愛くないリンドブルムを二人は、可愛い、可愛い、と言って頭をくしゃくしゃに撫で回した。

ふと、私の大荷物に気が付いて、ハルシオンがずっと腕を伸ばしてきた。

「持ちましょう」

「いえ。重いので」

二泊三日の修学旅行のために準備した荷物だ。

着替えや日用品だけではなく、遊び道具まで入っていて、それなりに重い。

とんでもないと断ると、ハルシオンはくすりと微笑んだ。

「だから、持つのでしょうか？」

さつと荷物を奪われてしまった。

（ひいー！。こんな美形に荷物を持たせるなんて、私ってば！！！）

申し訳ない気持ちいっぱいになりながら、私は彼らの後ろに続いて校舎の中へと移動した。

一面のガラス張りのホールは、豪奢な4本の支柱によって支えられている。

見上げると、遙か多角に天井が見えた。

下を見れば、黒光りする石タイルが一面に敷かれている。

ぴかぴかに磨かれており、上を歩くものの影を鏡のように映した。

「この建物は、中央校舎と呼ばれています。エントランスに入って、右手には学生課がありますが、左手の廊下を進むと、塔の上部へ上がるエレベーターホールがあります」

「寮に行くときは、エレベーターを使うんだ」

ハルシオンの言葉を継いだのは、リンドブルムを抱いているアイデアブルー！。

彼らは私に説明するついでに、リンドブルムにも言い聞かせているのだが、当のリンドブルムはアイデアブルーの首元に顔を押し付けて、聞いているか、いないか、いまいち分からない態度だ。

「この低層階には各学科の教室もありますから、学科が決まったら、よく確認すると良いですよ。図書館や学食、運動場といった施設もここにあります」

「寮の食事は無料だが、学食は有料だ。けれど、学食の方が品数が多くて、面白いメニューがたくさんある」

「今度一緒にしましょうね」

コツン、コツン、と足音がホールに反響する。
その広いスペースの右手に受け付けカウンターがいくつも設けられてある。

おそらくここが学生課の窓口なのだろう。

窓口の一つに、長い黒髪を三つ編みにした事務員らしい少女が座っている。

イデアブルーとハルシオンはその少女に向かって歩み寄ると、リズ、と彼女を呼んだ。

彼女はゆっくりとした動作で顔を上げた。
大きな眼鏡の奥で、ワイン色の瞳が瞬かれる。

私は、ハッとした。

彼女の首元に奇妙な継ぎ目を見つけたのだ。

「継ぎ目！」

思わず大声を上げていた。
ワイン色が向けられる。

気まづくなつて、私は彼女から目を逸らした。

ああ、と相づちを打ったのはイデアブルーだ。

「彼女はリズ・レアード。……ナノス・ヴェーダだ」

「ナノス・ヴェーダ？」

「フォウス・ヴェーダによって造られた労働階級のヴェーダのことです。見た目はフォウス・ヴェーダと同じですが、その体は無機物でできていて、完全な鋼鉄のアンドロイドです。顔と首の継ぎ目に縫い目のようなものがあるのが特徴なんです」

「フォウス・ヴェーダって？」

「高い知性を持つ支配階級の機精人^{ヴェーダ}のことです。体は有機物でできていますが、心臓はなく、代わりに魔法の力を動力源とした“核”が体の中心に埋め込まれています。彼らの顔には刺青^{いれずみ}のような痣がありますから、一目で分かると思いますよ」

機精人ということは、人間界や妖精界とはまた異なった世界……機精界の住人だということだ。

私はリズの顔を見つめて小首を傾げる。

（見た目は人間と変わらないのに……）

不意にリズが、バチン、と音の出そうな瞬きをした。
はっとして私は名乗った。

「秋野楓です」

「本日入学してきた方ですね。ご入学おめでとうございます。私は本部事務組織総務課付事務員、リズ・レアードと申します。これよりソレンティアの生活に関しまして簡単なご説明をいたします」

台本をそのまま読み上げているといった雰囲気だ。

そして、もし本当に台本が用意されているのだとしたら、“この大根役者”と言ってやりたい感じの口調で、リズは説明を始めた。

「まず服装についてです。新生には制服一式が支給されますが、基本的に服装は学生らしい範囲内で自由となっております。

着替えの購入を希望される場合は、タウン・エスペランサの衣料店『ブティック“アルマ・フロマ”』にて行ってください。次に、寮個室についてです。ソレンティアの学生には各寮に個室が与えられます。必要最低限な家具はすでに用意されていますが、他にご入りの場合は、タウン・エスペランサの『モダス・ショップ』にてご購入下さい」

それから、とリズはおもむろに冊子を取り出した。

「その他の詳細は、この冊子に書かれてある通りですので、よく読

んで下さい。以上、説明を終わります。アキノさんの所属寮は、ネツ阿克寮です。

入寮手続きはすでに完了していますので、このまま向かっていただいて構いません」

「ネツ阿克寮？」

「おい、良かったな。リンド、お前の寮もネツ阿克寮なんだぞ」

リンドブルムの頭をばんぽん叩いてイデアブルーが言うと、リンドはするりとイデアブルーの腕から滑り降りた。

「リンド、ネツ阿克寮か？」

「そうだよ。よかったね、さっそく寮の知り合いができて。…カエデさん、リンドのことをくれぐれも頼みます。いたずらが過ぎたら、ビシバシ叱って下さって構いませんので」

ぺこりと頭を下げるハルシオン。

イデアブルーもリンドブルムの肩に手を置いて言う。

「うちの可愛い子のことを頼むよ」

うーん、と頭を悩ませたのは、私だけ。

自分の方こそ誰かに頼み込みたい気分なのだ。

未だに右も左も分らない。

不安てんこ盛り。

一寸先は闇な自分に、頼まれても困る…。

私が曖昧な笑みを返すと、それで、とイデアブルーはリンドブルムの顔を上から覗き込んだ。

「学科はどうするんだ？」

「んーっと」

リンドブルムは精一杯背伸びをしてカウンターに顎を乗せている。その眉間に皺が寄った顔の下敷きになっているのは、各学科の説明が記載された学科申請用紙。

4つの学科から所属する学科を選べというのだ。

私もリズから用紙を受け取って、リンドブルム同様に眉を顰めた。

（戦闘魔法科、魔法史研究科、治癒幻惑魔法科、総合魔法科。…何が何やらサッパリだわ）

戦う自分の姿を思い浮かべてみる。

どこぞのテレビゲームの魔法使いキャラみたいにローブを着て、杖を構える。

（ダメだ。ピンとこない！）

同様に、僧侶キャラも思い浮かべてみるが、やはりダメ。

魔法史研究科は何やら小難しそうだし。
そうになると、一番無難そうな総合魔法科だろうか。

そう思った時、リンドブルムがペラリと紙音を鳴らしてリズに申請紙を提出した。

「リンドとカエデは戦闘魔法科だ」

「は？」

嫌な予感がして自分の手元を見る。

（ない！）

さっきまで目の前のカウンターに置いてあったはずの学科申請用紙がない！

あろうことが、リンドブルムは楓の申請用紙にも記入して、

リズに提出してしまったのだ。

5・ネツアク寮へ

「な、何てことすんのよ!」

「喜べ。リンドが決めてやったぞ。カエデの悩みを一つ解決してやったのだ!」

胸を反らす子どもは、実に誇らしげである。

(このクソガキ!)

私は顔を赤らめて声を荒げた。

「なんでよりもよって戦闘魔法科? 私は総合魔法科にしようと思っていたのに!」

「リンドが戦闘魔法科に決めたからだ。カエデはリンドと一緒にきつと楽しいぞ」

「楽しいかもしれないけど……。いや、違う! そういう問題じゃない!!!」

私は慌ててリズに振り向いた。

「今の私の申請用紙、間違いだから返して！」

「それはできません。すでに受理されました」

「なんでよ！　今、あなたも見ていたじゃない。あれは私が書いたものじゃなくて、リンドが書いたものなの」

「しかし、アキノ様のお名前で提出されました。アキノ様は戦闘科の所属となります。すでに手続きは完了いたしました」

「なっ！」

早すぎはしないか。

いや、そんな疑問よりも、どう考えてもおかしい。だって、リズは見ていたはずなのだ。

リンドブルムが私の紙に書くところを！

「だいたいなんで本人以外から受け取っちゃうの！　どう考えてもおかしいわよ」

リズは黙り込んだ。

すまし顔で、手続きはすべて完了したと言っている。

そして、さつさと寮に行け、と言いたい顔だ。

「カエデ、こうなってしまっでは仕方ないよ。ナノス・ヴェーダは融通が利かないから」

「すみません」

仕方がないと言ったのはイデアブルーで、
ぺこりと頭を下げたのはハルシオンだ。

当のリンドブルムは素知らぬ顔。

自分がいったい何をしでかしたのか分かっていないという態度だ。

私は両手を腰にあてて、リンドブルムの前に仁王立ちになった。

「私の書類をどうしてリンドが勝手に書くのよ。ちょっとひどすぎない？」

「リンドはカエデのためにやった」

「どこがよ！ もう！謝りなさいよ！ あなたは私に対してひどいことをしたの。謝って！」

リンドブルムの眉間に皺が寄る。
うー、と低く唸って、困り顔だ。

「えーっと、カエデ。本当に申し訳ない。ここは俺が代わりに謝る

から、うちの可愛い子のこととはどうか許して欲しい」

「私からも謝ります。本当にすみませんでした」

どうしてリンドブルムが謝らず、彼らが頭を下げるのか。

深々と頭を下げるイデアブルーと二度目の謝罪をするハルシオンに、私はますます腹が立った。

（今、謝るくらいなら、リンドが私の紙に書いている時に、どうして止めてくれなかったのよ！）

けれど、いつまでも頭を下げ続けている彼らのために、もういい、と言わざるを得なかった。

ふいっと横を向くと、投げやりに言葉を吐いた。

「もういいです。頭を上げて下さい」

「本当になんてお詫びしたらいいか」

「お詫びなんて……」

彼らにどれだけ詫びられても、当のリンドブルムの態度がああである限り、まったくもって無意味なのだ。

寮まで案内を買って出てくれた彼らに従って、私は学生課のカウンターから離れた。

豪華なエントランスを左手に眺めながら廊下を真っ直ぐに進むと、
こぢんまりとしたホールに行き着く。

エレベーターホールである。

両脇の壁に3つずつ扉が並んでいて、ハルシオンは一番手前の扉
の前に立った。

扉の脇に三角ボタンがある。
長く細い指がそれを押すと、ランプが点いた。

しばらくあって、エレベーターの到着を告げるベルが軽く響き渡
った。

ランプが点滅して扉が開く。
ハルシオンは振り返って、私に中に入るようにと促した。

リンドブルムを抱えたイデアブルーが入り、最後にハルシオンも
中にはいると、扉は自然に閉まった。

エレベーターが上昇を始める。
その微かな振動を感じながら、不思議なことに気が付いた。

「ボタンは？」

周囲を探してみるが、行き先指定ボタンが見あたらない。
扉の上を見ると、階数表示もなかった。

ああ、とイデアブルーは頷く。

「このエレベーターは乗った者を、勝手に目的の階まで運んでくれるんだ。だから、ボタンはいらないんだよ」

「まさか」

そんなわけがない！

…と、本日何度そう思ったことだろうか。

いい加減に疲れてきたので、

そついうこともあるかもしれない、と適当に相づちを打った。

やがて上昇速度が減速して、がこん、という小さな振動と共にエレベーターが停止した。

扉が開いた。

すると、なんとそこは森の中だった。

（は？　なんで森？）

木々の中に細い小道が通っている。

足を踏み出すと、さくりさくりと土が鳴り、その地面には、繁る緑の天井の隙間から漏れてきた陽の光が模様を作っていた。

模様は木々が風に揺れる度に大きく変化する。
まるで万華鏡だ。

どこかからか小鳥のさえずりが聞こえてくる。

（ここって、塔の中だったよね？）

つい数秒前にエレベーターから出てきたことさえも忘れそうになった。

（これも“そんなわけがない！”の一つなんだわ。ホントあり得ないんだから）

塔にバカにされているようで、ムツとした表情をつくりながら、私は小道を進んだ。

「この道を真っ直ぐ行つた先がネツアク寮だ」

それは木造の建物だった。

一昔前のお金持ちが住んでいたような洋館で、石造りの塀を周囲にめぐらせている。

入り口は黒い鉄製の門。

その門の前に人影が見えた。

歩み寄っていくと、同じくらいの年頃の女の子だということが分かった。

私たちの姿に気づき、寄りかかっていた門から背中を離して、にっこり笑みを浮かべた。

「あなたがカエデ・アキノさん？」

駆け寄ってきて、楓の前に立った。

「私、黒瀬彩^{くろせ あや}。寮長に頼まれてあなたを案内することになっているの。ほら、私も日本人でしょ。年も同じくらいみたいだし。適役って感じなの」

まるで以前からの友人に話しかけるように、明るい声と大きな身振りで話しかけてきた。

「私のことは、“彩ちゃん”でいいから。私も“楓ちゃん”でいい？ ……ところで、なんでお供がいるの？」

エルフたちに気が付いて、彩は首を傾げた。
どうやら彼女は、右も左も変わらない私が心臓をドキドキさせて
寮の門までやってくると想像していたらしい。

ところがどっこい。

イデアブルーとハルシオン、そして、ちっさいオマケまで引き連
れている。

「っていつか！ その小さい子、もしかして、リンドブルムって子
じゃない？」

彩はリンドブルムを人差し指で指して声を張り上げた。
眉を顰めたのはエルフたち。そりゃあそつだ。
人を指差してはいけません。

「なんで寮長じゃなくって私が案内するかっていうと、うちの寮長
が機嫌を損ねて部屋に引き籠もっちゃったからなの。その機嫌を損
ねた理由ってというのが、リンドブルムのせいなのよ」

「なんでリンドのせいなんだ？」

身に覚えのないリンドブルムは眉間に皺を寄せる。

リンドブルムは昨日ソレンティアに着いたとはいえ、チー口を捕
まえようと、ずっと門のところにいたのだ。

当然、ネツアク寮に足を踏み入れたことはないし、その寮長とや

らにも会ったことはない。

機嫌を損ねるようなことはしていないはずだ。
ところが…。

「うちの寮長はね、入寮してくるあなたを案内しようと、昨日ずっとあなたのことを待っていたのよ。響き谷の領主の姪だって聞いていたし。寮長もエルフだから、それなりに敬意を払って接しないとね、って言っていたのよ」

それなのに、と彩は顔を顰めた。
リンドブルムはイデアブルーの腕から飛び降りると、頬を膨らませた。

「リンドは案内してくれなんて頼んでない」

「それでもそれが寮長の仕事なのよ。すっかりご機嫌を損ねた寮長は今朝から一步も部屋を出ようとしないの。困っちゃう」

彩は、やれやれと、首を左右に振ると、私を寮の門の中へと促した。

続いて中に入ろうとしたリンドブルムの小さな肩をイデアブルーの手が抑える。

「リンド、案内をしてくれる人がいるみたいだから、俺たちはこれで帰るな？ いいか？ 俺はティファレト寮に所属している。ハル

はケセド寮だ。何かあったらすぐに俺かハルのところに来るんだぞ？」

「ブルーがティファレト寮で、ハルがケセド寮だな」

リンドブルムはイデアブルーとハルシオンの顔を順に見やって、こくん、と頷いた。

それから、とイデアブルーは大まじめな顔をリンドブルムに向けた。

「ピンチの時は大声で俺を呼ぶんだぞ。“兄様たすけてー”ってな」

「……」

心の底から、大まじめである。

リンドブルムは嫌そうな顔でイデアブルーを見上げた。

「ピンチって、トイレの紙がないとかか？　それでブルーを呼べば、何か解決するのか？　ティファレト寮からトイレットペーパーを持って駆けて来るつもりか？」

「リンド、それじゃあ俺はただの便利屋じゃないか。だいたい、お前のピンチは、トイレに紙がない時のことを言うのか？」

「ブルーはね、リンド。君のヒーローになりたいんだよ」

くすくす笑ってハルシオンが助け船を出した。
リンドブルムの黒髪を撫でると、私に柔らかな視線を向けてきた。
私の荷物を差し出しながら、にこりと微笑む。

「カエデさん、リンドのことお願いします。アヤさんもどうぞよろしく」

リンドブルムが門を通ると、二人は置いて行かれたような表情を浮かべてその場に立ち尽くし、リンドブルムの小さな背を見送っていた。

私は何度か彼らを振り返り、ここまで送ってくれた礼を告げたが、リンドブルムは一度も振り返ることなく、寮の中へと入っていった。

6・寮案内

やや古めかしく洒落た印象のある焦げ茶色の扉を、両手で押すようにして、彩は開いた。

そして、ぴよこんと跳ねて楓を振り返る。

「ようこそ。我らが翠玉の寮、ネツアク寮へ」

言って両腕を広げると、入って入って、と大きくて招いた。

エントランスの床には、深緑色の絨毯が敷かれている。
踏みしめると、靴が浅く沈み、音をすべて呑み込んだ。

「まず、ここ、エントランスは男女共有なの。そっちの廊下を進むと、男子寮があるよ。女子寮はこっち」

彩は廊下を左に曲がった。

白い壁に視線を向けながら、私も続く。

ふと見やった窓の外は森だ。

寮はぐるりと木々に囲まれているらしい。

けれど、暗い印象はない。

むしろ大きな窓から、さんさんと陽射しが差し込んできて、とて

も明るかった。

足下の色濃い影に目を落として、私はふと気が付いた。
バツと、後ろを振り返る。

「なんで、リンドまでこっちについてくるの？ 男子寮はあっちだ
って、彩が説明したじゃないの」

「なんで、って？」

リンドブルムの頭が、こてん、と傾げられる。

「リンドは、男子寮なんかには用はないぞ？」

「用はないって……。だって、リンドは」

（男の子じゃないの！）

そう言うと、リンドブルムは頬を膨らませた。
ダン、ダン、ダン、と、フローリングの床にブーツの踵を叩き付
け、小さな口を大きく開いた。

「リンドは、男の子じゃない！」

「ええっ」

驚いたのは私だ。

リンドブルムの幼い体を上から下へ、下から上へと見回した。

ぺったんこの胸。

幼さを考えると、これは判断材料にはならない。

黒髪は肩に着くか着かないか。

男の子にしては少し長めで、女の子にしては短いという長さだ。

むしろ、イデアブルーやハルシオンの方が長く、特にハルシオンは銀髪を腰まで真っ直ぐに伸ばしていた。

エルフの髪の長さも、性別の判断材料にはならないみたいだ。

半袖から突き出た腕は枝のようで、短パンから伸びている脚も折れそうなくらいに細い。

小作りな鼻。細く長い眉。

瞳は深い湖の蒼^{あお}で、大きく輝かせている。

（そっか……。そう言われてみれば、女の子なのかもしれない）

それにリンドブルムは、自己紹介してくれた時に、誰々の姪とか言っていたような気がする。

それなのに、どうして男の子だと思ったのだろうか。

女の子だと分かったとたん、男の子だと思っていたことの方が不思議になる。

（あ、そうか…）

腹蹴りだ、と納得する。

リンドブルムは、女の子だと判断するには、わんぱく過ぎるのだ。

「もっとお淑やかで、可愛らしかったら間違えなかったのに……」

恨めしげに言うと、リンドブルムは眉を寄せた。

けれど、無言で瞳を瞬かせただけ。

だって、と言ったのは、彩だった。

「私、言ったよ。リンドちゃんは昨日うちの寮長を待ちぼうけにしたらだって。うちの寮長。つまり、ネツアク女子寮のオードリーを、ね」

オードリー・エブラール。

歩く西洋人形と呼ばれる美少女で、年は14歳。

ソレンティアに名の知れた我が儘娘なのだと、彩は説明した。

我が儘。

なるほど、通りで、リンドブルムに待ちぼうけを食らったくらいで機嫌を損ねてしまうわけだ。

機嫌一つで寮長の仕事を放棄してしまうなんて、普通、責任ある立場にいる者のすることではない。

けれど、12歳から26歳までの学生が集まる中で、14歳で寮

長に選ばれるくらいなのだから、きっとオードリーはよほど成績優秀な学生なのだろう。

「だからね、リンドちゃんは女の子なんだよね」

「リンドちゃん？」

リンドブルムは、嫌そうな顔をして彩を見上げた。

けれど、何？ と笑顔を返してきた彩に毒気を抜かれて、“ちゃん”付けの訂正を諦めたようだ。

ふいつ、とそっばを向いた。

やがて深緑色の絨毯が終わり、若草色に変わった。

再び彩が、ぴよこんと跳ねて楓を振り返った。

「ここから先が女子寮だよ。楓ちゃんとリンドちゃんの部屋は二階だから、この階段を上るんだよ。

階段はこの廊下の先にもあるからね。こっちが南階段で、あっちにある階段は北階段って、呼ばれているよ。おーけー？」

二人に確認すると、彩は女子寮の入り口すぐにある階段に足を掛けた。

黄金色に輝く手摺りに手を触れさせながら、私とリンドブルムも彩の後に続く。

踊り場に肖像画が飾られている。

貴婦人が花を手に、椅子に腰掛けている絵だ。

(え)

驚いたのは、その貴婦人の耳が普通ではなかったからである。
普通…。

人間であるのなら顔の左右に耳がついている。

エルフも同じらしく、形は異なるけれど、頬の横に耳がある。
だが、その貴婦人の耳は頭のとっぺん。
まるで三角リボンを着けているかのように、ネコ耳がついている
のだ。

「…ギャグ？」

心の底から思った。

ごく真面目なタッチで描かれた絵画だ。

すまし顔の貴婦人もとても美しく描かれている。

それなのに、なぜかネコ耳。

これは作者の冗句か、誰かのいたずらとしか思えなかった。

目を大きくして肖像画を凝視していると、その背後を何者かがス
ッと通った。

(は?)

ちらりと視界に入ったその何者かの頭に、これは何かの錯覚なのか、ネコ耳が生えていたように見えた。

慌てて振り返る。

制服を着た女の子が鼻歌交じりにエントランスの方へと歩いていく姿が目映った。

ごく普通の女の子だ。

だが、その頭にはネコ耳が生えていた！

「な、なんで！？」

視線を落とすと、スカートから尻尾が出ている。

ちょうどお尻の部分に穴があいているらしく、そこから蛇のように右へ左へと揺れている。

「何あれ！ コスプレ？」

目を白黒させながら大声を出すと、ああ、と彩はすぐに頷いた。

「レフェシアンセリアンの女の子だよ。レフェシアンっていうのは、獣人界に住む獣人の種族の一つで、あの子みたいにネコ耳やネコの尻尾が生えているのが特徴なの」

「ネコ耳、モエ……」

レフェシアンとやらの女の子の後ろ姿を見送りながら、ぼそりと呟いた。

あのネコ耳がどういう風に生えているのかは、大いなる謎である。

顔のつくりは人間と変わらないようだから、頭部の骨は人間と同じつくりなのだろう。

そうだとすると、ますますあの位置に耳があることに疑問が大きくなる。

横髪で隠されていて確認できなかったが、本来耳があるべきところがどうなっているのか、じっくり観察してみたいものだ。

…とはいえ、ネコ耳は萌^{もえ}である。

彩は私が漏らした呟きを聞き逃さなかったようだ。

あはは、と軽く笑って言った。

「モエよね。…でも“モエ”なんて言葉。人間の、しかも日本人にしか通じないからね。モエモエ言う時は、どうぞ私の前で」

彩がおどけたように言うので、私は、恐れ入ります、と丁寧に頭を下げた。

そして、二人は顔を見合わせ、声を立てて笑った。

「やっぱり日本人って少ないの？」

「どうかなあ。多くはないと思うんだけど、そもそもソレンティアにどのくらいの学生がいるのか分からないのよね。とにかく大勢いるみたいんだけど」

「へえ」

階段を上り終えて二階に着くと、彩は廊下の左右に並んだ扉のうち左列の扉を目で追いながら廊下を進んだ。

一つ。

二つ。

三つ、と扉を数える。

八つ目の扉の前まで来ると、彩は楓を振り返って、にこりと笑みを浮かべた。

「ここが楓ちゃんの部屋だよ。どうぞ、中に入って」

ガチャリ、と扉が開く。

中は八畳ほどの広さがある部屋だった。

奥にベッドが置かれ、壁際にはタンス。

そして、机と椅子が一つずつ置いてある。

学生課のリズが言っていた通り、荷物を収納できて、勉強ができ、夜寝られるだけの家具は用意されているようだ。

私が持ってきた荷物をピンク色のタイルの上に置いたのを見て、彩は苦笑した。

「ぶっちゃけて言うけど、この部屋、趣味悪いから」

「うん。思う」

私は即答した。

基本的な家具はある。

だから、文句を言えた立場にはないが、一面ピンクのタイルは頂けない。

頭の中までピンクワールドになってしまいそうだ。

「リズも言っていたと思うけど、家具を買い揃えるのなら、タウン・エスペランサの『モードス・ショップ』だよ。今度案内してあげる。とりあえず今日はこの部屋で我慢して。次はリンドちゃんを部屋に案内するね」

実はね、と笑顔を作った彩は、私の部屋から廊下に出ると、楽しそうに数歩大股で歩いた。

「はい。ここがリンドちゃんの部屋！」

「とっ、隣！？」

驚いたのは私だ。

思わず大声を上げてしまった。

そうそう、と言って、彩は部屋の扉を開いた。

中はやはり八畳ほどの部屋で、基本的な家具が置かれている。
ピンクタイルも健在だ。

「偶然というか、必然というか。そりゃあ、1日違いで入学してきたんだもの、同じ寮に入ったのなら、隣の部屋にもなるわよねえ」

一理ありそうな説明だ。

「そういうわけで、二人とも仲良くな。じゃあ次のところを案内するよ。…って！ リンドちゃん、荷物は？」

彩はリンドブルムが手ぶらで入寮してきたことに今更ながら気が付いた。

リンドブルムは彩の視線を受けて、胸を大きく反らした。

「荷物なんてない！ リンドは身軽だ！」

うん。

それは偉ぶれるところなのだろうか。

些か疑問というか、むしろ意味不明だ。

彩も目を大きくして聞き返した。

「手ぶらで入学してきたの？ ホントに何も荷物ないの？ えー。すごい」

すごいと言われて、リンドブルムの胸は更に反らされたが、たぶん今の“すごい”は真実“すごい”という意味ではないと思う。どちらかというと、“あり得ない”の意味に近いと思う私だ。

廊下を進みながら、彩は人差し指を立てた。

「トイレは共有だよ。各階ごとにあって、さっきの階段の脇にもあるけれど、廊下のちょうど真ん中あたりにもあるし、向こうの端、つまり北階段の脇にもあるんだよ。……ほらね？」

直線廊下の行き止まりまで来ると、彩の言うとおり、共有トイレがあった。

その脇に階段。3人は一階に下りた。

「そつちに行くとき食堂だけど、まずはこっちに来て。バスルームがここにあるから」

言われて覗いてみると、赤いのれんが下がった入り口がある。のれんをくぐると、大広場のようになっていて、細長いロッカーがずらりと並んでいた。

「ここのお風呂、ちょっとすごいんだよ。広いのは当たり前！ サウナやジャグジーもついているの！」

ただし、と彩は続けた。

「洗面用品やタオルは、各自持参だよ」

じゃあ次、と言って、彩はバスルームを出て、先程の階段の下まで戻った。食堂へと向かう。

レリーフの凝ったアンティーク調の扉を押し開くと、天井の高い空間が現れた。

広々とした部屋に縦三列に並べられた長机。

ちらほらと、学生たちが食事を取っている姿も見える。

「朝食は7時から8時半。昼食は11時半から13時。夕食は18時半から20時だよ。でも、授業がある平日は、みんな昼食はキヤ

ンパスで食べるんじゃないかなあ。私もそうするし」

アヤ、と呼ばれて彩は声の方に振り返った。

背中から白い翼の生えた女の子が彩に向かって手を振っている。

「今、新人生に案内してるのー！」

彩は大声を張り上げて手を振り返した。

そして、私に向き直る。

「今の友達」

「背中から翼が生えていたように見えただけど？」

「あの子も獣人だからね。ルーメペンナリアンっていう種族だよ。あとで紹介してあげる」

「うん。ありがとう」

「えーっと、じゃあ、最後はこっちね」

食堂を突っ切って、入ってきたのとは別の扉から出る。

入ってきた扉は西側の扉だが、こちらは南側の扉だ。

すると、その扉は、落ち着いた雰囲気のある部屋に続いていた。

7・ウサギの耳

大きなソファが置かれ、中央にはローテーブルが置かれている。そして、壁にはなんと暖炉があった。

茶色とオレンジ色の煉瓦が交互に積み重ねられた暖炉は絵本の挿絵そのもので、私は、わお、と歓声を上げて暖炉に駆け寄った。

「この暖炉、本物？ 火つけてもいいの？」

「冬はね」

「初めて見た！」

「私もここに来て初めて見たよ。寒い国から来た子につけかたを教えて貰ったんだ。ここはね、サロンだよ。男女共有スペース。自由に使えるからね」

本を読んだり、おしゃべりを楽しんだり、宿題をしたりするのだという。

そして、と彩は更に先にある扉を指差した。

「あの扉の向こうはエントランス。つまり、入ってきたところね。ぐるりと回って来たわけなんだけど、分かる？」

「うん。だいたい」

とりあえず自分の部屋の場所とバスルーム、食堂の位置関係は頭に入れたと答えると、彩は肩を竦めて、それしか案内した覚えがないよ、と笑った。

「じゃあ、あとは寮則の説明ね。一つ、門限は基本21時。それを過ぎる者は原則寮長に届出を出す決まりである。一つ、食堂の利用は……」

まるで条文を読み上げているようだな、と思ったら、サロンの壁に『寮則』が掲げられていた。

彩は本当にそれを丸読みしていたのだ。

「一つ、消灯時間は、特に設けられていない。一つ、ペットの飼育は特に禁じられていないが、近隣迷惑になるものは原則不可。一つ、男女の寮の行き来は、原則不可とする。……って、こんな感じだよ」

「うん。分かった」

彩の声に合わせて文字を目で追っていた私は、額縁に収められた寮則を見つめたまま頷いた。

リンドちゃんは？ と彩がリンドブルムの顔を覗き込むと、リンドブルムも、こくりと頭を動かした。

「それじゃあ、これで私からの説明は終わりね」

「案内してくれてありがとう」

「困ったことが起きたら、いつでも言ってね。もし私がいなかったら、そこらにいる人を捕まえていいからね。同じネツアク寮で生活しているんだから、みんな家族みたいなものだよ」

「仲が良いんだね」

「うん！」

大きく頷いてから、彩は楓に顔を近付けて囁く。

「本当のことを言うと、そうでもない人もいるけどね。でも！そういう人ってというのはごく一部だから、安心して」

分かった、と言うと、彩はにっこりと微笑んだ。
そして、そう言えば、と首を傾げる。

「2人は学科どこにしたの？」

「戦闘魔法科だ」

「戦闘魔法科？」

リンドブルムが答えると、彩は瞳を大きくした。
そりゃあ驚くだろう。

見るからに元気っ子なリンドブルムはともかく、私はごくごく普通の女の子だ。

学校の勉強も運動も人並み程度にしかできない。
特に、体育で目立った覚えがない。

走っても、ビリにはならないがトップにもなれず、球技でも、群れをなしてワーワー騒ぐだけのその他大勢だ。

“戦闘”なんて物騒な言葉とは縁遠い生き方をしてきた。
なのに！ なぜ！

戦闘魔法科に所属することになってしまったのだろう！！

ジトリとリンドブルムを見やった。

そして、なんで、と疑問を口にしようとした彩を、片手を振って制した。

「聞かないで。いろいろあったの。ものすごくいろいろ！」

「わ、わかった…」

力一杯拒絶すると、彩は勢いに押されて深々と何度も頷いた。
話題を変えてくれる。

「時間割を決めないといけないんだけど、私は総合魔法科なんだ。

だから、戦闘魔法科の授業のアドバイスはできないの。ごめんね。
あとで私の知っている戦闘魔法科の子に頼んであげる。あと二時間
もすれば、授業が終わってみんな寮に戻ってくると思うから」

「じゃあ、それまで荷物を片付けていようかなあ」

「うん、そうして。それで、二時間経ったら、ここに戻ってきてね。
たぶん、ウサギの耳が生えた男の子が来ると思うから」

「ウサギの耳？ ウサギって、あのウサウサした世間一般的に“可愛
い”って言われている生き物？」

「うん、それ。その子も獣人なの。格好いいよ」

私は、ウサギの耳が生えている男の子をイメージしようとしたが、
どう頑張っても、バニーガール衣装を着たオカマになってしまい、
思いつきり顔を顰めた。

しかも、その“ウサギの耳が生えた男の子”とやらは、“格好い
い”らしい。

たちまち脳内で、格好いいを目指したウサギがボクシングをやり
始めたから、大変だ。

赤いグローブを両手にはめて、キラリと歯を光らせる。

（だめだー。無理！）

ぐったりとした思いで、私は想像力を膨らませることを断念した。
ありがとう、と改めて彩にお礼を言い、荷物を片付けるためにリ
ンドブルムと連れだって自室に向かった。

部屋の前でリンドブルムと別れて、私は自分の部屋に入った。

ピンクタイルにがつくりした気持ちになる。
早いところ、自分の空間にしてしまいたい。

この部屋とはどのくらい長い付き合いになるのか知れないのだから。

ひんやりと冷たいタイルに腰を降ろすと、旅行鞆を引き寄せた。
修学旅行のために用意した荷物を中から取り出すと、不意に胸が
締め付けられた。

トイレに行っただけ戻ってこなかった自分を、友人たちや先生は
どう思っただろうか。

先生は青ざめたに違いない。

もしも先生が、私のようにソレンティアの存在を知らなかったら、
自分の生徒が突然消えた事実のパニックになって、修学旅行どころ

ではなくなつたかもしれない。

何も言わずに去つた私を、友人たちはヒドイと言っているかもしれない。

次にいつ再会できるとも知れないのに、さようならも言えなかったのだから。

（お母さん、どう思ふかな。お父さんも）

京都と奈良に行く予定だつた娘が、突然ソレンティアに行つてしまつたのだ。

驚くだろつことは間違いない。

（もう連絡がいつたかな）

担任の先生が顔を真っ青にさせて母親に電話をしている光景が目に見えた。

『娘さんが京都駅で姿が見えなくなりました。はぐれたようです』

申しわけございません、と電話なのに頭を下げている姿を想像しながら、私は洋服を掴んで立ち上がった。

洋服ダンスの前に立つと、開き戸を開いた。

薄茶色のダンスは下の方は引き出しになっている。

下着は引き出しにしまい、上着はハンガーに掛けて上に仕舞つた。

遊び道具や貴重品もタンスの中にしまう。
他にしまうところがないからだ。

財布は下着と下着の間に隠した。

最後に旅行鞆をタンスの上に投げ乗せれば、片付けは終了だ。

感覚的にはすぐに終わってしまった気がするのだが、廊下の外に顔を出し、廊下の壁に掛けられた時計を見れば、30分も経っていた。

（リンドは片付いたかなあ）

不意に心配になってリンドブルムの部屋の方に視線を向けた時だった。

信じられない物を見付けて、驚愕する。

タンスがズタボロになって廊下に転がっていたのだ！

「何あれ！？」

駆け寄ると、タンスだけではない。
机と椅子も無惨な姿となっていた。
机なんて、もはや机ではない。板と棒だ。

「どうしたの、リンド？」

リンドブルムの部屋の扉を叩くと、すぐにリンドブルムが顔を出した。

にっと笑って、嬉し顔だ。

「カエデ、リンドの部屋に遊びに来たのか？」

「遊びに来たんじゃなくって、これはどういふことなのか聞きに来たのよ」

これ、と言って家具の残骸を指差した。

リンドブルムは、ああ、と言って私を部屋の中に入れた。

「いないから捨てただけだ」

「いないって……」

リンドブルムの部屋を見渡して、言葉に詰まる。

部屋のと真ん中にベッドが置いてある。

そして、それだけ……。

他にはいっさい物がないのだ。

「よく考えた？ 本当にいないの？ 後々必要になるかもよ？」

「いらない。響き谷のリンドの部屋だって、こんな感じに何も無いぞ。本当はベッドもいらない。リンドは床の上で寝たり、木の上で寝たり、寒い時はブルーやハルのベッドで寝ていたからな。けど、ここではブルーやハルにベッドに入れて貰えないから、冬に備えてベッドだけは残しておいた」

リンド偉い、と言いたげな顔でリンドブルムは胸を反らした。

（いやいや。偉くないから、ちつとも！）

第一、木の上で寝てたって、どんな野生児だ。

これら家具も殴ったり蹴ったりしてぶっ壊したのだろう。
呆れてものが言えなくなる。

大きなため息をついてから、私は、それで？ と続けた。

「どうするのよ、あの残骸。壊しちゃったら、もう誰も使えないじゃないの。寮の備品なのよ？」

「あ、そっか。リンドがいなくなっても、他の誰かが必要かもしれないな。なかったな」

「そうよ」

「リンドは燃やそうと思ったんだ。燃やしやすいように小さくしたんだ。小さければ運ぶのもラクだ」

「なるほどね。けど、リンドは物を大切にすることを覚えなさい。とは言え、あんなっちゃ仕方ないわ。リンドの考え通り、燃やすしかないわね」

私は廊下にしゃがみこんで、木片を集めた。

長さを揃えてまとめる。

リンドブルムも真似するように、隣にしゃがみ込んで木片を集め始めた。

集めたものを紐で括りながら、リンドブルムを見やる。

突拍子もないが、根は素直なのだろう。

ちゃんと聞いてやれば、なるほどリンドブルムにはリンドブルムの考え方があるようだ。

それが正しいか否かは別に、言っていることとやっていることが直結していて、なかなか筋が通っている。

（誰かがちゃんと教えてあげれば、もうちょっとどうにかなるのに）

やって良いことと、やってはいけないことが、まるで分かっていない。

よほど甘やかされて育ったのだろう。

私は力を込めて、ぎゅっと、固く紐を結んだ。

火をおこして良い場所はないかと、彩に聞きに行くと、事情をすべて把握した彼女は、寮の裏手にあるゴミ捨て場に捨てればいいと教えてくれた。

リンドブルムとゴミ捨て場に行き、廊下を綺麗に掃除して、時計を見上げると、ちょうど二時間が過ぎていた。

慌てて一階に下りてサロンに向かうと、彩の言っていた通り、ウサギの耳が生えた男の子が私とリンドブルムを待っていた。

そう来たか、と思う。

彩の言っていた通り、格好いい。

すらりと背が高く、渋谷を歩いていそう感じの男の子だ。

だが、しかし。

ふわふわした柔らかかそうな黒髪からまっすぐ上に伸びるモノ。

（なんだ、あれ。可愛い……）

じっと見つめていると、可愛いそれはびくびくと動いた。

（すごい！ 本当に生えているんだ。神経繋がってる！）

感動しながら、私は“ウサギの耳が生えた男の子”に軽く会釈した。

「秋野楓です」

「俺はラック。ラック＝ロット＝ブラックテイル。年は19歳」

「うそ！ 見えない！」

「よく言われる」

あはは、と笑い、ラックは気を悪くした様子もなく、私とリンドブルムにソファに座るよう促した。

大きなソファの隅に腰を降ろして、ようやく私はその人物に気が付いた。

こちらはウサギの耳ではなく、ネコの耳が生えた男の子だ。

「レフェシアン？」

やや吊り目がちな瞳を向けられる。

その瞳のせいか、少し怒っているように見えた。けれど、顔の作り一つ一つは可愛い。

ちっちゃい鼻に、ちっちゃい口。

年は同じくらいだろうか。

まだ幼さの残った顔は女の子みたいだ。

「オレは、はるき。そっちの小さいのは？」

「リンドよ」

「響き谷の領主フリーユージェルの姪、翼ある者だ」
リンドブルム

リンドブルムが私の隣に腰掛けると、ラックははるきの隣に腰を降ろした。

「自己紹介も済んだことだし、さっそく時間割の組み方について説明させて貰うよ。…と、その前に、お腹すいてない？」

そう言って、ラックは鞆からトマトを二つ取り出した。

「それでも食べながら話をしようか」

（え。トマトを？）

手渡された赤くて丸いものを見下ろしながら、私は啞然とした。
まるごとトマトである。

一歩譲って、切って皿に盛ってあるのなら“有り”だと思う。
だけど、これは…。

8・戦闘魔法科

（もしかして、丸嚙りを要求されてる？）

丸嚙りが嫌だというわけではないが、

初対面の相手を前にしてするようなことではないと思っている。

汁が飛び散ったり、口から垂れたりしたら、みっともないからだ。

けれど、よく考えてみれば、

朝早く家を出て以来食事というものをしていない。

朝食は取った。

けれど、急いでいたから、おにぎり一つだ。

そのあと、ソレンティアに連れてこられてしまい、

そのごたごたの中、昼食を取るのを忘れた。

今は夕方である。

空腹を思い出して、ごくりと咽を鳴らした。

手の中には赤く熟れたトマトが一つ。

きっと、かぶりついたら、じゅわりと甘酸っぱい汁が出てくるに
違いない。

それをじゅるじゅる吸いながら、

水っぽく柔らかい果肉を舌で味わいながら食べるのだ。

そっとトマトを手のひらでこすった。

張りのある皮が、きゅきゅっと音を立てた。

(ま、いいか)

みつともないと言っている場合ではない。

お腹の皮と背中中の皮がくつつきそうだ。

私はぎゅっと瞼を閉ざして、トマトに歯を押し当てた。

「…甘い」

瞬時に広がった甘さは予想した以上で、
目を大きく開いてトマトを見下ろした。

(おいしい)

続けてもう一口。二口。

無言で食べ続け、あつという間に食べ終えてしまった。
とたんに口が寂しくなる。

物足りないと思うくらいに美味しくて、
もっと食べたくなくなってしまった。

視線を感じて顔を上げると、ラックの穏やかな顔と目があった。
思いが通じたらしく、どうぞ、とラックはもう一つトマトを差し出した。

「ありがとう。すごく美味しい」

「それは良かった」

「リンドももう一つ！」

隣で上がった声に振り返ると、

リンドブルムがトマトの果肉にまみれた手をラックに突き出して
いた。

「うわっ、リンドー！」

口周りもぐしょぐしょだ。

あまりの食い汚さに驚いて、思わず身を引いた。

まさに楓が危惧した、

丸かじりをした結果の「みつともない」がそこにあっただ。

二の句が継げなくって、私は口をぱくぱくさせ、リンドブルムを
凝視した。

(…というか、トマトのヘタは？

どこにも見あたらないんだけど、食べちゃったわけ？)

私が仰天している隙に、ラックは鞆からハンドタオルを取り出し、
リンドブルムの手を取った。

ローテーブル越しにリンドブルムの手をタオルで綺麗に拭う。

顔も優しく拭いてやると、目を細めて微笑んだ。

「慌てて食べなくなっちゃって、いっぱい持ってるよ」

「うんうん。ラックの鞆は不思議だからな。

いっぱい野菜が入っているんだ」

大きく頷いたのははるきだ。

勝手にラックの鞆を開けると、その中からレタスを取り出し、ぽいっと、リンドブルムに向かって投げ寄こした。

ビニール袋に入ったレタスは、

ガサリと音を立ててリンドブルムの両手に収まった。

それを見下ろし、こてん、とリンドブルムは頭を傾げる。

「ラックはこれをどうやって食べるんだ？」

「普通にこうだよ」

ラックは腕を伸ばし、リンドブルムの手からレタスを一枚剥がし取ると、

そのまま口の中に入れて、むしゃむしゃと食べ出した。

「それって、味ないんじゃないの？」

「とんでもない。レタスはすごく甘いんだぞ」

「本当？」

とてもとても信じがたい。

私は訝しげな顔でレタスを食べるラックを見やった。

確かに、レタスやトマトは生でも食べられる野菜だ。

けれど、トマトはともかくレタスは、レタスだけでは食べないだろう。

まるでおやつみたいにむしゃむしゃと食べ続けるラックは、何やら本当にウサギっぽい！

「もしかして、ラックはニンジンが好き？」

「好きだよ」

「ニンジンも生で食べたりする？」

「そういう時もあるけど、炒める時もあるよ」

(!?)

そういう時もあるのか。

言葉を詰まらせた。

(やっぱりウサギなんだわ！)

獣人と呼ばれる人たちの性質は、外見と関係があるのだろうか。もしそうだとしたら…。

私はラックの隣に座るはるきに視線を向けた。

はるきのネコ耳がピクリと動くのを確認して、ローテーブルの上に人差し指を置いた。はるきの視線が私の指先に落ちる。私は素早く人差し指を左右に動かした。

「カエデ。それは何のつもりだ？」

しばらくあって、はるきはジト目で見据えながら、低めた声を響かせた。

私は、あはは、と空笑いをして、指を引っ込めた。

「はるき君が、私の手をバチンってやってくれたら面白いなあ、と思っ

「オレはネコじゃねえ！」

「けど、ハルキの尻尾さつきから落ち着きないぞ」
「！」

おそらく無意識だったのだろう、

左右に動かされた指に反応して、はるきの黒く長い尻尾は左右に揺れていた。

ラックに指摘されてはるきは顔を赤らめた。

「これは違う！ 初対面な奴らを前にして緊張しているんだ！」
「緊張？ ハルキはそんなタマじゃないだろ？」

くくくつ、と笑ってラックははるきの肩に手を置いた。
落ち着け、と軽く叩く。

そして、鞆の中からプリントを取り出し、ローテーブルの上に広げた。

「ちょうど今日、学生課から新しい時間割を貰ってきたところなんだ。」

これを元にして自分の時間割をつくるんだよ」

それは戦闘魔法科の授業がずらりと書かれたプリントだった。

左軸は日付、上軸は時間となっている。

同じ日同じ時間に開講されている授業もいくつかあって、
授業名の下に教師名が記されている。

「戦闘魔法科には、物理系魔法コースと攻撃系魔法コースがある。

どちらのコースにも教授が5人、助教授が7人、

助手が5人、講師が25人いる。

そのそれぞれが授業を開設しているから、かなりの量の授業数だ
ろ？」

「うん。どれを選ばいいのかサッパリ分らない。

…ねえ、物理系魔法コースと攻撃系魔法コースって、どう違うの
？」

「物理系魔法コースっていうのは、

肉体強化系の魔法を専門的に取得するコースだ。

防御魔法、攻撃魔法、変身魔法を主に学ぶことになる」

「肉体強化系の魔法って？」

「物理的な攻撃に対する防御力をUPしたり、物理的な攻撃力をUPする魔法のことだ」

説明してくれるはるきの顔を見つめながら、要するに、と思う。

（受けるダメージを減らしてくれたり、ちよつとの力で相手に多くダメージを与えられるようにしてくれる魔法ってことね）

はるきは、それから、と続けた。

「攻撃系魔法コースというのは、

攻撃系の魔法を専門的に取得するコースのことだ。

氷系攻撃魔法、炎系攻撃魔法、風系攻撃魔法、雷系攻撃魔法、物質系攻撃魔法を学べる。

物質系攻撃魔法っていうのは、物質……たとえば

剣や弓なんかに、魔法的效果をつける魔法のことだ」

「魔法的效果っていうと？」

「たとえば、剣に炎系の魔法的效果をつけたとする。

炎系攻撃魔法が使えない者でもその剣を扱えば、

炎系攻撃魔法と同等もしくはそれに準じる威力を発揮できるようになる。

また、剣自体が炎属性になっているから、

炎に弱い敵に大きなダメージを与えられる」

「なるほどね」

大きく頷いて見せたが、正直なところ、いまいちピンと来ない。
“魔法”なんて単語、TVゲームの中でしか聞いたことがなかったのだから。

未だにここがソレンティアという魔法学園で、
これから自分は魔法を学び、使うようになるのだと言われても、
まだまだ実感が湧かないのだ。

とは言え、話はどんどん進んでいく。
ラックの指先が時間割の上をすうっと滑った。

「授業名の横にカッコして数字が2つ書いてあるだろ？」

言われてみると、カッコの中に斜線で区切られた数字が2つある。

「これは全授業数と授業回数を意味している。
たとえば『(3 / 15)』と書かれていたら、
15回あるうちの3回目の授業という意味だ。
大抵、初回の授業はオリエンテーションを行う。
だから、慣れた学生は初回は出席せずに、
2回目の授業から出席することが多いな。
あるいは、初回に出て合わないと思って、
2回目からやめてしまったりすることもある」
「同じ授業名で、同じ先生、同じ授業回数であれば、

大方、同じ内容の授業だ。

だから、無理矢理途中から参加するんじゃないって、初回に戻るのを待ってから参加するといい」

「先生たちは何度も同じ授業を繰り返してやってくれるわけ？」

「まあな。」

「ソレンティアは学年もなければ、入学時期も定まっていない。だから、こういうシステムになっているんだろうな」

「なるほどね」

今度の“なるほど”は半分以上納得して口になっている。

人間界で通っていた学校とソレンティアでは

まるでシステムが違うのだと言われれば、それはそうだろう、ソレンティアは魔法学園だもの、と納得できてしまうからだ。

ふと、縦軸の異様さに気が付いて、目を見張った。

時間割の縦軸は、てっきり一ヶ月分の日付が、

1日、2日、3日……と書かれているものだと思っていた。ところが、数字は14までしかない。

「この『満月の1』とか『満月の2』とかって、何？」

「今日は“満月の月”なんだ。満月の月の1日目、

満月の月の2日目……という意味で

『満月の1』『満月の2』って言うんだよ」

他にも、新月の月、上弦の月、下弦の月がある。

これらは、14日周期で変化する」

「一ヶ月が14日しかないってこと？」

瞳を大きくすると、はるきは肩を竦めた。

「ソレンティアでは、他の世界とは異なる独自の法則によって時間が流れているんだ」
「異なるって、まさか1日の長さまで違うとか言わないよね？」

寮の廊下に掛けられていた時計を思い出す。
たしか、12進法の時計だった。

あれが見間違いない限り、ここでの1日も24時間のはずだ。
そう言つと、ラックは、その通り、と頷いた。

「ただし、ここでの24時間が君の世界での24時間かどうかは分からないよ。
つまり、ここでは数百年の出来事でも、君の世界では一瞬の出来事かもしれない。その逆も然りだ」
「けど、オレの感じだと、そんな大きくは変わらないっていう印象だな」

「そうなの？ それならいいけど」

ソレンティアを卒業して人間界に戻ってみたら、
浦島太郎みたいに、

友達も両親も死んで、家も跡形もなかったりしたら、嫌だ。

けれど、そこまで異なつた時間の流れはしていないようで、

ひとまず安心する。

私がホッと息を吐くと、
ラックが、ちなみに、と話を続けた。

「授業は一週間で1回。

つまり、今週初回の授業があつたら、

2回目の授業が行われるのは次の週で、3回目は更に次の週だ。

一週間は7日間あつて、ディエース・ルナエ月の日、

ディエース・マルティスマルスの日、

ディエース・メリクリーメリクリウスの日、

ディエース・イオウイスユピテルの日、

ディエース・ウェネリスウェヌスの日、

ディエース・サトウルニサトウルヌスの日、

ディエース・ソーリスそして、太陽の日だ。

…月の日に初回があつた授業は、2回目の授業も月の日に行われる。

マルスの日に初回があれば、2回目の授業もマルスの日だ」

「太陽の日は休日だから、授業はない」

「ちなみに今日は？」

「下弦の2、ウェヌスの日だ」

ラックの指先が紙の上を滑り、時間割の今日の日付のところに行き着く。

そして、ゆっくりと明日の部分に移動する。

「明日初回の授業は、これとこれとこれ。

それから、これくらいかな」

「とりあえず、それらを出られるだけ出て、改めて選んでいけばいいのよね？」

「最初のうちはそれでいいと思うよ。」

先生の話聞いて、おもしろそうだったらそのまま続けて出ればいいし、

つまらなそうならやめればいい」

「そうやっているうちに、自然と時間割が決まっていくなんだよ」

9・奇妙な視線

ラックがくれると言ったので、
彼が学生課から取ってきたという今月分の時間割を受け取り、
明日の授業をチェックする。

「明日の1時間目にさっそく初回の授業があるみたい。
アメリカ先生っていう先生の」

「アメリカ先生は攻撃系魔法コースの先生だよ。
まだ若い先生で、たしか人間だったと思う」
「本当に？」

人間と聞いて俄然、親近感を持ってしまふ。
名前から想像するに、残念ながら、日本人ではなさそうだが…。
だけど、入学してから初めて受ける授業が、
人間の年若い女の先生の授業というのは、なんともありがたい。

「じゃあ、まずこの授業に決定」

「俺も出てみようかな」

「え。ラックも？」

「教室までの案内人が必要だろ？」

「すごく助かる！」

申し訳ない気もするが、朝イチで迷子にはなりたくない。
ここはラックに甘えさせて貰おう。

「ところで、1時間目って、何時からなの？」

「8時50分からだ。」

だから、8時半に寮のエントランスで待ち合わせな」

「うん。ありがとう。」

…えっと、リンドは？ どうするの？」

隣に座るリンドブルムを振り返り、肩を竦めて呆れた。
リンドブルムは、すやすやと寝入っていたのだ。

（ちっとも話に入ってこないと思ったら！）

私はリンドブルムの体を揺さぶった。

「起きなさいよ。」

ラックとはるきがせつかく説明してくれているのに」

あはは、と笑ってラックは楓を制した。

「仕方ないさ。まだ小さいから」
「でも……」

眉を下げてラックを見、
それから、はるきの不機嫌を露わにした顔を見やった。
私は、ごめん、と二人に頭を下げた。

そして、はた、と思う。
どうして自分がリンドブルムのことで謝らなければならないのだ
ろうか。

私とリンドブルムは他人で、
今日、と言うか、ついさっき会ったばかりの関係だ。
むしろ、無関係と言ってもいい。

それなのに、なぜ…？

リンドブルムのことで頭を下げたイデアブルーとハルシオンの姿
を思い出して、

何やら腹が立ってきた。
これではまるで、自分も彼らと同じだ。

平和そうな寝息を立てている子どもに目を向け、
ぐったりとした気持ちになる。

もしかすると、リンドブルムは
そういう力を持ち合わせているのかもしれない。

人を自分の代わりに謝らせる力。

これではとんでもない言い方なので別の言葉を探してみると、

つまり、“庇護欲をそえられる”ということだろうか。

いや、違う。

守ってあげたいわけではない。

『うちの可愛い子』

アイデアブルーがリンドブルムに対して言っていた呼び名を思い出して、

それだ、と私は手のひらを打った。

“可愛い”という単語は置いておいて、
出会ってからわずかな時間のうちに、
私はリンドブルムに対して“うちの子”という感覚にさせられて
しまったのだ。

あまりにもすんなりと、リンドブルムは私の中に入ってきて、
今ではすっかりそれが自然になっている。
なんだかずっと前からの知り合いみたいだ。

あどけない寝顔を見下ろしていると、
ラットがやれやれと腰をかがませて、
リンドブルムの小さな体を抱き上げた。

「部屋まで案内してくれる？」

「でも、女子寮の中には入れないんじゃないか……」

ちらりと、壁に掲げられた寮則に視線を投げた。

『男女の寮の行き来は、原則不可とする。』
確かにそこにはそう書かれている。

そう言うのと、ラックは、にっこりと笑みを浮かべて、サロンの扉を顎で指した。
開けて、と言うのだ。

扉を開いた先はエントランス。

私はラックの後ろに続いて、サロンから出た。

「原則は原則だからね」

「つまり、例外があるってこと？」

「と言うより、あんまり守られていないってことだよ」

「先生たちにさえ見つからなきゃ、まあ大丈夫だな」

けど、だからと言って堂々と行き来するのは、

ときどき頭のかてえ奴がいて、

そいつらが先生にチクツたりするから、やめた方がいいぜ」

私が開けっ放しにした扉を閉めてから、はるきも後に続いた。

リンドブルムの、ベッドしかないシンプルな部屋まで二人を案内すると、

ガチャリと軽い音が響いて、廊下に彩が顔を出した。

彩は私の隣に立つラックとはるきに一瞬驚いた表情を浮かべたが、騒ぐことなく、彼らにニコリと笑みを投げると、

私に向かって口を開いた。

「説明終わった？ 時間割できた？」

「だいたいね。…彩ちゃんの部屋、そこだったの？」

「ううん。ここは友達の部屋。」

それより、今から迎えに行こうと思ってたんだ。
夕食一緒にどう？」

願ってもないことだ。

まだ彩以外に女子寮の知り合いがない。

あんな広い食堂で一人で食べるのは寂しすぎる。

あれ？ と彩は首を傾げた。

「リンドちゃん、どうかしたの？」

「それが、寝ちゃったんだ」

「そっか。疲れたんだね。」

じゃあ、リンドちゃんには後でおにぎりを持っていくとして……
「リンドも……たべ……る……」

もにもよると、リンドブルクが口を開いた。

ラックの腕から滑り降りると、

ふらふらした足取りで私たちの方に歩み寄ってきた。

「起きたの？」

「お腹減った」

「そう。じゃあ、一緒に食堂に行きましょう。」

「ラック、はるき、今日はありがとう」

「ああ、また明日な」

「寝坊すんなよ」

ラックとはるきはそれぞれ言って、軽く片手を振って去っていった。

その背中を十分に見送ってから、私たちは食堂に向かう。

時刻は19時15分。

寮生がみんなそろっているのではないかと思うほど、食堂は賑わっていた。

私は彩に習って、入り口でトレーを持つと、配膳カウンターに並んだ。

パン、スープ、サラダを流れ作業のように受け取り、最後に紅茶をトレーの上に乗せて、席に着く。

席は自由で、

縦三列に並べられた長机のどこに座ってもいいのだという。

とは言え、人には習慣というものがある。

何となくいつもと同じところに座ってしまうのだと、彩は笑い、真ん中の列の奥の方の席に着いた。

私も彩の隣に腰を降ろして一息付くと、奇妙な視線に気が付いた。視線は複数。

何とも言い表しがたい感情を含んで自分たちを見つめている。

（新人生だから？）

ならば好奇心な視線を送ってくるはずだ。
けれど、それはもつとずっと負の感情。

（歓迎されていない？）

リンドブルムが私の隣にトレーを置いて、
ガタン、と音を立てて椅子に腰掛けた。

はっとする。

視線はすべてリンドブルムに向けられていた。
注意深く見渡すと、何人かがサツと目を逸らした。
そして、隣の者同士でひそひそと小さな声を立てた。

「カエデ、食べないのか？」

気付いているのか、いないのか、
リンドブルムが蒼い瞳で楓の顔を下から覗き込んできた。

「食べるわよ」

「私もー。お腹ぺこぺこだもん。いただきますーす！」

彩の掛け声に合わせて、

リンドブルムも大口を開いて、いただきます、と言った。

やや遅れて私も挨拶をし、スプーンを手を取った。

翌朝である。

一瞬、自分がどこで目覚めたのか分からなかった。

見慣れぬ天井。

ぎよっとするピンクタイル。

がらんと寂しい部屋にポツンと置かれたベッドの中で、
私は瞼を開いた。

足をタイルの上に降ろすと、

冷水を掛けられたかのようにヒヤリとして、思わず身を縮める。

一刻も早く絨毯を敷かなければ、と思った。

支給された制服に着替えると、隣の部屋の扉を叩いた。

結局、リンドブルムも私と同じ授業に出てみるようになったのだ。

寝ぼけ顔のリンドブルムを連れて食堂に向かうと、すでに彩も来ていて、昨晚と同じ席で朝食を取った。

時刻は8時20分。

そこからが戦場だった。

1分1秒を争うように出掛ける支度をし、エントランスへと走る。

「おはよう!」

ウサギの耳を見付けて、ラックのもとへ駆け寄った。

「あれ?」

すらりと高いラックの背中に隠れるように、はるきが学生鞆を持って立っていた。

「はるきも同じ授業に出るってさ」
「そうなの?」

それは心強い、と笑顔を向けると、はるきは私から顔を背けた。
ラックが笑う。

「照れてるだけだから気にしなくたっていいよ。それより急ぐっ」

寮から出て、木立の道を歩く。

やがて、森の中にエレベーターホールが現れた。

朝の通学ラッシュに混雑しているかと覚悟していたが、6つあるエレベーターはどれも優秀で、よく働くらしい。開いた扉の中にいたのは、女の子が4人だけだった。

耳の先がとんがっている。

エルフに違いない、と彼女たちをちらりと一瞥して判断した。

私たちが中に入る仕草を見ると、

彼女たちは部屋の端に寄り、スペースをあけてくれた。

ひそひそ声。

まただ、と私は横目で彼女たちを見やった。

彼女たちは私の視線に気が付いた様子もなく、お互いにお互いの耳に口を押し付けるように話していた。

チラチラ、とリンドブルムに視線を向ける。

そして、再び、ひそひそ……と。

がこん、という小さな振動と共にエレベーターが停止して、扉が開いた。

スカートを蝶の羽のようにはためかせながら、

彼女たちはエレベーターを降りて行った。

「さあ、こっちだ」

きっと彼女たちのひそひそ話に気が付いたのは私だけだったのだろっ。

はるきは相変わらず可愛い顔をわざと怒らせたような表情をしているし、

ラックは明るい声をエレベーターホールに響かせて、西の方を指差している。

当のリンドブルムは眠たそうな顔だ。

何度も何度も目元を手の甲でこすっている。

しまいには、拳が丸ごと入ってしまいそんな大きなあくびをして、私を呆れさせた。

（やめやめ。今、考えても仕方ないわ）

当人が気にしていないのだ。

私が心配することではない。

軽い足取りのラックを追って、

私もエレベーターホールから出、さらに中央校舎の外へと出た。

西方へ真っ直ぐのびた道がある。

その道を進むと、

やがて右手に運動場が、左手に白い建物群が見えてきた。

運動場の奥には体育館らしき建物がいくつかあって、

さらにその右奥にもこぢんまりとした建物がいくつか建ち並んでいる。

「こっちに行くと、運動場エリアだ。

各競技のための施設がそろっている」

運動場の手前で北に延びる道と西にのびる道に分かれた。

ラックは北にのびる道を指差して、この先はクラブ棟なのだと説明した。

なるほど、先程見えたこぢんまりとした建物はクラブ棟だったのだ。

「戦闘魔法科の校舎はこっちだ」

はるきが指差したのは、道の左手の建物群。

その敷地は驚愕に値し、そこだけで人間界の小学校くらいの広さがある。

（迷う。絶対に迷う！）

改めて、案内人を買って出てくれたラックとはるきに感謝する。

もしもこれが“案内なし”だったら、1時間目の授業に間に合わないどころか、

学園内で遭難していそうだな！

分かれ道をさらに西へと進んで、

戦闘魔法科の校舎を眺めながら、進む。

「教室は4号館だから、あそこの建物だな」

「じゃあ、あっちから行った方が近道じゃねえ？」

「そうだな」

はるきが近道と言った道は、もちろん道なんかではなくって、植木を跨ぎ、芝生の上を横断することになった。

白壁に大きく“4”と描かれた建物が近付いてきた頃には、私の息は上がっていた。

（朝イチの運動にしては、ハード過ぎるんじゃないの？）

ラックに腕時計を見せて貰うと、授業開始5分前だった。

急ぐのが嫌であるのならば、もう少し早く寮を出るべきだと、身に染みて分かった。

建物の中は楓のよく知る学校の造りとさほど変わらないように見えた。

白壁がずっと続く長い廊下。

その片側の壁にいくつも扉が並んでいる。

タイル張りの床。

天井は低くもなく、高くもない。

この4号館は講義棟だから、こういう造りなのだと、ラックは言った。

「実技を行う教室は、もっとずっと天井が高くて、広いよ」
「へえ」

想像がつかなかったので、適当に相づちを打つ。

階段を上がり、三階まで上がる。

教室は『303』、一番奥の部屋だ。

その手前まで駆けてきた4人は一度立ち止まり、呼吸を整えてから、教室の扉をガラリと開いた。

10・初めての授業

あ、という間の出来事で、止める暇もなかった。

「虫だ！」

教室の扉を開いたとたん、そう短く言い放ち、

リンドブルムはウサギ顔負けのジャンプ力で飛び上がった。

そして、何かを両手に捕まえ、数メートル先で着地した。

「捕まえだぞ、カエデ！」

振り返った子どもはいかにも得意げで、

誉めてくれとでも言いたげな顔をしている。

しかし、である。

リンドブルムの両手の中から聞こえてくる悲痛な叫びは、とてもじゃないが、誉められたものではない。

セロファンのように薄く黄色いものがその両手からはみ出ている。細い棒だと思ったそれは人の足で、ジタバタと必死に藻掻いている。

「リンド、いったい何を捕まえたの？」

顔を引きつらせて聞けば、リンドブルムは怪訝そうな顔で答えた。

「虫だ」

「虫って？」

「てんとう虫だ。リンドを騙してここに連れてきた虫！」

（てんとう虫？）

もしかして、チーロのことだろうか。

てんとう虫のくせにしっかりと洋服を着込んだチーロは、入学生をソレンティアまで案内する役目を負っている。

リンドブルムもチーロに案内されてソレンティアまでやって来たのだが、入学は不本意だったらしく、チーロに騙されたと言い続けているのだ。

（チーロ？ 本当に？）

はみ出した黄色いものは、蝶の羽のようだ。
響いてくる悲鳴は、チーロのものとは違う。
もつとずっと若い男の子のものだ。

「よく見てみて。

それ、たぶん、てんとう虫じゃない！」

リンドブルムは、こてん、と首を傾げた。
そして、そつと自分の手のひらを開いて、見下ろす。

「うわっ。てんとう虫じゃない！」

驚いてリンドブルムは捕まえていたモノを放り投げた。
慌ててラックが受け止める。

その手の中で、ぐったりと黄色い羽の蝶が倒れ込んだ。
ラックは眉を下げて、心配げな声を掛けた。

「大丈夫か、シャオラン」

「…だ、大丈夫じゃないアル。いったい何事でアルか？
ヒドイ目にあったヨ！」

「ごめんな。えーっと、紹介するよ。

昨日入学してきたカエデとリンドブルムだ」

ラックは蝶を乗せた手を楓の方に差し出した。
蝶の大きさは13センチほど。

チー口のようにしつかりと洋服を着込んでいる。

しかも、よくよく見ると、

その洋服はソレンティアの男子用制服だった。

「僕は、ロウシャオラン蝶小狼アルヨ。

楓は人間アルか？ 僕も人間界から来たヨ」

「え？」

私は驚いてシャオランの小さな体を見下ろした。

どう見ても人間界には生息していなそうなイキモノだ。

「僕の故郷、中国の奥地ネ。人間は入ってこられないアルヨ。
人間、僕らのこと知らないヨ」

私はあんぐりと口を開けた。
言葉を失う。

（中国の奥地恐るべし！）

世界はまだまだ広いと言っし、
未開の地っていうのも多くあるとは聞いているけれど、
まさか蝶の羽の生えた小人が中国の奥地で生息しているとは！

小狼が言うには、その昔、獣人界から人間界にやって来て、
そのまま帰らずに永住してしまった獣人がいて、
その子孫が自分たちなのだという。

リンドブルムも、教室の入り口まで戻ってくると、
ラットの手の中を覗き込んだ。

「本当だ。チーロじゃない。蝶だ。虫違いした！」

「リンド、ちゃんとシャオランに謝りなさい。
いきなり飛び掛かるだなんて、ひどいわよ。

…羽、痛まなかった？」

後半は小狼に向かって問うと、
小狼はパタパタと羽を大きく動かして、ふわりと飛んだ。

「大丈夫アル」

「よかった」

ホッと胸を撫で下ろした時、こんこん、と軽い音が響いた。
振り返ると、教壇に女性が立っている。
教卓に肘を着き、頬杖を着いてこちらをじっと見ていた。

ふわふわと柔らかかそうな亜麻色の髪は長く、
背中を隠すくらい。

小柄で、ほっそりとした肩は儚げだ。

少女のような笑みを浮かべて、
もう一度、こん、と指先で教卓を弾いた。

「授業、始めたいんだけど？」

座って頂戴、と言って、視線で席を指した。
どうやら彼女こそが“アメリカ先生”のようだ。

教室には、正面に向かって横に二列、
縦に六列、長机と長椅子が並んでいる。

一つの椅子に4人座れるので、一つの長机の前に並んで座った。

ひらひら飛んでいた小狼も一番前の机の上に降り立つと、
そこに用意された玩具のような小さな椅子に腰掛けた。
もちろん、小さな机もあって、

その上には小さなノートと筆記用具が置かれてある。

（可愛い。ドールハウスの家具みたい！）

小狼を目で追っていた私は思わず笑みを漏らした。
小狼がひよいと顔を上げて、隣の席に座っている女の子に視線を

向けた。

こちらの女の子は虫ではなく、ちゃんと人サイズで、普通サイズの長椅子に腰掛けている。

赤栗色の髪は短く、肩にもつかない長さに調えられている。そこから除く耳は人間のものだ。

私はラックの袖を軽く引つ張った。

「ねえ、あの子は？ 人間じゃない？」

「ああ、エルか。たしか……人間だったかなあ？」

「人間だ。名前は、ハルトエラ・宵里・バルザード^{よいさと}。」

人間界のイタなんとかっていう国から来たらしいぜ。

…イタなんだったかな。ああ、思い出せない！

悪い、忘れた。イタメシみたいな感じだったんだけどなあ」

「炒めし！？」

はるきはラックよりは情報通らしいが、いまいち正確ではないみたいだ。

けれど、仕方ないのかもしれない。

私だって、獣人界や妖精界の国をぜんぶ覚えて言ってみると言われたら、

無理です、って答えるだろう。

「イタなんとかって、もしかして、イタリア？」

「イタリア……。ああ、そんな感じだったかも」

日本人ではないのは残念だけど、あとで話しかけてみよう。
そう思いながら、私は教室を見回した。

この教室は戦闘魔法科の校舎の中でも小さな教室らしく、
席数も少なければ、受講者も少なかった。

私たちと小狼とハルトエラの他、あと数人しかない。

初回だからなのかもしれない。

初回のオリエンテーションは受けずに、

二回目の授業から参加する者が多いのだと、昨日ラックが言っていた。

教壇に目を戻すと、アメリカの碧い瞳とバッチリ目が合った。
につこりと微笑みを返され、気恥ずかしくなる。

彼女は学生の視線が自分のもとに集まるのを待っていたのだ。

「それじゃあ、授業を始めましょうか。

知っている顔もちらほらあるみたいだけど、

初めて見る顔もあるから、自己紹介から始めさせて貰うわね。

わたしの名前は、アメリカ・ケリー。

出身は人間界のアメリカ合衆国。

年は“永遠の24歳”よ。

4年前にソレンティアを卒業して国に帰ったんだけど、

思うことがあって、ソレンティアで講師を募集していたのを機に
再びソレンティアに戻ってきたの。

講師としてはまだまだ2年目だし、

まだ“24歳”だから、先生って感じはしないかもしれないわね。
でも、だからこそわたしには、あなたたちの先輩として

教えられることはあると思っているわ」

アメリカの声は、大きな声を出しているわけではないのによく通り、聞きやすかった。

強調して“24歳”と言うあたりは胡散臭かったけれど、悪い人ではなさそうだ。

アメリカは横髪をふわりと掻き上げて、話を続けた。

「この授業『属性魔法の基礎その1』では、炎の属性の魔法を教えるわよ。」

イグニを唱えられるようになるのが目標ね。

イグニを自在に扱えられるようになった人は、

武器にイグニの効果を付けられるように練習します。

雷系攻撃魔法や氷系攻撃魔法、風系攻撃魔法を学びたい人は

この授業では教えないから、別の授業を受けてね。分かった？」

答えを待つために、アメリカは沈黙をつくった。

炎系の攻撃魔法が得意だという彼女。

ところが、彼女の容姿からはとてもそのようには見えない。

仕草もおっとりとしていて、運動が得意なようにも見えないし、戦闘という単語とも縁遠そうだ。

（私と同じ匂いがするんだけどな）

もしかして、リンドブルムみたいな人がアメリカの周りにもいて、私みたいに不本意ながらも

戦闘魔法科に所属することになってしまったのだろうか。

そんな私の思いを読み取ったのか、

アメリカはニヤリとイタズラっ子の笑みを浮かべた。

「なんでわたしみたいな鈍くさそうなのが戦闘魔法科なのか、
って思っているんでしょう？」

残念ながら、こう見ても運動は得意なの。

学生時代は活発な子だったのよ。イタズラばかりしていたもの。
でも、確かにね。

戦闘魔法科の魔法は、わたしには向いてなかったのかも。
ソレンティアで学生をしているときは、
毎日毎日学ぶのがとっても楽しかったわ。

でもね、国に帰って、軍隊に入れて言われた時に、
違う、って確信したのよ」

アメリカの碧い瞳は真っ直ぐ私に向けられていた。

「戦闘魔法科の魔法は、相手を攻撃する事を目的とした魔法よ。
国では、普通に暮らしている限り必要とされない魔法なの。
国に帰って、自宅の庭で午後のお茶をしている時に、
どうしてわたしは人を傷付ける魔法ではなく、
癒す魔法を学ばなかったのだろって、ひどく後悔したわ。
だって、人を癒す魔法を使えたのなら、

いつも腰が痛いと言っている隣の家のおばあさんを
治してあげることができたもの。

そして、政府からの入隊命令……」

断ることはできなかった、とアメリカは瞳を細めた。

「何のためにソレンティアで学び、卒業したのかって言われて、
返す言葉がなかったの。」

戦場に行つて、敵兵を魔法で攻撃しろと言われたわ」

「攻撃したんですか？」

アメリカは答えなかった。

ただ、悲しげな表情を浮かべた。

「わたしの魔法はこんなことのために使う魔法じゃない、って思っ
たわ。」

それじゃあ、どういう時に使う魔法なのか、って考えてみたんだ
けど、

悲しいことにね、何も浮かばなかったの。

分らないのよ、未だにね。

それでもソレンティアでは攻撃魔法を学べる授業が開講されてい
るでしょう？

それって、攻撃魔法を学ぶことは必要なことだっけって見なされてい
るわけよね？

どうしてなのかしら？」

攻撃魔法を使う時とはいったいどういう時なのだろうか。
人を傷付けてもいい時なんて本当にあるのだろうか。
答えなんていくら考えても分からない難問のように思う。

私は拳を握って、アメリアの次の言葉を待った。

「ソレンティアで講師を募集しているって知ったのは、
そんな時だったの。」

わたしは魔法を得たことで辛い思いをしたけれど、
わたしと同じようにソレンティアを卒業しても、
そんな思いをチラリともしない人って、結構いると思うのよね。
だからこそ、わたしには魔法使いの卵であるあなたたちに
教えられることがあるんじゃないかしら、って思ったのよ」

「教えられること……？」
「痛みよ。」

あなたたちが攻撃魔法をかける相手にも心があるってこと。
傷ついたら、痛いのよ。

相手の痛みを想像できたのなら、
そう容易には攻撃魔法を使えないはずだわ。

わたしはこれから授業で、あなたたちに炎系の攻撃魔法を教える
わ。

わたしの知る限りの知識を伝える。

でもね、ソレンティアを卒業して国に戻ったら、
攻撃魔法を使わないで欲しいの。

使えば使っただけ傷つくのはあなたたちなのよ。

相手の痛みはあなた自身の痛みになるの。

それに気付くか、気付かないかは、あなた自身の問題だけど。
一生、気付かない人もいるわ。

けれど、気付いて。

気付かなくても、あなたの心は傷を負っているわ」

だから攻撃魔法は使わないで、とアメリアは話を閉めた。
ガタン、と私の隣で音が鳴り響いた。
見やると、リンドブルムが席を立っていた。

「それでも、リンドは攻撃魔法を使う」
「リンド」

席に戻そうと、リンドブルムの袖を引っ張るが、
小さな体はここでも動かなかった。

「お前の言っていることは偽善だ。
相手が傷を負うのは当然だし、
そのことで自分の心が痛んだとしても、
傷ついた相手にとっては関係ないことだ。
何の詫びにもならない。
相手の痛みを思っ魔法を使うのを躊躇すれば、
傷つくのは自分の方だ。
だから、リンドは相手を攻撃する」

11・偽善

誰もが息を呑んだ。

アメリカの言葉は綺麗で正しい。
だが、それは所詮、理想に過ぎないことを、
皆、心のどこかで分かっていたのだ。

国に帰ればリンドブルムが言うように、
自分や仲間が傷を負う前に、敵を攻撃することになるだろう。

『殺すかもしれない』

相手に向かって攻撃魔法を放つということは、
その相手を殺してしまうかもしれないということだ。

まだ実感は湧かない。
けれど、理解はできる。

『自分の魔法は誰かを殺すかもしれない』

けれど、殺したくないと言って、
魔法を使わずにいられる者はおそらく、
戦闘魔法科を卒業した者の中で少数だろう。

使わずにはられない。

戦う術を持つ者は、必ず戦わねばならぬ時がくる。
その時に、相手を殺したくないからと言って、
自分が殺されてやることができるだろうか。
できるわけではない。

偽善だ。

綺麗を並べた言葉は憧れるが、虚しい。

正しいが正しくはなく、雲のように実体がないもののような。

すっかり静まり返ってしまった教室。

学生たちの顔を見渡して、アメリカは不敵に笑った。

「偽善で結構！」

バンツ、と教卓を手のひらで打った。

「偽善だつて言わなきゃ何にも変わらないのよ。
どうしようもないの！」

綺麗事？ 結構じゃないの。

綺麗事だつて誰かが口にして言わなきゃ、
いつまで経つてもドロドロしたままよ。

ひどい、つらい、苦しい。そんな言葉いくら言つたつて、
しょうがないじゃないの。

どうすればいいのか、どうなつて欲しいのか言つてご覧なさいよ。
わたしは戦闘魔法なんて使わずに済む世界になつて欲しいと思つ
ているわ。

つまり、世界平和よ！

……分かつてる。

人が大勢いればどうしたつて争い事は起きるものだわ。

世界中どこにも戦争がなくなつて、平和だなんて、

あり得ないことだつて分かつてる。

けど、願わずにはいられないじゃないの。

平和がいい。平和になつて欲しい。平和を作りましょう、つて」

アメリカの勢いに押されるかのように、

リンドブルムは、かくんと膝を折つて席に着いた。

蒼い瞳を大きく見開いて、アメリカを見上げている。
ああ

「言わなきゃ何も始まらないのよ。

誰かが口にして、それを聞いた誰かも声に上げる。

そうして、みんなが平和を叫んだのなら、いつか本当に平和が訪
れるかもしれない。

ね？ ものすごい理想論でしょう？ でも、悪くないと思わない
？」

アメリカが口を閉ざすと、再び静寂が訪れた。
誰も何も言い返すことができなかった。

しばらくあって、リンドブルムがぼつりと言葉を零した。
悪くない、と。

「言うのは自由だ。

誰もアメリカの口を閉ざすことはできない。
アメリカの考えを否定することもできない。
だから、いい。悪くない」

アメリカもにつこりと笑顔を浮かべて、頷いた。

「ありがとう。

でもね、リンドブルム。

あなたがわたしの授業を受けるのであれば、
あなたはわたしの学生なのよ。呼び捨ては頂けないわ」

指摘を受けて、リンドブルムはパチパチと数度、瞼を瞬かせた。

アメリカが教室から去ると、学生たちはバラバラと席を立った。私も席を立つと、どうする？という視線をラックが向けてきた。

「この授業を続けて受けてみたい…と思う」

「そっか。いいと思うよ。」

アメリカ先生って、なかなかいい先生だと思うし。

リンドはどうするんだ？」

「リンドも」

「え」

思わず、リンドブルムの顔を振り返ってしまった。
あれほどアメリカの言葉に反発していたというのに、
リンドブルムは彼女の授業を受けるのだと言ったのだ。

「本気？ アメリカ先生のこと、気に入らなかったんじゃない？」

「リンドはアメリカが嫌いじゃない。」

さっきのは意見の相違だ。それは悪いことじゃない。

アメリカはアメリカの考え方を持っている。

明確な意思を持っている者は、リンド嫌いじゃない」
「へえ」

拍子抜けしたような、鳩が豆鉄砲を食ったような心地になる。
リンドブルムは年齢のわりにしっかりとした考えを持って、
大人のようなことを言う。

（あれ？　そう言えば、リンドっていくつなんだろう？）

自分の年齢は告げた気がするが、
リンドブルムに年齢を聞いた覚えがない。

外見の幼さから勝手に12歳くらいだろうと判断したが、
もしかすると、案外もっと大人なのかもしれない。

だが、すぐに否定する。

（まさかね）

“もっと大人”であるのならば、もっと大人な行動をしているはずだ。

間違っても、蝶をてんとう虫と見誤って、飛び掛かるなんてことはしない。

ラックに時間割の書かれた紙を出すように言われ、
紙を差し出すと、ラックは次の時間の授業を指差した。

「今の授業を履修するのなら、次の時間は空き時間にするといいよ。人にもよるけど、ぶっ通しで授業を受けると、かなりつらいぞ」
「今日はオリエンテーションだけだったから早めに終わったけど、本来なら授業は90分間行われる」
「90分？ 50分じゃなくって？」

人間界で自分が通っていた学校は50分授業だったと言ってみたが、
はるきはあっさりと頭を左右に振った。

「90分だ。そして、その10分後に次の授業が始まる。
次の教室が同じ校舎内であるのなら問題ないけど、
遠い教室なら、移動するだけで休憩時間がおわっちゃう」
「移動すら間に合わない時があるよ。授業を延長する先生もいるし
なあ」

だから、とラックは続けた。

「1時間目を入れたら、2時間目は空きに。
3時間目を入れたら、4時間目は空きにするといいんだ」

ふーん、と鼻を鳴らして時間割表に目を落とした。
昨日は気付かなかったが、よくよく見てみると、
1時間目は8時50分に始まり、10時20分に終わると記されていた。

そして、2時間目は10時30分から始まり、12時に終わる。

「3時間目が始まるのは12時50分からで、

昼休みは12時から50分間あるのね？」

「そう。けど、その時間に行ったんじゃあ混んでて落ち着いて食えねえ。

だから、2時間目が空いているヤツは早めに昼飯を食っちゃうってわけ」

「なるほど」

「…というわけで、かなり早いけど、学食に行かないか？」

「早すぎだろ！」

すかさず、はるきのツツコミが入った。

それも当然で、まだ10時にもなっていない。

「ここからゆつくり歩いて行けば、学食に着く頃には10時過ぎるって」

「それでも早い」

「じゃあ、カエデとリンドが

3時間目に受ける授業の教室の下見をしてから食堂に行こう」

む、とはるきは言葉を呑んだ。

そして、私が手にしている時間割表に視線を向けた。

「3時間目の授業は？」

「えーつとね。『初級物理防御』っていう授業を受けてみるつもり」
「実技授業用の教室だな。それなら1号館か2号館だろ？」
「2号館って書いてある」

ちっ、とはるきの舌が鳴る。

どうやら口説明では難しい場所にあるらしい。

「ごめんな。俺とはるき、3時間目は自分の授業を受けなきゃならないんだ」
「うっん。今の授業と一緒に受けてくれただけで十分だよ。ありがとう」

口頭で教えてくれれば2号館の場所も何とか行けると言ったのだが、

そこは譲れないとラック。
あからさまに面倒臭そうな態度を取るはるきに構うことなく、
これから案内すると言い張った。

不意に、ラックの視線が教室の中を泳ぐ。
彼の視線を追うと、赤栗色の髪の女の子と目が合った。
確か彼女の名前は、ハルトエラだ。

授業が終わったら話してみたいと思っていたことを
ラックのおかげで思い出し、私は思い切ってハルトエラに声を掛けた。

「これから学食に行くんだけど、一緒に行かない？」

ハルトエラは一瞬驚いたような表情を浮かべたが、すぐにニツコリ笑って、歩み寄ってきた。
その左肩には黄色い羽の蝶。シャオラン小狼がいる。

「いいよ。でも、もうお昼食へに行くの？ 早すぎない？」

くくくつ、とはるきが笑っている。

やはり、誰が考えてもお昼には早すぎるのだ。
ラックは私の隣に立つと、腰に両手をあてた。

「カエデとリンドは昨日ソレンティアにやって来たばかりなんだ。
だから、これから2号館に案内して、それから学食に行く予定だ」
「そういうことね。……分かった。」

私とシャオランも付き合っただけ。一緒にお昼食べよ？
「いいの？ ありがとう」

ハルトエラと小狼に礼を言いながら、
私は教室の後ろの方でおしゃべりをしている少女たちの方へと視線を移動させた。

色の白い肌に、金糸や銀糸のような髪。

その耳の先はリンドブルムのようにとんがっている。エルフだ。

「あの子たちも誘ってもいい？」

ラックに、はるきやハルトエラ、小狼に了承を得ようと彼らの顔を見渡した時だった。

ひそひそ声が耳に届いてきた。

歩み寄ろうとした足が固まり、身動きが取れなくなる。

自分の顔が強ばっているのを感じた。

だが、それは一瞬の出来事。

エルフの少女たちは私の視線に気が付くと、

ぱっと身を翻し、逃げるように教室を出て行った。

「行っちゃったな」

残念、とはるきが言い、ラックは肩を竦めた。

「カエデと友達になりたくないってわけじゃないと思うよ。

ただ、そうだな。初対面なんてそんなもんなのさ」

「……」

初対面だから気恥ずかしいとか、そんな次元ではないと思ったのだ。

なんとなくだけど。

（私の気のせい？）

ラックもはるきも誰も何も言わない。
気になるのは自分だけなのだろうか。

（自意識過剰かしら？）

いや、違う。

彼女たちは、私ではなく、
リンドブルムを視線で追いながら、ひそひそ話していたのだ。

「リンドって…」

（あの子たちに何かした？）

言い掛けて言葉を詰ませた。

リンドブルムの蒼々とした瞳に見つめられて、
その蒼に吸い込まれそうになったからだ。

頭を左右に振って、何でもないと口にした。

教室を出て、4号館からも出ると、

2号館を目指して芝生の中を突き進んだ。

もちろん、その方が近道だと、はるきが言ったからで、
後日ゆつくり“近道”ではない道も探そうと思った私だ。

ツツジの植え込みを跨ぐと、

4号館よりも背の高い校舎が現れた。2号館だ。

辺りを見渡して、位置関係を確かめると、私は頷いた。

「大丈夫。覚えた」

「本当かよ」

はるきが疑わしげな声を上げた。

なかなか一度では覚え切れないものだ、と言う。

「それじゃあ、私も一緒に受けてあげようか？」

え、と声の主を振り返ると、ハルトエラが小首を傾げている。

「3時間目でしょう？ 今日のはあと4時間目しかないの」

「そんなの悪い！」

「気にしないで。」

『初級物理防御』は、そのうち受けなきゃと思っていた授業だから

ついで、ついで、とハルトエラは笑った。
正直な気持ち、見知った顔が一緒というのは心強い。
3 時間目はラックとはるきだけでなく、
リンドブルムも違う授業を受けると言っていた。

「リンドは次、どの授業を受ける力？」
「『初級物理攻撃』だ」

シャオランの問いにリンドブルムが端的に答えると、
ラックは私の手の中の時間割表を覗き込んで言った。

「リンドが受ける授業も2号館だから、ここだぞ。
楓が102の教室で、リンドは101の教室だ」
「101は入ってすぐ。」

102はその奥の教室。リンド、一人で大丈夫かよ？」
「お？ はるきが珍しく他人の心配をしている」

「誰が！ オレは別に心配なんかしてないっ！ オレはただ…」

「はいはい。分かった分かった。」

心配はしていなけど、気になるんだよな？」

「うっ」

言葉を詰まらせて、はるきはそっぽを向いた。

「俺かはるきに自分の授業がなきゃ、

リンドと一緒に授業を受けるんだけどなあ」

「それなら、僕がリンドと同じ授業を受けるアルヨ」

「え。シャオラン、いいの？」

「物理攻撃の授業には前々から興味あったアル」

「それじゃあ、リンドのことくれぐれもよろしくね」

私は小狼の手を指先で摘んだ。

握手のつもりだが、なにぶん、サイズが違いすぎる。

リンドブルムは一人でも大丈夫だと胸を反らしているが、

これまでも行いを思い出したら、どう考えても大丈夫だとは思えない。

小狼の申し出は願ってもないことだった。

「絶対に目を離さないでくれる？ 何をしでかすか分からない子だから」

「了解アル」

身に染みて承知している小狼は神妙な面持ちで深々と頷いた。

12・言語の壁

学食は中央校舎の北西。

道なりに行くのであれば、戦闘魔法科の校舎を出て、運動場エリアを眺めながら、クラブ棟に向かって進む。突き当たりを右に曲がり、そこから最初の分かれ道を再び右に曲がれば着く。

ところがである。

案内役を買って出たのがはるきだったため、一行が道なりに進むはずなかった。

近道だと言って、芝生を突っ切り、植え込みを跨ぎ、戦闘魔法科の校舎からほぼ直線的に学食に移動した。

確かに近い。

いや、かなり近かった。

けれど、着いた頃には、障害物競争を走り終えた後のようなボロボロな気分になった。

私は肩で息をしながら、みんなの最後尾を歩いていた。

「カエデは体力がないな」

「戦闘魔法科は体力が基本だぞ」

ラックやはるきはもちろん、元気っ子なりンドブルムも平然とした顔をしている。

可愛らしい外見に反して体力があるらしいハルトエラの呼吸も乱れていない。

ひらひらと空を飛んでいる小狼は論外である。

彼にとって芝生や植え込みは障害物とは言わないからだ。

自分ばかり呼吸を乱している事実には、

戦闘魔法科に引つ張り込んだリンドブルムを恨みなくなった。

学食の入り口はガラス張りの扉。

重みのあるそれをラックは引つ張るように開いた。

「広い」

ぼつりと零した声に振り返って、ラックは微笑む。

「広いだろ？　こんだけ広くても混む時は混むんだよなあ」

「ほら、これ持てよ」

差し出されたクリーム色のトレイを受け取りながら、私は辺りを見渡した。

左手には天井まで届く大きな窓があり、中庭が見える。

中央校舎の北に広がる中庭は、その西側で学食と接しているのだ。

白や橙色の花を咲かせた木々が立ち並び、その木陰にはベンチが置かれている。

庭の中心は噴水だ。

その縁に腰掛けて話に花を咲かせている学生たちの姿も見えた。

学食は長方形の建物である。

そのため、入り口から入ると、奥に深い。

三列の長机がずっと端まで続いている。

右手を見ると、カウンターがあり、

様々な料理が所狭しと並べられていた。

料理に歩み寄りながら、ラックは人差し指を立てた。

「セルフサービスだから、ここで好きな料理を選んで、

自分で席に持っていくんだ。当然、席も自由。

そして、食べ終わったら、自分で食器を片付ける。片付ける場所はあそこだ」

「何でも自分でやるのね」

育ちの良い人なら、できない、面倒臭い、誰かやって、とか言いそうだけど、

あいにく私が育った家庭はごく標準的な家庭。

何でも自分でやることに慣れている。

加えて、普段から母親を手伝って食事準備をしているし、自分が使った食器を片付けるなんて当然のことだという考えの持ち主だ。

ちつとも苦ではない。

むしろ、自分で料理をトレーに乗せるなんて、
なんだかバイキングみたいで楽しい。

私は料理を一つ一つ覗き込んだ。

一皿で一人前とされている料理もあるが、
サラダやフルーツなどは好きな物を好きな量だけ皿に盛っていいらしい。

ただし、盛った量だけ金額を払わなければならない。

「そう言えば、お金って、私が持っているものでいいのかな？」

「持っているものって？ カエデは何を持っているんだ？」

私は鞆から財布を取り出すと、小銭をいくつか取り出した。

「ああ、ダメダメ。それじゃあ、ここでは使えねえよ」

はるきは大きく頭を左右に振ってから、
あそこ、と、さっき入ってきたばかりの扉の方を指差した。
その脇に自動販売機みたいな箱が置いてある。

「ソレンティアではルークが使われている。あれで換金するといいいよ」

「カエデの国の金がソレンティアではどのくらいの価値があるのか、見物だな」

「1ユーロは130ルークなんだよ」

「1元は15ルークアル」

ハルトエラに続いて小狼にそう言われ、私の脳裏に嫌な予感が過ぎった。

「その流れでいくと、たぶん円はもっと低いような…」

換金機に100円玉を入れてみる。

ぱっとモニター画面が動いて、100ルークの文字が表示された。

「やっぱり!」

なんだ、とハルキの声。

「1円1ルークかよ。」

まあ、でも、計算しやすくっていいんじゃないの?」

「ありがたいけど、ありがたくないってやつだわ」

100ルーク硬貨を取り出すと、続いて私は1000円札を換金機に入れ、1000ルーク札に換

金した。

（１０００ルークくらいあれば、大抵の物が食べられるわよね）

そう考えた上でのことだったのだが、それは杞憂に終わる。

学食の料理はどれも目を疑うほどに安値だったからだ。

３０ルークで、十分過ぎるほどの量をトレーに乗せることができた。

時間が早いこともあって、席はガラんと空いている。

日当たりの良い席を選んで、私たちは机の上にトレーを置き、椅子に腰掛けた。

向かい合って座ったハルトエラに私は、そう言えば、と尋ねる。

「エルって……」。

えーっと、私も“エル”って呼んでいい？」

「いいよ。私も“カエデ”でいい？」

「うん。あのさ、エルって、

ハルトエラ・宵里・バルザードっていう名前なんだよね？」

「そうだよ」

ハルトエラはスプーンを咥えながら頷いた。

「イタリア人に知り合いがないから、

イタリア人の名前ってよく知らないんだけど。

それでも、宵里っていう名前は、イタリア人っぽくないように感じるんだけど…?」

「私ね、おじいちゃんが日本人なの」

「そうなの!？」

大きく瞳を見開いて、ハルトエラの顔を凝視した。

その顔の中から日本人らしさを見つけ出そうとする。

そう言われてみれば、低く小さな鼻は日本人っぽい。

外国人独特の“濃い顔”の印象がないのだ。

なるほど、と納得した。

どおりでイタリア人であるはずの彼女と言葉が通じるわけだ。

おそらくハルトエラは、日本人だという祖父から日本語を習ったのだろう。

そう言つと、ハルトエラは一瞬、

言われた意味が分からないという表情を浮かべた。

「私、イタリア語を話しているけど?」

「え、うそ。だって、日本語を話しているじゃん」

「イタリア語だよ。さっきからずっと」

「でも…」

私は口ごもる。

ハルトエラが口に出している言葉はどう聞いても日本語なのだ。

「私、イタリア語なんてぜんぜん分からないよ？」

それなのになんでエルの言っていることが分かるの？　あり得な
くない？」

「そう言えば、不思議だわ。」

私だって、日本語なんてほとんど分からないのに、
カエデちゃんの言っていることは分かる。

そりゃあ、多少はおじいちゃんから日本語を習ったけど。挨拶程
度だもん」

「不思議だね」

ここが魔法学園だから、自動的に翻訳されて聞こえるのだろうか。
試しに、ハルトエラにイタリア語で

“そら” “あおい” “いいてんき” と言って貰った。

ゆっくり大きく口を動かして貰うと、

確かに彼女は日本語ではない言語を口に行っているらしいのだ。

明らかに口の動きが違う。

「単語に対して、余計に口を動かし過ぎているって感じ」

「カエデはちゃんと口を動かしていないって感じだね。」

文字が足りてないみたい」

私はちらりと小狼の方へ視線を向けた。

小狼は机の上に玩具のような机と椅子を置いて、そこで食事を取
っている。

小狼のような獣人をセントリアンというのだと、

戦闘魔法科の敷地から学食へ向かう途中で、ラックとはるきから説明を受けた。

本来ならば、セントリアンは獣人界のインセントルムという国に棲んでいるものだが、

小狼の出身地は人間界の中国だ。

となると、小狼が口に行っている言葉はこの国の言葉なのだろうか？

小狼の口調は、中国人がしゃべる下手な日本語のように聞こえるけれど、ハルトエラのことを踏まえると、おそらく小狼が口にしているのは日本語ではない。
では、いったい何語なのだろうか。

「中国語アル」

小狼はあっさり答えた。

「ただし、僕らは長い歴史の間、人間との交流を絶ってきたネ。人間が使う中国語と微妙に違うアルヨ」

「だから、たどたどしく聞こえるのかしら？」

「僕、たどたどしい力？」

「うん。ちよつとね」

言うてから、まずかったかなと思い、
私はすぐに小狼に、ごめん、と謝った。

すると、そのすぐ後で、確かに、とはるきがポツリと言葉を零した。

「今まで気にしたことがなかったけど、

言われてみれば、別の世界のヤツらと普通に話せるって、
実際あり得ないことだよなあ。

ソレンティアだからこそできるってことなんだろうな。
けど、どうせ翻訳してくれるのなら、

普通に聞きやすくしてくればいいのにさ。

実を言つと、オレもちょっとシャオランの言葉はたどたどしく聞
こえる」

「そうアルカ!？」

「うーん。訛なまっている感じがな。

いや、違うな。アクセントが違うっていうか、発音が変というか。
ああ、でも。やっぱりそれも訛りって言うのかなあ」

はるきは言い淀みながら眉間に皺を寄せた。

すると、その隣で、そうか、とラックが拳で手の平を打った。

「訛りだ。きつと、言葉の訛りなんだよ。

俺もさ、時々、訛っている奴がいるなあと思っていたんだよ。

国で訛った言葉を使っている者は、ソレンティアでも訛って聞こ
えるんじゃないかな」

「どういう意味？」

「つまり、その国の標準語とされる言葉を使っている者は、

ソレンティアで話す時、話し相手には、

その話し相手の国の標準語とされている言葉で聞こえるってわけ

だよ」

私は唇に人差し指を押し付けて考え込む。
それはどういうことだろうか。

これは例えばの話だ。

ハルトエラがイタリアの中でも訛りのある地域の出身だったとして、

ソレンティアでも訛りのある言葉で楓に話しかけてきたとする。
すると、私の耳には、ハルトエラがまるで関西弁や東北弁でしゃべっているように
聞こえるかもしれないということではないだろうか。

その場合、おそらく、ハルトエラの訛りがイタリアに於ける訛りのどの程度なのか、

それは日本に於ける訛りのどの程度なのかを比較され、
翻訳されるのだと思う。

とすると、小狼のしゃべる中国語は、
中国人が聞いてもやはりたどたどしいということになる。

カチャリ、と小さな音を響かせて、ラックがフォークを机の上に置いた。

「俺たちが推測できる限界はここまでだな。

もっと詳しく知りたいのなら、

世界の言語について調べている奴を探して聞いてみるといいよ」

「ごちそうさま、と言ってラックは席を立つ。
気付けば、いつの間にか食堂は人であふれていた。
2時間目の授業が終わり、昼食を取りに各学科の教室から集まってきたのだ。」

早めに昼食にして良かったと思いながら、私も席を立った。

空の食器を乗せたトレイを手に、食器返却口に向かおうとした。
その時だ。

視線を感じて足を止めた。

辺りを見渡す。

けれど、視線は誰とも交わらなかった。

騒音。

食器の悲鳴と、フォークとスプーンのダンス。

聞き取りきれない言葉の渦の中、ぼつりとその言葉だけが私の耳に届いた。

『嘆きのリンドブルム』

慌てて振り返った。

けれど、視線は背後から感じた。再び身を翻す。
次の視線は右手から。

いや、違う。

あちこちから視線を感じるのだ。

『あの子があなの?』

『響き谷で育てられたらしいわ』

『彼らは変わり者だから』

『混じり者』

『しつ。聞こえちゃう』

ぞわりと悪寒が走った。

根が生えてしまったかのように足が動かない。
暗闇に落っこちた気分だ。

「カエデ、置いていくぞ」

呼ばれて、ハッと顔を上げた。

リンドブルムが笑う。

とたん、さつと靄が晴れたような心地になった。

ひそひそ声だけを拾うように澄ませていた耳が

すべての雑音を集めるようになり、かえって何も聞こえないよう
になった。

(聞こえない方がいい)

嘆きのリンドブルム。

言葉の意味は分からないが、その響きは何やらとても不吉なもの

のように感じた。

私は緩やかに頭を横に振ると、
リンドブルムたちを追って早歩きで食器返却口へと向かった。

13・二つの大国

（な、な、何時？）

掛け布団の中から腕を伸ばし、枕元に置いたはずの目覚まし時計を探してみるが、手は虚しく空を切るばかりで、見付けることができなかった。

（時計がない！）

それもそのはず。

ここは私の家の自室でもなければ、人間界ですらない。そうか、と思い出して、布団から体を引き離れた。

（ここはソレンティアだ）

ベッドの上に腰掛けて、ガランとした部屋を見渡した。

隅の方に小さな机と椅子があり、壁際にぽつりとタンスが置いてある。

窓はない。

そのため昼間でも電気を点けなければ暗くて仕方がなかった。

太陽の光が恋しいと言えば、今日は太陽の日だ。
人間界でいうと、日曜日にあたる曜日で、授業がない。

昨日は朝から『属性魔法の基礎その1』という授業を受け、
午後は3時間目に『初級物理防御』、5時間目に『初級支援魔法』
という授業を受けた。

そして、5時間目が終わり、ネツアク寮に帰ってきたのは、18
時過ぎ。

我ながら初日にしては頑張ったと思う。

そんな日の翌日はのんびり寝ていたいところだけど、そうはいか
ない。

今日は彩とモードス・シヨップに行く約束をしているのだ。

どうしても絨毯が欲しいのと言うと、

彩は自分の入寮したての頃を思い出したのか、大きく頷いて、
案内してあげる、と言ってくれた。

そんな優しい彩との約束を破るわけにはいなかった。

私は気合いを入れると、ベッドから足を降ろした。
ピンクタイルがひんやりと冷たくって、眉を寄せる。

足の先だけで歩きながらダンスのところまで行くと、服を取り出
した。

突然ソレンティアに来てしまったわけだが、
修学旅行用の荷物を持っていたおかげで、しばらくは着替えに困
らなさそうだ。

(でも、そのうち買い足さないとダメよね)

身支度を調べると、部屋から廊下に出た。

そう言えば、昨日の夕食の席で、

6時間目を履修する者は大変だという話を彩とした。

6時間目は17時50分から始まる。

夏でもない限り、日は暮れてしまっている時刻だ。

それなのに、そんな時間から授業をしなければならない者は大変だと私が言つと、

彩は、6時間目を履修する者はめったにいないのだ、と言って笑つた。

「時々いるんだけどね。」

どうしても陽射しが苦手だから日が落ちてから授業を受けるんだって人が。

けど、大抵の人は、4時間目までの授業で終わりにして、部活動や同好会活動、グループ活動を楽しんでいるんだよ」

なるほど、と頷くと、彩はお薦めのグループをいくつか紹介してくれた。

もう少し学園生活に慣れたら、グループに参加することも考えてみようと思った。

サロンで待ち合わせをしていたので、階段を下り、サロンへ向か

う。

扉を開けると、彩は待ちわびた顔を上げて微笑んだ。

「おはよう。よく眠れた？」

「眠り過ぎちゃったみたい。待たせてごめんね」

「大丈夫。さやかちゃんと話していたから」

「さやかちゃん？」

言われて彩の隣を見やると、

同じくらいの年頃の女の子がちょこんとソファに座っていた。

ふわっとした黒髪は短く切り揃えられていて、

大きなピンク色のリボンで結ばれている。

「ケセド寮の^{ひの}日野原さやかちゃん。

同じ日本人だから楓ちゃんに紹介したら喜ぶかなあと想着て、来

て貰ったの」

「そうなの？　ありがとう。すごく嬉しい。

彩ちゃん以外の日本人って、本当にいるんだね」

「いるって言ったじゃん」

彩は苦笑しながら私とさやかの間に立つと。

「秋野楓ちゃん。一昨日入学して来たばかりだよ」

「おはようございます、楓さん。日野原さやかです。

今日はこれからモードス・ショップに行かれるそうですね？

もし宜しかったら一緒に一緒させてください。私も気になる物がある

のです」

「え、あ、うん。いいけど……」

さやかは口からスラスラ出てきた丁寧口調に度肝を抜かれて、私は救いを求める眼を彩に向けた。彩は片手を顔の前で左右に振った。

「ああ、さやかちゃんの丁寧語はどうしようもないから。もう誰にも直せないの。誰が相手でも丁寧に話すから、気にしないでいいよ。」

そうそう。この前なんてね、さやかちゃんってば、犬に向かって丁寧語で話しかけてたよ。しかも、真顔で」

あれはさすがにビックリしたと言って彩は笑う。

サロンを出て、エントランスを抜けると、寮の外へと出た。ここソレンティアでは、どこへ行くにもまずエレベーターに乗らなくてはならない。

エレベーターホールに向かって、木立の道を進んだ。

「そう言えば、リンドちゃんは？」

「行かないって。買い物とか好きじゃないみたい」

「えー。楽しいの？」

私なら、人様の買い物でも楽しいよ。見て回るだけでもいいって感じ」

「分かる。小物とか見るの楽しいよね。」

あと、いい店を発掘して歩くのも好きだよ」
「さやかちゃんは？」

彩が話を振ると、さやかはにっこりと微笑んで、私も好きです、と答えた。

「：けど、すぐに人に酔ってしまうんです。
私の実家はとも田舎なので、人が少ないんです。
隣の家に行くためにも山を越えなければいけないくらいで。
なので、人が多い場所は苦手です」

そっか、と私。

相づちを打ちながらエレベーターのボタンを押した。
ランプが灯り、扉の奥でエレベーターが動く音が小さく響き始めた。

けど、と言って、さやかは言葉を続ける。

「ソレンティアに入学して、タウン・エスペランサに初めて行った時、

見る物すべてがキラキラしているように見えたのです。

人の多さを気にする余裕なんてありませんでした。

おしゃれな洋服、綺麗な指輪、可愛いコップに、たくさんの本。
それらを見ているだけで胸がいっぱいになったんです。

わくわくして、楽しくって。

たとえそれを手に入れることができなくっても、いつか買いたい、
必ず買おう、と思うだけで幸せになれるんです」

「うんうん。分かる。分かる」

彩が大きく頷いた時、軽い音が鳴って扉が開いた。
エレベーターに乗っていた少女がチラリと私に視線を向け、
それから彩に顔を向けた。

「おはよう、アヤ」

「エマ、おはよう。どこかに行ってたの？」

「ちよっと友達のところだね。アヤたちはこれからどこかに行くの？」

「うん、モーダス・ショップに。楓ちゃんの家具を買いに行くんだよ」

ふーんと鼻を鳴らして、少女は再び私の方に視線を向けた。
青い瞳。

すっと伸びた鼻筋はハリウッド女優のようだ。
銀糸を束にしたような髪。

キラキラと陽射しを反射させて、とても綺麗だ。

（エルフだ）

先の尖った耳を見付けて、私はエマの顔を見つめ返した。
エマはくすりと笑みを漏らして、エレベーターの中からゆっくり
と出てきた。

「初めまして。私はエマ・クロサイト。
今日はあの黒い子と一緒にじゃないのね。安心したわ。
あんまり関わらない方が貴女のためですもの」

流れるようにそれだけを言うと、私の脇を通り抜けて、すたすた去っていく。

その後ろ姿が寮の中へと吸い込まれるまで、
私はまるで雷に打たれたかのような気分で立ち尽くしてしまった

（黒い子？）

それが誰のことであるのか分からないはずがない。
確かに浅黒い肌をしている。

そして、黒々とした髪を持っている。
けれど、それが“黒い子”と言われなければならない要因にはならないだろう。

しかも、エマの口調は明らかにその黒さを蔑んだ物言いだった。

自分のことのように悔しくて唇を噛みしめた。

「楓ちゃん、エレベーターに乗ろう？」

彩に促されて私は無言で頷いた。

彩に続いて小部屋の中に入ると、最後にさやかが入って、扉が閉まった。

静かな音を立てて上昇を始める。

「悪い子じゃないんだよ。」

同じネツアク寮の子なの。だから、嫌わなideあげてね」

「嫌いになるほど、まだあの子のこと知らないから」

大丈夫、と言って私は顔を上げた。

笑おうとしたが、無理矢理過ぎてひどく歪んだ顔になってしまった。

「リンドはあの子に何かしたの？」

「分からない。」

でも、リンドちゃん、入学したその日にまっすぐ寮に来なかったでしょう？

おかげで寮長のオードリーは門のところで待ちぼうけを食らっちゃったの」

それは先日同じように彩から聞いた話だった。

リンドブルムはチーロに連れて来られてソランティアの入り口までやって来たが、

チーロに騙されて連れてこられたと思い、

彼を捕まえ元の世界に帰ろうと一晩そこで明かしたのだ。

「オードリーはネツアク寮のエルフたちにとってアイドル的な存在なのよ。」

その彼女をリンドちゃんは粗雑に扱っちゃったわけよね？

エルフたちがリンドちゃんをよく思わないのもちよつと分かる気がする」

「でも、だからって……」

私は口籠もった。

“黒い子”の響きの暗さは、

自分たちのアイドルを待ちぼうけにしたことへの恨みだけとは、とても思えなかった。

ふと、昨日学食で耳にした言葉を思い出した。

『嘆きのリンドブルム』

あの響きにも、ぞつとする嫌悪感が込められていた。

「オードリーは必ず入寮生を案内するの？」

「ううん。そうでもないわよ。本当は寮長の仕事なんだけど、副寮長のオルガに任せてしまうことの方が多いわよ」

「じゃあ、なんでリンドの時はオルガに任せなかったの？」

「それはリンドちゃんが響き谷の領主の姪だから敬意を払って」

「響き谷の領主って、そんなに偉い人なの？」

質問詰めにし過ぎたのか、彩はむむつと顔を顰めた。

「アルヘイムのお国事情なんて、私には分からないよ」

アルヘイム？ と首を傾げると、

それまで黙って二人のやり取りを聞いていたさやかがおずおずと口を挟んできた。

「妖精界にあるエルフたちの国のことです。

妖精界にはアルヘイムとアルカウムという二つの大きな国がある、
て、

1000年くらい昔この両国は戦争を起こし、
両国とも大きな犠牲を生じさせたそうです。

それ以後、両国は同盟関係にあるようですが、

アルカウムの民を忌むアルヘイムの民は尽きず、

またアルカウムの民を忌むアルヘイムの民も尽きないと言われて
います」

「ちなみに、アルカウムっていうのは、ダークエルフの国のことだからね」

さやかの説明に人差し指を立てて彩が付け加えた。

私は眉を寄せる。

「ダークエルフって？ エルフとはどう違うの？」

「私にもよく分からないんだけど、ぱっと見、肌が黒いのがダーク

エルフかなあ」

「美しい外見と高い知性を持つのがエルフで、
剛健な体と高い戦闘能力を持つのがダークエルフだと、私は聞いています」

すると、リンドブルムはどちらなのだろうか。

肌の色を見ると、ダークエルフなのだろうと思う。

けれど、従兄^{いとこ}であるイデアブルーとハルシオンの外見の美しさはどう考えてもエルフだ。

『混じり者』

再び不意に、学食で耳にした言葉が脳裏に過ぎった。

「まさかハーフ？」

口にすると、彩とさやか^{さやか}の視線がパツと自分の方に集まったのを感じた。

「それよ！ それなら説明がつく！」

「エルフならエルフの仲間ができます。

ダークエルフならダークエルフの仲間が。

ですが、そのハーフであれば、どちらからも疎^{うと}まれます」

「オードリーはそれを懸念して、

自分が率先してリンドちゃんを受け入れる姿勢を

エルフたちに見せようとしていたんじゃないかな？」

「それなのにリンドはオードリーを待ちぼうけにした」

「翌日オードリーが自室に籠もってしまったのも頷けるわね」

そして、ネツアク寮のエルフたちが

ますますリンドブルムを良く思わなくなっただのも当然だ。

リンドブルムの行いの悪さに呆れながら、エレベーターの天井を仰いだ。

すると、まもなく、がこん、という小さな振動と共にエレベーターが停止した。

14・タウン・エスペランサ

扉が開いて、わっと押し寄せてきた騒音に思わず瞼を閉ざした。そして、次に目を開いた時、その瞳は一つの街を映していた。

（信じられない）

くれぐれも忘れてはならないことだが、
ここはアイン・ソフ・アウルと呼ばれる塔の中だ。
その中に、学校があり、寮があり、そして、街がまるごと一つあることになる。

彩の説明によると、授業を行う教室は低層階だが、
寮やここ、タウン・エスペランサは、塔の中層階に位置するらしい。

更に説明すると、

中層階にはベリアーとイエツィラーと呼ばれるエリアがあつて、
寮やタウン・エスペランサはイエツィラーに位置する。

対して、ベリアーと呼ばれるエリアには、講師や職員のための施設があるらしい。

エレベーターを出るとすぐ円形の広場になっていた。
その中心には彫刻が置かれており、
それを囲むように花壇、そしてベンチが置かれている。

広場を貫くように東西に幅の広い道が続いている。

騒音は、道のこちら側、左手から聞こえてくるようだ。そう思って、そちらに目を向けると、巨大な観覧車が見えた。

「ルードンスパークだよ。」

いわゆるアミューズメントパークで、いろんなゲーム機があるの」

「卓球やダーツ、ボウリングなどもできます」

「へえ。遊べるところもちゃんとあるんだ」

今度遊びに行こうと言い合いながら、私たちは道の向こう側に渡った。

そこから道は三方向に分かれる。

東の道からは美味しそうなパンの匂いが漂ってきて、私は足を止めた。

「いい匂いがするね」

「レインボー・ベーカリーっていう名前のパン屋さんがあるんだよ。おでんパンやラーメンパンみたいな面白いパンが売られているの」

「何それ、おでんパン？ ラーメンパン？」

中におでんの具が詰まっているパンを想像した。

百歩譲って、ラーメンパンは有りのような気がする。

ラーメン味の何かという商品は結構あるものだからだ。

「おでん味のパンを作る意味がわからないわね。」

おでんが食べたいのなら、ちゃんとおでんを食べればいいじゃない

「い」

「楓ちゃんは分かってないね。」

おでんじゃなくて、パンが食べたいからパン屋に来るんだよ。でも、急におでんも食べたくなって、だから、おでんパンを買うの」

「彩さん、それもう少し違うような気がします。」

皆さん、物珍しさで買われていくのではないでしょうが」

レインボー・ベーカリーの隣にはカフェ・グーラーという飲食店がある。

大盛りランチが自慢のお店らしい。

更にその道をずっと奥に進んでいくと、

ブルクラという、ヘアスタイルからネイルアート、エステやマッサージまで

いろいろなサービスが受けられるサロンスペースがあるのだと、彩は説明した。

「楓ちゃん、女の子としては要チェックだからね。」

後で連れて行ってあげる」

「ありがとう」

そんなやり取りをしながら、一行は西の道を進んだ。

真ん中の道には何があるのかと聞くと、

いろいろあるよ、という微妙な答えが返ってきて、

私はそれ以上の追求を諦めた。

西の道の入り口すぐにアルマ・フロマがある。

ここはファッション用品専門店だ。

そのショーウィンドウには、綺麗に着飾ったマネキンが置かれていて、

彩の目はそれに釘付けになった。

「ああ。いいなあ。あれ、いいなあ」

「うん、可愛いね」

「欲しいなあ。欲しいなあ。すごく欲しいなあ。」

でも、今月ピンチなの！」

「しかも今日は私の買い物だしね」

ショーウィンドウにへばり付いた彩を、

私とさやかは数分かけて、苦労しながら引きはがした。

アルマ・フロマの向かいは、スイート・スイートというアイスクリームショップだ。

カラフルなアイスクリームが描かれた看板がよく目立つ。

スイート・スイートと同じ並びに、今度はさやかの歩みを止める店が現れた。

オーウオー&マーラだ。

巨大な本屋で、店頭には新刊の本がずらりと並べられている。

「すごいです。新しい本が出ています！」

「さやかちゃん、ごめーん。」

今日は本を買いに来たわけじゃないから」

先程の仕返しとばかりに彩はさやかの腕を引つ張って、ずんずん歩き、オーウォー&マールからさやかを引き離れた。ああ、と切なげな声がさやかの口から漏らされ、私は笑い声を響かせながら二人の後を追った。

そのあとも、それぞれがそれぞれの店の前で足止めを喰らい、他の者に引つ張られるということを繰り返しながら道を進み、ようやく目的のモードス・ショップにたどり着いた。

モードス・ショップは家具専門店である。

タンスや机、大きな家具に歓迎されて3人は店の中に入った。

「大きいものは手前で、小物は店の奥の方にあるからね」

「でも、絨毯じゅうたんなんて重い物を買ったら、今日はそれしか買えないよね」

「なんで？」

「持ち帰るのが大変じゃない」

そう言つと、彩はケラケラと笑った。

「やだあ。楓ちゃんってば、自分の手で持って帰る気まんまんだったの？」

「そんな力持ちじゃないでしょ。無理無理」

「ここで購入した家具は魔法で転送されて、寮の部屋まで届けられるんです。

なので、楓さんが部屋に戻る頃には、

購入した絨毯が床に敷かれていますよ」
「そうなの!？」

信じがたいが、思い返せばここは魔法学園だ。

あり得ないことはこの数日間において他にもいろいろあったではないか。

購入した家具が魔法で転送されるくらい大したことではない…。

(いや、嘘です! かなり大したことですよ!!)

さやかのだんご口調が微妙に伝染したらしく、
だんご語で一瞬前の自分の考えを否定した。

「なんかすごくない？」

「さすがソレンティアって感じでしょ」

ふふん、と鼻で笑って彩は絨毯が並べられているスペースに歩み寄った。

丸められた絨毯がいくつも壁に立て掛けられている。

その手前に小さな机があって、カタログが置かれていた。

彩はカタログを手にとると、私たちに見せるように広げた。

「絨毯もいいけど、フローリングにしてみるのもいいんじゃない?
日本人らしく畳たたみっていう手もあるよ。」

変わり物を選ぶのなら、芝生絨毯かな」

「芝生絨毯？ どういうこと？」

「そのまんま。芝生なの」

「は？」

「えーっと、つまり。」

絨毯のように部屋一面に芝生を生えさせることができるんです。

聞いた話だと、春の芝生は柔らかく暖かだけど、

夏の芝生は固くてチクチクしているんだそうです」

「秋の芝生や冬の芝生もあるんだよ。ほら、ここ。こんな感じ」

そう言って、彩はカタログの写真を見せてくれた。

なるほど、確かに部屋の中に芝生が生えている。

他にはどんな絨毯があるのか気になり始めて、

彩からカタログを受け取り、ページを捲った。

（石畳の床？

これは却下。今のピンクタイル以上に足が冷たそうだ）

それにしても、と思う。

写真の下に記載された値段があり得ないくらいに安値なのだ。

例えば一番ノーマルな感じの単色絨毯。

これは40ルークである。つまり、40円。

40円で絨毯が買えるなんてこと、人間界では絶対にあり得ないことだ。

ちなみに、と彩が人差し指を立てた。

「すでにお察しの通り、ソレンティアで購入した物はすべて人間界にお持ち帰りすることはできません」
「あ。やっぱり？」

それができたら、ぼろ儲けだ。
ソレンティアで仕入れて、人間界で売りさばけばいいのだから。
けれど、悪いことってというのは、
そう容易には、できないようにできているらしい。

私は更にぺらぺらとカタログのページを捲り、
ふと、あるページで手を止めた。

「これがいーかな」

「どれどれ？」

「魔法陣の絨毯ですか？」

頷くと、彩がパアッと顔を上げた。

「私もその絨毯を選んだんだよ」

「そうなの！？」

「うん。一番、魔法学園っぽいから。
ソレンティアに来たー、って感じがする絨毯だよね。
色は、何色にする？」

彩は壁に立て掛けられたいくつかの絨毯の中から、魔法陣の絨毯を探し出して、私を手招いた。実際に目の前にすると、丸められ棒状になった絨毯は私の背丈よりもずっと高く大きかった。

そつと手のひらで撫でてみる。
柔らかい。

ビロードのような…とはいかないが、上品な手触りだ。

「黒はちよつと」

「うん。部屋が暗くなっちゃうもんね」

「赤もきついなあ」

「うん。魔法陣の柄が目立ち過ぎるよね。じゃあ、青か白だね」

青と白の絨毯を見比べて、私は白い方を指差した。

「こつち」

「すごい。私とまるつきりおそろいだ」

「え。そうなの？」

「うん、私も白い方を選んだんだよ。気が合っちゃったね」

手を叩いて喜んでくれた彩に笑顔を浮かべ、店員を呼んだ。絨毯の購入が済むと、店の奥へと進み、他に必要な物を買うことにした。

まず必要な物は電気だ。

あと、可愛いマグカップが欲しい。あとは…。
品物を見ながら考えることにした。

ああでもない、こうでもない、と3人で騒ぎながら、
いくつか購入してモードラス・ショップ出ると、太陽は西に傾きか
けていた。

「お昼、食べ損なっちゃったね」

時刻は15時を過ぎたあたり。
そう言えば、と言って私はお腹をさすった。

「寝坊したと思って、朝ご飯も食べていない」

「え。そうだったの？」

「うん。目覚まし時計がなかったから、起きられなくて。
大慌てで支度して、そのままサロンに行っちゃった」

「そうだったんだ。じゃあ、お腹空いたよね？」

眉を顰めた彩に、さやかが飲食店を指差した。

「何か食べませんか？」

「うーん。そうしたいのはやまやまんだけど、

この時間に食べちゃうと、ちょっと困ることになるんだよねえ」

そう言つて、彩は洩り顔だ。
私は小首を傾げた。

「どうかしたの？」

「実はね。みんなから口止めされていたんだけど、
今日の夕食で、楓ちゃんの歓迎会を開く予定なの」

「ええっ。そうなの？」

「うん。今日、解放日だから。」

解放日だとね、食堂の男子寮と女子寮の間の壁を取り払って、
みんなで食事を取るの。

そして、その日までに新入生がいれば、
その新入生の歓迎会をすることになっているのよ」

驚かせようと思って内緒にしてくれていたらしいのだが、
言っちゃった、と彩はぺろりと舌を出した。

「だから、歓迎会の料理をたっぷり食べられるように、
今ここで物を食べるわけにはいかないの！」

「ごめんね、とさやかに両手を合わせた。
さやかは緩く頭を振る。

「それなら仕方ないです」
「ところで、さやかちゃん」

さやかがしょんぼりと謝ったので、話題を変えようと、私はつとめて明るい声を上げた。

「さやかちゃんが欲しいって言っていたものは？」

さやかは道の先にあるペットショップを指差した。

「犬用のブラシが欲しいです」

「犬用？ 犬飼っているの？」

「はい。アンズという名前のイタリアン・グレーハウンドです」

そう犬種を言われても、どういう犬なのか分からないと言うと、さやかはカードケースに入れた写真を見せてくれた。

「可愛い！」

ほっそりとした犬だ。

すっと脚が伸び、やはり細い尻尾が生えている。

つん、と鼻が長く、くりくりした大きな瞳が印象的だ。

可愛いを連呼すると、さやかは頬を赤らめて大きく頷いた。

「つい最近飼いだめたんですけど、とても可愛いんです！」
「じゃあ、可愛くって使いやすいブラシを見付けないとね」
「はい」

ウキウキしたさやかを先頭に3人はペットショップの中に入った。
結局そのあと、彩も自分の買い物をして、
帰りのエレベーターに乗った頃には、すっかり空は赤く染まっていた。

このまま自分の寮に帰ると言ったださやかは、
ケセド寮でエレベーターが停まると、
ぺこりと頭を下げてエレベーターを降りていった。

再び扉が開き、ネツアク寮に着くと、
辺りは藍色に包まれている。

「遅くなっちゃった？」

「大丈夫。まだ18時だから。」

きつと今ごろ食堂は、歓迎会の準備で、てんてこ舞いしているよ」
「なんだか悪いね」

「ぜんぜんだよ。だって、みんな、
何かにこじつけて自分が楽しみたいだけだから」

彩はケラケラ笑って、片手を左右に振った。
つられて、私も笑う。

「それならいいけど。私も嬉しいし」
「うん。私も楽しいよ」

もう一度笑い合い、ただいま、と言いながら寮の中へ入った。

15・歓迎会

リンドちゃんも連れてきてね、と彩に言われたので、私はリンドブルムの部屋の扉を叩いた。

だが、扉の向こうは静まり返っていて、返事がない。もう一度ノックしてみる。やはり静かだ。

「リンド？」

悪いかな、とは思ったけれど、そつと扉を開いて部屋の中を覗いてみた。

誰もいない。

ぼつりと、空のベッ^{から}ドだけが所在なく置かれていた。

「もう。どこに行っちゃったのよ！」

不平をぶつけるように音を立てて扉を閉めると、自分の部屋に戻った。

机に視線を向け、その上に置かれた鞆を手にした。鞆の中から取り出した物は、ノートだ。

ピリッと、一枚破いて、その上にペンを走らせる。

『リンドへ、これを読んだら食堂に来ること。楓』

さらりと書くと、ピンを一つ握り締め、再びリンドブルムの部屋の前に戻った。

リンドブルムが部屋に戻ってきたら真っ先に目に入るように、ピンでメモを留め、扉に貼り付けた。

「うん。これでよし」

満足げに頷くと、ひとけ人気のない廊下を進んだ。

北階段を降りると、そこからは一転して人のざわめきで溢れている。

アンティーク調の扉を押し開くと、食堂に集まっていた者たちが一斉にいっせい振り返った。パアン、とクラッカーが鳴らされる。

「ようこそ。我らが翠玉の寮、ネツアク寮へ！」

「はいはい。主役はこっちやで」

赤毛の少年に腕を引かれ、配膳カウンターの前に連れて行かれた。ちゃぶ台に布を被せたような、ちょっとしたステージが作られており、

その脇に立つように言われる。

ふと、視線に気付き顔を上げると、

私同様にステージを挟んで向こう側に立っている少年と目が合った。

子どもっばい大きな瞳だ。

赤い。

いや、瞳の中心に向かって濃く、

縁^{ふち}に向かって薄紫にグラデーションとなっている。
陽の光に透かせたガラス玉のようだ。

（この瞳、どこかで見たことがあるような…）

栗色の前髪はセンター分け。

そこから覗く額に花のような痣があった。

（この子、フォウス・ヴェーダなんだ）

入学初日イデアブルーとハルシオンが説明してくれたことを思い出した。

学生課の受付をしていたリスは、ナノス・ヴェーダという機精人だが、

そのナノス・ヴェーダを造り、支配する機精人がフォウス・ヴェーダなのだ。

『彼らの顔には刺青いれずみのような痣がありますから、
一目で分かると思いますよ』

そのハルシオンの言葉通り一目で分かることできた。
私が額の痣を凝視していると、栗色の髪の少年はぺこつと浅く頭
を下げた。

慌てて私も挨拶を返す。

キーン、と赤毛の少年が手にしたマイクが悲鳴を上げる。
さあて、と彼はマイクを口に当て、奇妙な関西弁で話し出した。

「新人生がまだ一人来てへんけど、
もう時間過ぎてしもつたんで、始めさせてもらっで！
今晚の司会進行役は、ネツアク寮のペテン師、紅巳ベニミや！」

イエーイ、とマイクを持った手を天井に向かって高く上げると、
再びマイクが耳障りな音を立てた。
野次が飛ぶ。

「うるせえぞ、コウ！」
「自分でペテン師とか言うなー！ ペテン師！」
「ネギ食わせるぞ！」

主に男の子たちからの野次だ。
みんな好き勝手に言葉を投げ、笑い、クラッカーを鳴らしている。

紅巳は、にししつ、と悪戯つ子の笑みを漏らすと、
背中から生えた黒い羽を大きく動かした。

蝙蝠こうもりのような羽。

彼はノックスペンナリアンという種族の獣人なのだという。

「みんな、お腹がぺこぺこでイラ立っとなあ。
まずは新入生からの挨拶や。これ聞かな、食わせへん。
ほな、レディーファーストっわけで」

はい、と紅巳からマイクを手渡された。
名前と出身世界と学科くらいの軽い自己紹介でいいから
何かしゃべって、と指示される。

私は食堂を見渡した。
男子寮と女子寮の間の壁を取り払っただけあって、いつもの倍の
広さになっている。
集まった顔もたくさんだ。
ほとんど知らない顔。

けれど、一番前に彩の顔を見付け、
更に男の子たちの群れの中からラックとはるきの顔も見付け、
ホッと胸を撫で下ろした。

「えーっと、秋野楓です。人間界の日本から来ました。
学科は、戦闘魔法科です。
ソレンティアに来るまで、ソレンティアの存在さえ知らずに生き

てきました。

入学して3日の間にいろんなあり得ないことがあって、驚き通しです。

分からないことだらけなので、いろいろと教えてください。
よろしく願います」

最後にペコリと頭を下げ、私はマイクを紅巳に返した。
拍手が湧く。

紅巳は受け取ったマイクをそのままフォウス・ヴェーダの少年に手渡した。

「ほな、次。ソード頼むわ」

頷いてマイクを受け取ると、少年は口を開いた。

「俺の名前は、ソード・ライ・フィールド。

出身世界は機精界。レグナヴェーダから来た。

年は14歳。学科は戦闘魔法科。

ケセド寮に双子の弟がいる。

挙動不審な俺を見かけたら、たぶんそれは俺じゃない。

弟の力リスだから、よろしく！」

可愛らしい外見にそぐわない元気な挨拶だった。

私は目を瞬かせてソードを見やる。

（あの子も戦闘魔法科なんだ。

同じ時期に入学してきたってことは、同期ってことになるのかな？
きっと同じ授業を受けることになるんだろ（うな）

それにしても、と思う。

機精人にも双子というものがあるらしい。

“機精人”という字面から

何となく機械に魂が宿ったモノというイメージを持っていた。

実際、門兵をしていたナノス・ヴェーダはまさしくロボットのようだったし、

リズムもことん融通が利かなかった。

もっともナノス・ヴェーダはフォウス・ヴェーダが“造る”らしいので、

私のイメージ通りなのだろう。

それでは、フォウス・ヴェーダはどのようなものなのだろうか。

肉体は有機物でできていると聞いた。

だけど、心臓はなく、代わりに魔力を動力源とした“核”が
体の中心に埋め込まれているらしい。

（埋め込まれている？）

ということは、埋め込んだ者がいるということなのだろう。
それにはまず埋め込むための肉体を造る必要がある。
やはりフォウス・ヴェーダも造られた生命体なのだ。

すると、人間や妖精、獣人たちのように、父親がいて、母親もいて、

母親の胎内から生まれるという誕生の仕方ではないことは確かだ。

（じゃあ、フォウス・ヴェーダの双子って何？）

同時に核を埋め込まれたということなのだろうか。

（よく分からないなあ）

そもそもフォウス・ヴェーダの家族認識ってどうなっているのだろうか。

フォウス・ヴェーダ自身もフォウス・ヴェーダによって造られるのだとしたら、

フォウス・ヴェーダとして造った子どもは自分の子で、
ナノス・ヴェーダとして造った子どもは使用人として扱っている
ということになる。

同じ“造った”なのに、この差はいったい何なのだろうか。

ソードに尋ねてみたいと思ったが、

紅巳の大声が響き、気が削がれてしまった。

「みんな、グラス持ったか？　いくで。

新入生二人の前途を祝って、かんぱい！」

紅巳が高々とジュースの入ったグラスを掲げると、あちこちでガラスの高い音が響いた。

乾杯、乾杯、と言い合いながら、皆グラスをぶつけ合う。

乾杯が終わり、グラスをテーブルに置くと、待ってましたと男の子たちが食事に飛び付いた。食器がガチャガチャと騒ぎ出す。

そのあまりの賑やかさに呆気に取られていると、紅巳が苦笑して、新入生2人の背中を叩いた。

「さあさあ、料理が無くならんうちに、俺らも食いに行くで」

言って、紅巳は台から飛び降り、

一番近場のテーブルに歩み寄ると、私とソードを手招いた。彩が皿を手に駆け寄ってくる。

「はい、どうぞ。適当に盛ってみたよ。嫌いなのがあったら、ごめんね」

「ありがとう」

皿とフォークを受け取ると、私はソードを振り向いた。彼は彼で男の子たちに囲まれ、料理を受け取っていた。彩を呼ぶ声が聞こえて視線を向けると、背中に白い翼を生やした少女が近付いてきた。

「彩、紹介してくれ」

「うん、分かった」

彩は頷いて、少女と私の間に立つ。

「楓ちゃん、おほろぎきょう 朧木響羅ちゃんだよ。

なんと響羅ちゃんはね、人間界の日本出身なの。大天狗一族なんだよ。天狗だよ、天狗！」

「は？ 天狗？」

予想外な彩の言葉に、私の脳裏にハテナマークが浮かんだ。
天狗。てんぐ

それは大昔の日本人が、船の難破などで日本に流れ着いてしまった西洋人を目にして、

鬼だ、妖怪だと驚き、また恐れた結果についた呼称だ。つまり、伝説的に語り継がれている天狗など、本当は存在しない

…はずなのだが。

響羅は涼しげな顔をして羽団扇はうちわを広げ、
すつと横に引かれた瞳で私を見据えている。

「たぶん、キョウラの祖先もシャオランの祖先のように、
大昔に獣人界から人間界に移住してきたんじゃないかな？」
「どう見てもキョウラは獣人だけど、
本来、人間界には獣人はいないはずだからな」

振り返ると、いつの間にラックとはるきが近くに来ていた。

「じゃあ、もしかしたら、西洋人を見て天狗だと言い出したのでは
なくって、

本当に本物の天狗、響羅の先祖の誰かを見て言い出したことなの
かもしれないのね」

「ホント驚くよね。
私も響羅ちゃんと初めて会ったとき驚いちゃったもん。本物だ、
って！」

でさ、天狗が本当にいるのなら、人魚とか、ケンタウルスとかも
いそうだと思わない？

まだ会ったことがないけど、獣人の中にはきつと魚の種族とか馬
の種族とかいそうだもん。

その人たちが密かに人間界に移り住んでいたら、人魚とケン
タウルスだよね」

夢見るように瞳をキラキラさせながら彩が言つと、
はるきが軽く鼻を鳴らした。

「密かに世界間を移動するなんて不可能だ。

おそらく調べれば、キヨウラの祖先もシャオランの祖先も、
世界を渡った時の明確な記録がアイン・ソフ・アウルに残ってい
るはずだ。

いつ、どこからどこへ、何の理由で、つて。

異種族が混じり合えば、各世界の混乱が生じてしまう。

それを防ぐために厳正な審査があり、

それに値するだけの能力を有する者だけが世界を渡るよう、

アイン・ソフ・アウルによって管理されている」

「でも、アイン・ソフ・アウルに内緒で、別ルートから渡っちゃう
人もいるかもよ？」

「それは絶対無理。

なぜなら、4つの世界はアイン・ソフ・アウルを中心に繋がって
いるからだ。

異世界へ行くためには、必ずアイン・ソフ・アウルを通らなけれ
ばならない。

獣人界から人間界に直接行くことなんてできないんだ」

はるきの説明を聞いて、そっか、と彩は力なく肩を落とした。

「楓ちゃん、夢破れちゃったよ」

「ドンマイ、彩ちゃん」

くすくす笑いが響いた。
視線を上げると、ラックが微笑みながら、破れたわけではないよ、と言った。

「はるきの言う通り、アイン・ソフ・アウルに内緒で世界を渡るのは無理だけど、

彩ちゃんの言うように、もしかしたら人間界には、人魚やケンタウルスがいるかもしれないよ」

「え？ どういうこと？」

「アイン・ソフ・アウルに許可して貰って、堂々と世界を渡ればいいんだから。」

ただし、異種族が混じることを防ぐために、シャオランやキョウラの一族のように、

人間とは一線引いて生きなければならないだろうけど。

だから、アヤやカエデはソレンティアに来て初めて

天狗が本当にいることを知ったように、

人間には知られずに密かに人間界で生きている獣人は他にもいるんじゃないかな」

ラックの言葉に彩の顔がパツと輝いた。

「そうだよね！ いるよね！ きつといるよね！」

「良かったね、彩ちゃん。夢が壊されなくって」

「ていうーか、別に人間界で獣人を見る必要なくねえ？

ソレンティアにいれば、いくらでも見えるじゃん」

「もう！ はるきってば、夢ない！」

さっきまで輝いていた顔が一瞬にしてふくれっ面になり、
それを目撃した私とラックは顔を見合わせて笑った。

16・遅刻

私は羽団扇をパタパタと扇いでいる響羅に向き直って、首を傾げた。

「響羅は、何科なの？」

「総合魔法科だ」

「私と一緒になんだよ」

「そうだ。彩と一緒にだ」

「へえ、いいね。」

総合魔法科って、総合って言うくらいだから、何でも学べるの？」

一度は、いいなあ、と考えた学科なので興味がある。

リンドブルムに勝手に決められてさえないなければ、私だって総合魔法科だったかもしれない。

だが、彩は首を横に振った。

「何でもっていうわけじゃないよ。」

魔法史研究科の授業に混じって召喚魔法を学んだり、

治癒幻惑魔法科の授業に混じって精神回復や精神幻惑を学んだりできるけど、

魔法史研究科の子のようにガッツリ魔法史を学ぶことはできないし、

治癒幻惑魔法科の子たちのように傷を治したりはできないの。

中途半端って感じだよ」

でも、と言って彩はくしゃりと笑顔になった。

「いろんな学科を渡り歩けるわけじゃん？

友達がいっぱいできるところが総合魔法科のいいところ！
ちなみに、戦闘魔法科の授業に混じることもあるんだよ」

「へえ。どの授業？」

「物理防御と変身の授業だ」

扇いでいた団扇をパタリと止めて響羅が口を開いた。

「属性魔法の授業は参加できないから、攻撃魔法は使えないがな」

「響羅も？　なんか天狗って、生まれつき魔法が使えて、

人間に悪戯してそうないメージなんだけど？」

「たとえば、風をおこしたり？」

「そうそう。団扇ひと扇ぎで、突風が…って感じ。

それって攻撃魔法の一種だよな？」

幼い頃に読んだ絵本を思い出しながら口々に言う私と彩に、

響羅は眉を寄せながら羽団扇は差し出した。

「生まれつき魔法を使える天狗はいないが、この羽団扇は我が家の
宝で、^{だから}

風属性の物質系攻撃魔法が掛けられている。

ひと扇ぎでヴィンテの魔法が発動し突風が起き、

ふた扇ぎでヴィンティドの魔法が発動し嵐を起こす」

「すごい！ それ本当！？」

「…と言われているが、魔力のない者にとってはただの団扇だ。

かく言う俺もまだまだ未熟で、使いこなせない」

「残念。見てみたかったのに」

絵本に書かれているような“天狗の団扇”が実在することは分かったが、

絵本通りにそれは誰でも扱えるという品物ではないらしい。

彩ちゃん、と声が響いて、彩と楓は声の方に振り向いた。

「あーちゃん！」

彩より二つ三つ年上の少女がジュースの瓶を片手に歩み寄って来ると、

私のグラスにジュースを注いだ。

「ありがとうございます」

お礼を言つと、少女は彩に振り向いて、自分のことを紹介してくれと頼んだ。

彩は頷いて、私と少女の間に立つ。

「^{さなだあや}眞田彪ちゃん。

私と一緒に、“あやちゃん”って言うの。
ややこしいからネツアク寮の人は、私のことを“アヤちゃん”って呼んで、

こっちの“あやちゃん”のことは“あーちゃん”って呼ぶんだよ。
ちなみに、私たちより二つ年上の18歳」

そこで彩はわずかに声のトーンを下げて、口元に片手をそえた。
まるで内緒話をするかのように。

「あーちゃんはね、こう見えても長いんだよ」

「は？ 長い？ どこが？」

「どこが……じゃなくって、ソレンティア歴が。なんだかんだ言つて、ネツアク寮の人の中では、あーちゃんは古株の方なの」

「そんなに長くいるの？」

「ソレンティアには12歳からの入学が許されているからね」

ひそひそ話が聞こえたのか、^{あや}彪は柔らかに微笑みながら答えた。

「もうかれこれ7年目なの。」

その間にいろんな人を歓迎したし、たくさんの人を見送ったわよ。
ここソレンティアでは魔法の知識を得るだけじゃなくって、
精神面でもすごく成長できるから、がんばってね」

たった二つしか変わらないのに、彪は達観した物言いをする。

何やら人生を悟ってしまったかのような様子だ。

ひらひら片手を振りながら別の人のところに去っていった彪の後ろ姿を、

私は彩と一緒に見送った。

彪の姿が人混みに紛れてしまってから、
彩が、言い忘れたんだけど、と苦笑した。

「あーちゃんも日本出身だよ」

「名前を聞いてそんな気がしてた。姿も明らかに人間だったし」

「わお。楓ちゃんってば、だんだんソレンティア慣れしてきたね」
「これって、慣れてきたって言うの？」

ジト目で見つめてやれば、彩はへらへら笑って誤魔化した。

キーン、とマイクが悲鳴を上げる。

突然過ぎるその叫びに誰もが顔を顰めて、

配膳カウンターの方へと怒りの視線を向けた。

赤毛のノックスペンナリアンがマイクを手に、にしっ、と笑っている。

「ふざけんな、コウ！」

「耳いてえじゃねーか！」

「ネギ食わせんぞ！」

すかさず野次が飛ぶ。

(…でも。なんで、ネギ?)

その答えは、紅巳がネギ嫌いだからなのだが、そんなこと今の私に知る由はない。

「はいはい。やかましーぞ、男ども。

ここいらで寮長挨拶や。寮長、前に出て来てや」

紅巳に言われて姿を現せたのは、褐色肌の少年だった。

彼は男の子たちからの拍手を浴びながら颯爽と歩み出て、紅巳の隣に立つ。

逆立った焦げ茶色の髪。

鋭い眼光。

ガッチリとした体格。

とんがった耳はエルフと同じだが、ダークエルフと呼ばれる種族であることは、

彼が纏う空気から判断がつく。

エルフの持つ静かで美しくも儚い雰囲気はなく、燃えるような気迫を感じる。

寮長の登場に盛り上がる男子たちに対して、

女子たちは奇妙な静まりを見せていた。

互いに顔を見合わせ、自分たちの寮長の姿を探す。

「あれ？ オードリーは？」

…誰か、オードリー知らへん？ 見あたらんけど？」

その時、ずっと一人の少女が前に歩み出てきた。
犬のような耳を生やした物静かそうな少女だ。

「寮長は気分が優れないとのことで、部屋でお休みです」

「え？ おらへんの？」

てか、ずっとおらへんかった？ 最初から？」

ブーイングが起きる。

からかい口調なので本気ではないようだが、男子たちは口々に騒ぎ出した。

「おいおい、コウ。」

新生入生は一人足らねえし、女子寮の寮長もいないっーのは、どう
いうことだよ」

「しっかりしろよ、ペテン師！」

あちゃ、と紅巳は額を抑えた。

だが、それも一瞬。

すぐにマイクを持ち直して、口元に押し当てる。
キン、とマイクが悲鳴を上げた。

「いないもんは仕方がないちゅーねん。
ほな、寮長挨拶やで。ヴィンス、頼むわ」

投げたな、と誰もが分かる寮長への振り方だった。

紅巳はさっさとマイクを自分の脇に立つダークエルフに手渡した。
けれど、その無茶振りはあながち間違いではなかったようで、
ダークエルフはマイクを握り締めると、

俺に任せておけ、とでも言いたげに野太い声で話し出した。

「俺がネツアク男子寮の寮長ヴィンス・レイモンだ！
いいかよーく聞け。」

翠玉の寮、ネツアク寮に所属した諸君に課せられた使命は、
“勝利”だ！

何でもいい。とにかく勝て！

しかし、時には負けることもあるだろう。

けれど、次は必ず勝利しろ。

自分の未熟さを思い知ることも勝利への道だ。

悔しさをバネにして勝利のための努力をしろ。

それが諸君の使命であり、義務だ！」

壊れるのではないかと心配になるくらい、ヴィンスはマイクをき
つく握り締めている。

そもそも、彼にマイクは必要なのだろうか。

怒鳴っているかのように声が大きい。

「諸君、熱い志を持っているかーっ。
何事にも挑むこと、それが……」

その時だった。

バンツ、と食堂の扉がヴィンスの声を止めるほど大きな音を立てて開いた。

現れたのは、リンドブルムだ。

寝起きらしくボサボサの髪をしている。

「腹へったー。カエデ、リンドの飯は^{めし}？」
「リンド!？」

今までどこにいたのか、何をしていたのか、聞きたいことは山ほどあったが、

そんなことよりもこの場が凍りついてしまったかのように静まり返っていることが、私には薄寒かった。

リンドブルムは周りを気にする様子もなく、

私の姿を見付けると、真っ直ぐ歩み寄ってきて、私が持つ皿の中を覗き込んだ。

「美味しそうだな。リンドも食べよう、っと」

てけてけと、テーブルの上の料理に歩み寄り、
指先で薄切り肉を摘み上げると、リンドブルムはペロリとそれを

食べてしまった。

場はまだ凍りついたまま。

ヴィンスもマイクを握り締めたまま啞然とし、固まっている。

（リンド、それじゃあKY《空気読めない》だよっ！）

青ざめて、リンドブルムの腕を掴んだ。

「リンド、謝って」

「ん？」

「遅刻したこと、謝って」

「遅刻？ リンドは何に遅れたんだ？」

「歓迎会よ。リンドや私、ソードのために開いてくれたのに」

「ソード？」

気に留めるところはそこではないのだが、

リンドブルムはソードの名前に反応して、こてん、と首を傾げた。
とにかく、と私は眉をつり上げた。

「今までどこで何をしていたのよ」

「あっちの木の上で昼寝してた。さっき起きたら、真っ暗になって驚いた」

「ずっと寝ていたの？」

あっち、と言うと、寮の入り口の方だ。

私と彩が買い物を済ませて寮に帰ったその時その道で、実は、あれほど探しても見つからなかったリンドブルムが2人の頭上で寝入っていたことになる。

私はぐったりと肩を落とした。

「もう。何しているのよ……」

まあまあ、とラックが私の肩を優しく叩いた。

そして、リンドブルムを覗き込むと、困った子どもを見るような目付きで、優しく諭した。

「いいか、リンド。今、リンドたち新入生の歓迎会の最中なんだ。リンドが主役なんだぞ。それなのに、リンドは遅刻してしまった。その上、寮長の挨拶中に大きな音を立てて入ってきて謝りもせず、まるつきり無視して食事を始めようとした。悪いとは思わないか？」

リンドブルムは眉間に皺を寄せた。

そして、ラックの鼻先に人差し指を立てた。

「まず第一に、リンドは歓迎会をやってくれとは頼んでいない。第二に、歓迎会が行われること、また行われていることをリンドは知らなかった。」

誰もそんなこと言っていなかったからだ。

第三に、リンドはお腹が空いたのと、楓からのメモを読んだから食堂にやって来た。

ただそれだけなのに謝れと言われるのは、腑に落ちない」

うーん、とラックは低く唸った。

そして、コッソ、と軽くリンドブルムの額を叩く。

「一つ目の、頼んでいないのに歓迎会を開いたというのは、リンドにとって喜ぶべきところであって、そんな風に迷惑がって言っことじゃない。

これはリンドが悪い」

「二つ目の、知らなかった、言われていない、っていうのは、オレたちの連絡ミスだからリンドは悪くない」

継いではるきが言い、ラックが叩いた場所を些か乱暴に、だが彼にしては優しく撫でた。

「三つ目ののは、リンドちゃんがKYなだけ。

リンドちゃんにとって納得がいかないかもしれないけど、謝って損はない感じだよ」

“KY”なんて言葉、私と彩くらいにしか通じないはずなのだが、ソレンティアの自動翻訳は素晴らしいらしく、ラックとはるきは怪訝に思うことなく、彩の言葉に大きく頷いた。

リンドブルムは、むう、と低く唸る。

「カエデたちがそこまで言うのなら、リンド謝る」

「うんうん。偉いぞ、リンド」

「頑張って」

彩に背を押されて、リンドブルムは前へと歩み出た。紅巳とヴィンスの隣に立つと、くるりと向きを変え、食堂に集まった顔を見渡し、ぺこりと頭を下げた。

と、その時だ。

「許さないわ。いくら謝っても無駄よ！」

大気を切り裂くように響いた少女の声。皆一斉に声の主を振り返った。

エマ・クロサイトだった。

私は昼間エレベーターホールで擦れ違ったことを思い出しながら、青い瞳と銀髪を持つエルフの少女がリンドブルムの方に歩み進む様子を見守った。

蛍光灯から放たれた光が欠片となって、エマの銀糸のような髪に散っている。

綺麗だ。

だが、その美しさは厳しさと冷たさを併せ持って、
リンドブルムに鋭くぶつけられている。

「謝って済むことではないわ。」

あなたはオードリーを侮辱しただけでは飽きたらず、
ネツアク寮みんなのことを侮辱したのよ。許せるわけないわ！」

びしっ、とエマはリンドブルムに向かって指を突き立てると、
澄んでよく通る声で言い放った。

17・暗闇の森へ

そんなことはない、と口を開いたのはラックだ。

だが、その声は騒ぎ始めたエルフたちによって掻き消されてしま
う。

美しいエルフたちは互いの顔を近付け合って、ひそひそと話し出
す。

やがて、そのひそひそ声は大きく大きくなって、
エマを筆頭にリンドブルムに言葉を投げつける。

「なんであなたみたいな子がネツァク寮なのよ！」

「他の寮に行ってくれたら良かったのに」

「オードリーが可哀想だわ」

「混ざり者なんかバカにされて、待ちぼうけになったんですから
ね」

「嘆きのリンドブルム」

「ただ、と思った。」

『嘆きのリンドブルム』

エルフたちは学食でもリンドブルムのことをそう呼んだ。
その意味はいつたい何なのだろうか。

私は、はっとしてリンドブルムを見た。
足に根が生えてしまったかのように、リンドブルムは立ち尽くしている。

その顔は蒼白だ。

陰口には慣れている様子だったが、
さすがに正面切って言われることには慣れていないらしい。
当然だ。

そんなものに慣れている者なんていない。

また、慣れてしまう必要なんてない。
そんな悲しいものに慣れてしまう必要なんて。

オブラートに包まれることなく突き刺さってくる言葉の刃が、
次々とリンドブルムを襲う。

「認めないわ、あなたがネツアク寮の寮生だってことを！」

「そうよ、認めないわよ！」

「出て行って！」

「そうよ、出て行って！」

「学生課に訴えて、あなたの寮を変更して貰うわ！」

私は拳を握り締めた。
憤りを感じた。

（リンドがいったいあなた達に何をしたって言うのよっ）

確かに、オードリーを待ちぼうけにして、歓迎会に遅刻したけれど、

それが謝っても許されないくらいの大罪だとは思わない。

それに、リンドブルムはまだ幼い子どもではないか。

少なくとも、今この場にいる誰よりも年下だ。

年長者が寄ってたかつて年少者に言い立てる姿は、

なんとも浅ましく、みっともない。

やっていて楽しいものではないだろうし、見ても心が痛む。

私はつかつかと前に進み出ると、

ヴィンスが手にしているマイクを奪い取った。

キーン、とマイクが悲鳴を上げて、皆の視線が一斉に私の方に集まった。

「いい加減にしなさいよっ！」

マイクを口元に押し付けながら怒鳴り声を張り上げると、

誰もが両手で自分の耳を塞ぎ、顔を顰めた。

構わず続ける。

「リンドが何をしたって言うのよ！」

遅刻？ ええ、確かに悪かったわよ。

けど、ごめんで済まされないことじゃないでしょ！

オードリーを待たせたって？

待たされたのはオードリー一人よね？

あなたたちみんな、雁首揃がんどびそろえて寮の門の前でリンドを待っていたって言うの？

待ってたわけじゃないんだから、怒っていいのはオードリーだけじゃないの！」

「…う、うるさいわね。何にも知らない人間は黙ってなさいよ！」

「何にも知らない人間で悪かったわね！」

だけどね、そんな人間だからこそ、

幼い子ども一人相手に寄ってたかって虐めるなんてヒドイことはいないわ！」

「何ですって！？」

私の言葉に反撃し、反撃を返されたのは、エマだ。

言葉を詰まらせて、眼を白黒させている。

一瞬、青ざめた顔がしだいに赤みを帯びてくると、

エマは私に歩み寄り、手にしているマイクを床に叩き落とした。

ゴッソ、と音が響いて、マイクは耳障りな悲鳴を上げた。

「カエデ……」

いつの間にか、リンドブルムがすぐ隣に来ていた。顔を俯かせながら、私の袖を引く。

「もういい。リンドはここを出て行く」

「リンド！」

「リンドが出て行く必要はないだろ？」

「そうだよ。ここネツアク寮はもうリンドちゃんの家なんだから」

ラックと彩、そして、はるきも歩み寄ってきて、
リンドブルムの小さな肩を抱いた。

家ですって？ とエマの細く長い眉が吊り上がった。

「私たちは認めないって言ったはずよ。」

その子がネツアク寮の寮生だということをね」

「そうよ、そうよ。明日の朝一番で学生課に訴えに行くわ」

「ひどい！ リンドちゃんは頭を下げたじゃないの！

これ以上どうしろっていうの？

どうしたら許してくれるの！ ネツアク寮の寮生だって認めてくれるのよ！」

この時エルフたちがすぐに条件を提示したのは、彼女たちがいく
ら学生課に訴えたとしても、

実際にリンドブルムが寮を変更されることはないということを、
彼女たちがちゃんと承知していたからだ。

ソレンティアには4つの学生寮があり、それぞれ異なった特性を
持ち、

それに相応しい学生が選ばれ入寮する。

リンドブルムはネツアク寮こそ相応しいとの判断が下された。

その一度下した事を、ソレンティアはけして覆くつがえさない。

よって、私たちもそのことに気が付いていたのなら、

この時の正しい対応は、挑発には乗らずに“どうぞ訴えてもらん

なさい”と言うことだった。

するとエルフたちは訴えても無駄であることを承知しているので、そろって口を摘むんだはずだったのだが、

残念なことに私たちは心から焦り、まんまと挑発に乗ってしまった。

エマは、そうね、と視線を漂わせ考え込むと、

自分の首もとに右手を触れさせた。

胸に輝く藍色の石。

銀の鎖で首から下げられている。

「これにするわ」

エマは首の後ろに両手を回すと、ネックレスを外した。

きらり、と藍色の石が蛍光灯の光を受けて、澄んだ光を放つ。

「誰か、弓と矢を持ってきて。」

ネツアク寮の寮生らしく勝負で決めましょう」

「勝負？」

エマに言われて弓と矢を取りに行ったエルフが戻ってくると、

エマに右手にネックレスを、左手に矢を持ち、私たちに見えるように高々と掲げた。

「この矢にこのネックレスを括り付けるわ。」

そして、寮の裏手の森に向かって弓を引くから、
ネックレスを持って帰ってきて頂戴。

無事に帰ってこられたらあなたたちの勝ち。

帰って来られなかったり、手ぶらで帰ってきたら私たちの勝ち。
これでどうかしら？」

売られた喧嘩は買う主義だ。

やってやろうじゃないの、と勇ましく受けて立とうとした。

ところが、その時、ラックに腕を引かれて、私はぐっと言葉を呑み込んだ。

「無茶言つな、もう夜なんだぞ。裏手の森は昼間でも危ない。

何が潜んでいるのか分かったもんじゃないからな」

「そうよ。危険だわ！」

「あら、勝負をやめてあげてもいいのよ？」

その場合、当然私たちの不戦勝よね」

「何それ！　あり得ない！」

受けてやるわよ、と今度こそ誰にも妨げられることなく言うてやる
ことができた。

どんなに森が危険だろうと知ったことではない。

ここまで言われて戦わなければ、女が廃る！

私はリンドブルムの枝のような細腕を掴むと、その顔を見下ろした。

「やるわよね？」

疑問系だが、もちろん質問をしたわけではない。
否^{いな}とは言わさぬ確認だ。

リンドブルムはうるんな瞳を向けてきた。

「めんどくさい」

「そう言つて逃げるの？ 負けを認めたことになるのよ」

「それは嫌だ」

「じゃあ、受けて立つのね？」

こくん、とりンドブルムが頷くのを見て、私はエマを振り返った。
エマは、にこりと不敵な笑みを浮かべると、窓に向かって歩き出した。

縦長の大きな窓の向こうは、闇のような森だ。

寮の裏手の森。

寮生たちが魔法の練習をしたり、秘密の実験を試みたりするものだから、

その影響で奇妙な動植物が生み出されてしまっている。

中でも特に気を付けなければならないのは、

過去の学生が学園を去る際に置き去りにした召喚獣だ。
すっかり野生化してしまい、人を襲うのだという。

エマは流れるような仕草で窓を開くと、弓を構えた。

「行くわよ」

シュツ。

闇に向かって矢が射られる。

矢は大きく夜空に向かって円を描き、やがて森に吞まれていった。目で追えたのは矢がエマの手から離れた、その一瞬だけだ。どこへ飛んでいたのか、検討もつかなかった。

けれど、今更やめるとは言えない。

エマをひと睨みすると、窓から寮の外へ出た。サクリ、と足下で草が鳴る。

続いてリンドブルムも外に出てくると、私は食堂の中を振り返った。

心配げな顔をした彩に視線を向け、にっこり微笑んで、大丈夫だよ、と言う。

「すぐ戻ってくるから」

片手を振って、私はリンドブルムと共に森の中へと入っていった。

食堂から離れてしばらくもしないうちに辺りは暗闇に覆われ、
前も後ろも分からなくなってしまった。

いったいどこを歩いているのだろうか。

この森はどのくらい深いのだろう。

本当にちゃんと戻れることができるのだろうか。

野生化した召喚獣と出会う出会わない以前に遭難し、
力尽きて死んでしまうのではないだろうか。

私は拳を胸の前に押し付けた。

先程から心臓がドクドクと、うるさい。

不安に押し潰されそうになりながら、必死に足を前に進める。
後戻りはできない。

ならば、進むしかなかった。

私はすぐ脇を歩いているリンドブルムの顔を見下ろした。

手を伸ばせば届く距離にいるのに、その顔は闇に覆われていて、
よく見えない。

（怖い）

どうしてこんなことになってしまったのだろうか。
今更ながら後悔する気持ちが沸いてきた。

リンドブルムに対して売られた喧嘩だったのだから、
何も自分まで森に入る必要はなかったのではないだろうか。

そもそも、なぜ、
リンドブルムに言われた悪口に対して自分はあるなにも憤りを感じたのだろうか。

リンドブルムと出会って以来、調子を狂わされっぱなしだ。
自分が自分ではないみたいだし、
大きな渦に巻き込まれているような気がしてならない。

（うつん、違う）

リンドブルムが悪いわけではない。
リンドブルムを取り巻く得体の知れない何かが悪いのだ。

『何にも知らない人間は黙ってなさいよ！』

エマの言葉を思い出す。

（何も知らないって…。

だったら、エマはいたいリンドの何を知っているって言うの？

ざわざわと、木々が恐ろしげな音を立てた。

梟の声。

繁みが揺れる度に、今にもそこから獣が飛び出してくるのではないかと、

胸がドキリと大きな音を立てた。

「ねえ、リンド」

「何だ？」

「あなた、エマたちに何かしたの？」

「何も」

「それじゃあ、“嘆きのリンドブルム”って何？」

息を呑む音が小さく響いた。

嘆きのリンドブルム。

その言葉の意味するものこそ、

リンドブルムを取り巻く得体の知れないものの正体であるように思えた。

リンドブルムは一度深く息を吐き出すと、

ぽつりぽつりと、言葉を零すように口を開いた。

「ダークエルフの国アルカウムに“嘆き谷”と呼ばれる谷がある。

風が谷を抜ける時に聞こえる音がまるで女の嘆き声のように聞こえるから、

その名が付いたと言われている。

リンドは響き谷で生まれたんだ」

「響き谷じゃなくて？」

リンドブルムは響き谷の領主の姪だと聞いた。

私がそう尋ねると、リンドブルムは首を横に振った。

「リンドの父上は、嘆き谷の領主ドレイクの子ブルクハルトなんだ。

父上は、嘆き谷と響き谷の友好の証として、

響き谷の領主フリーユゲルの妹イドウベルガを娶った。

そうして、生まれたのがリンドだ」

「…うん」

「リンドの生まれたその日、嘆き谷に何かが起こった。

突然、誰もかも地に伏して、そのまま息絶えてしまったんだ。

生き残ったのはリンドだけ」

「なんで、そんなことが？ いったい何が起きたの？」

「分からない。

嘆き谷の異変に気付いたフリーユゲルが兵を率いて嘆き谷に向かうと、

そこら中、死体だらけだったらしい。

だから、フリーユゲルはリンドだけを連れ帰り、リンドを自分の子のように育てた」

リンドブルムの咽が、ひゅう、と音を立てた。

木々がざわめく。

「響き谷でもよくリンドは“嘆きのリンドブルム”って呼ばれた。きつと“嘆き谷のリンドブルム”っていう意味なんだと思ってた。

けど、いつもそれを言われると、悲しい気持ちになったから、きつとそれを言った者の心にリンドを哀れむ気持ちがあったのだと思う。

嘆き谷の悲劇をリンドに重ねて“嘆きのリンドブルム”って言うているんだ」

だけど、とリンドブルムは暗闇に向かって言葉を続けた。

18・戦闘開始

「ソレンティアに来て、エマたちに言われる“嘆きのリンドブルム”には、

哀れみよりも蔑^{さげす}みを感じる。

可哀想な子って言われるのもつらいけど、

疎^{うと}ましいという気持ち^をを全面に出されると……」

闇がリンドブルムの言葉を奪い去った。

風の声。

嘆き谷を抜けていく風は女の嘆^{なげ}き声のように聞こえると

リンドブルムは言っていたが、この森を抜けていく風はまるで、森に入ってきた者の陰口を言っているかのように聞こえる。

ひどく不安になった。

「リンドは何も悪くないじゃない」

“嘆きのリンドブルム”という言葉に何か深い謎が含まれていて、それが分かれば何もかも解決できると思っていた。

だが、それは見当違いだった。

リンドは何も悪くない。

むしろ、両親を始めとする嘆き谷の一族すべてを亡くしてしまった可哀想な子だ。

（可哀想な子）

ぼつん、と胸に浮かんだ言葉にハツとして、私は頭を左右に振った。

（たった今、リンドが言っただけじゃないの。
“可哀想な子”って言われるのはつらいって）

もったもなことだと思う。

きっとリンドブルムは、響き谷の家族から精一杯の愛情を注がれ育てられたのだろう。

それは従兄たちであるイデアブルーとハルシオンの様子からも分かる。

彼らのリンドブルムの可愛がりようは、私の目には些か度を超しているように見えた。

愛されて育ったリンドブルムが、自分は不幸だ、と感じることはなかったのではないかと思う。

それなのに周りから“お前は不幸だ。

お前は可哀想なのだ”と言われれば、胸が苦しくなるのも当然だ。

本当に不幸であるような気さえしてくるだろう。

梟ふくろうが枝から飛び上がり、バサリと大きな音を立てた。
思わず、悲鳴を上げて飛び上がった。

「カエデ？」

どうしたんだ、とリンドブルムは私の袖を引いた。

「震えてる。……怖いのか？」

自分よりもずっと年下なリンドブルム。
本当なら年上の自分がしっかりと守ってやるべきなのに、
逆に弱さを見せてしまうようで躊躇ためらわれたが、
意地を張っていても仕方がない、私は言葉なく頷いた。

くすり、とリンドブルムが笑った。

「暗いから怖いのか？」

「今にも何かが飛び出して来そうじゃない」

「何が飛び出して来るんだ？」

「熊とか……」

山じゃないんだから、と自らツツコミを入れた。

野生化した召喚獣が、と言い直すとリンドブルムは少し考えて、それじゃあ、と言った。

「向こうに避けて貰おう。」

きつとその召喚獣も人と関わり合いになりたくないから、森の中に隠れているんだよ。そのまま隠れて出て来ないで貰おう」

「どうやって?」

「こうだ」

言って、リンドブルムは小さな口を大きく開けて、唐突に歌を唄いだした。

それは陽気な歌。

暗闇の中を歩いているということを忘れてしまいそうになるくらいに明るく、

聞いていると自然にリズムを追って体が動いてしまいそうになるくらいに元気だ。

「リンドも小さい頃、暗闇が怖かった。よく泣いていたんだ。

リンドが泣いていると、ブルーとハルがやって来て、歌を唄ってくれた。

響き谷の者はよく歌を唄うんだ。楽しい時も悲しい時も。

だから、慰める時も励ます時も歌を唄う」

もう一曲、リンドブルムは陽気に歌い出し、ほら、と頭上を指差した。

木々の隙間から覗いた夜空に、銀色の小さな雫。

キラキラと瞬いている。

「暗いけど、よく見ると、真っ暗じゃない」

「星、きれいだね」

「木が無ければ月も見える。」

ハルが言ってた。月はリンドがどこに行っても、どこまでもどこまでもついてきてリンドのことを見守る、って」

それから、とリンドブルムは耳の横に両手をそえ、耳を澄ませる仕草をした。

「暗くて姿は見えなくても、きっとたくさんの生き物が側にいる。一人じゃない」

虫の声が響いてきて、リンドブルムは彼らの小さな伴奏に合わせてるように再び唄いだした。

とその時。

私とリンドブルムは名前を呼ばれて振り返った。

野球ボールほどの白い光がゆらゆらと揺れている。

それはしだいに大きくなり、2人の名前を呼ぶ声も近付いてきた。

「楓ちゃん、リンドちゃん!」

「…彩ちゃん?」

白い光がバスケットボールくらいの大きさになると、その光に照らされて闇の中に彩の顔が浮かび上がて見えてきた。その後ろにラックとはるきの姿もある。

「どうしたの？」

「どうしたのじゃないよ。追いついてきたの。」

「やっぱりどう考えても危険だもん」

「2人はまだ何一つ魔法を使えないじゃないか。」

野生化した召喚獣に襲われたらどうするつもりだよ」

「それは…」

口籠もると、それ見たことかと、はるきが鼻で笑う。

「仕方がねえから、オレたちもついて行ってやるよ」

「ついて行ってあげる！」

はるきに続いて彩も言うのと、持っていたカンテラを目の高さに掲げてみせた。

暗闇に包まれていた辺りがパアツと明るくなった。

けれど、それはカンテラの明かりだけのためではない。

追いついてくれた彩たちのおかげで、胸に灯が宿ったからだ。

「ありがとう」

にっこり微笑んで礼を言うと、
ラックとはるきが同時に私の肩をバシッと叩いた。

「友達なんだから当然だ。

危ないっていう場所に2人だけで行かせるわけねえだろ」

「お前たち、灯りも持たずに行つただろ？ 無謀すぎるぞ」

「えへへ」

言われてみればその通りだ。

手探りで進むには夜の森は無謀すぎる。

照れたように笑い、私は彩の隣に並んだ。

はるきがやって来た道を振り返り、真っ直ぐと腕を伸ばした。

「食堂から真っ直ぐ矢が飛んだとして……。

エマが弓の名手だとしても腕力を考えると、

そう遠くまで飛んでいってはいないはずだから、この近くにある
はずだ」

「風は？ 上空は風が強そうだよ？」

彩に言われてはるきはペロリと指先を舐め、風向きを確かめる。

「矢が風に流されたとしたら、こっちだ」

わずかに指の先を移動させると、先頭に立つてはるきは歩き出した。

その後をカンテラを持った彩が続ぎ、私、リンドブルム、ラックと続いた。

ざわめき。

闇に潜んでいた鳥たちが一斉に飛び立った。

ぞつと身が竦むような雄叫びが響く。

私たちは歩みを止めて、辺りを注意深く見渡した。

「……な、に？」

それは獣の声。

地面を揺るがすような恐ろしげな声だ。

ハッとして後ろを振り返った。

最初に聞こえた声は正面からだったが、次に聞こえた声は背後からだった。

「気を付けろ、何がいるぞ」

ラックが拳を構えた時だった。

どどどどど。

地響きが鳴る。

何かが猛スピードで押し寄せて来た！

「出たーっ！」

熊だ。

繁みから、木々の後ろから、闇の奥から、飛び出してきた獣は数頭の熊だった。

いや、この生き物は本当に熊と呼べるのだろうか。

その毛並みは、焦げ茶色をベースに、赤や白、橙のぶち模様が入っている。

何と言うか、色違いのパンダという感じがた。

「ぶち熊だ！」

「何それ！？」

見たまんまのネーミングじゃないか、

という次に続く言葉は最後の熊が飛び出してきたのを目撃して、そのショックから呑み込んでしまった。

その数は5頭で、私たちと同数である。

私たちを取り囲んで、のっそのっそと体を左右に揺らしている。

大きさは私とさほど変わらない。

リンドブルムよりは大きくて、ラックよりは小柄だ。

「戦うの？」

「こつちが戦いたくないつつても、あちらさんはやる気まんまんじやねえか」

えーん、と彩はカンテラをカタカタと揺らした。

すると、ラックが対峙した熊を睨みながら、彩に向かって声を掛ける。

「アヤに戦えなんて言わないよ。後ろに下がってる。ここは俺とハルキで……」

「リンドもやる！」

「え」

他に4人もいたのに、誰もリンドブルムを止めることができなかった。

パツ、飛び出すと、リンドブルムは一番近くにいた熊に飛び掛かった。

小さくも力強い拳を受けた熊は後ろに吹っ飛んだ。

どおーん、と大きな音が闇に響く。

「リンドー！」

驚いたのは人も熊も同じ。

だが、熊たちは仲間がやられた怒りに眼を鋭く光らせ、唸り声を上げた。

そして、怒り狂いながら一斉にリンドブルムに向かっていった。

ラックの指先が空を滑り、素早く魔法式を描いた。

「ビリアル！」

呪文を唱えながら、粉のような物をリンドブルムに向かって吹き飛ばす。

続いてはるきも地面にしゃがみ込み、指先で魔法式を綴る。

「スクタム！」

一瞬、眩い光が私たちを包んだ。

「今のは？」

「一定時間、攻撃力と防御力を上げる魔法だよ」

再び地面が揺らいだ。

視線を向けると、リンドブルムに蹴り飛ばされた熊が一頭ひっくり返っていた。

「ハルキ、行くぞ」
「ああ」

はるきは頷いて、愛用武器のトンファーを構えた。
トンファーというのは、45センチほどの棒で、
2つ1組で左右の手にそれぞれ持ち扱う武器だ。
棒の端の方に握って持てる短い棒が垂直に取り付けられており、
はるきはその部分を握り、自分の腕から肘を覆うようにして構えている。

この状態から空手の要領で攻撃したり防御したりすることもできるが、
手首を返し棒を反転させ、棍棒のように扱い戦うことも、鎌術の要領で戦うこともできる。

一方、ラックはリンドブルムのように素手で熊に立ち向かうらしい。

2人はリンドブルムを助けに、地面を蹴って駆け出した。

ラックの指先が空を滑る。

魔法式を描き終えると、キラキラと輝く粉を自らに振り掛けた。

「セトラ！」

次の瞬間、ラックの姿が消えた。
いや、違う。

消えたように見えたほど素早く移動したのだ。

熊が地響きを立てて地に伏した。

「リンド、こっちは任せろ」

「ラック、ハルキ」

「前を見る、前を！」

2人を振り返ったリンドブルムに熊の鋭い爪が迫った。

「ルメンナール！」

彩の声が響き、辺りに白く眩い光が放たれた。

光の直撃を受けた熊は小さく悲鳴を上げて、よろよろと後退した。その隙について、はるきがトンファーを棍棒のように扱い熊の体を殴り飛ばした。

「ナイス、アヤ！」

「これくらいしかできないけどね」

「今のは何？」

「本当は戦いに使う魔法じゃなくて、ランプとかに明かりを灯す魔法なの」

「へえ。彩ちゃん、すごいね」

「楓ちゃんもこれからいろんな魔法を習って、使えるようになるんだよ」

そうか、と私は胸の前を押さえた。
魔法なんてずっと実感が持てなかった。
けれど、今、次から次にと楓の目前で魔法が繰り広げられている。

（これが魔法なんだ……）

最後の熊がはるきによって倒されると、リンドブルムはペタリと
その場に座り込んだ。
小さな肩を震わせて、呼吸を荒くしている。

「大丈夫か？」

ラックの問いに無言で頷く。
疲れ果てているという感じだ。
それははるきも同じらしく、額の汗を袖で拭いながら、
重い足取りで楓と彩が待つ場所まで戻ってきた。

「どうやら、ぶち熊の巣に入り込んだじまったらしいな」

「熊って、群れて巣を作る生き物だっけ？」

「楓ちゃん、忘れちゃダメだよ。ここはソレンティアだもん」

「そっか」

「それに、ただの熊じゃねえ。ぶち熊だ」

「そうだったっけね」

もはや、何でも来い、という感じだ。

とにかく難は去ったのだから、どうでもいい。
そう思った時だった。

地に伏した熊がピクリピクリと動き出した。

「何？」

熊たちはドロリと、まるでスライムのように溶け、
氷の上を滑るように草地の上を移動すると、大きな一塊になった。
ぶよぶよと蠢くそれは次第に巨大な熊の姿を取った。

「嘘だろ……」

「ぶち熊って、合体するっけ？」

「いや、しないだろう」

「……ってことは？」

「ぶち熊じゃねえーっ！」

ぐわああーっ、と熊が大口を開けて雄叫びを上げた。

ざわざわと木々が揺れる。

熊は血走った赤い眼をギョロギョロさせて、

私、彩、はるき、ラックと順繰りに見渡すと、リンドブルムを見
下ろした。

「リンド、逃げて！」

どうやら熊は、一番近くにいたリンドブルムに狙いを定めたらしい。

猛スピードでリンドブルムに向かって突進していく。

私と彩は悲鳴を上げた。

けれど、リンドブルムは動かない。

いや、疲れ切っていて動けないのだ。

19・ネックレスの行方

振り上げられた熊の太い腕。

ドン！ 半円を描くように振り下ろされ、小さな体が勢いよく吹っ飛んだ。

「うわっ」

「リンドー！」

ガツン、と太い幹にぶつかって、リンドブルムは地面に転がる。痛みを感じているのはリンドブルムのはずなのに、私は目頭が熱くなった。

幼い体を追って、熊は跳ねるように駆けた。

そして、再び振り上げられた太い腕。

キラリと輝いたのは、その分厚い手の先についた鋭い爪だった。

やめて、と叫んだ。

だけど、無情にも熊の爪は光の線を描いた。

誰もが瞼を閉ざして覚悟を決めた。

リンドブルム自身もギュッと目をつぶって、体を硬くする。

だが、その顔に濃い影が落ちた時、最後の足掻きとばかりにリンドブルムは叫んだ。

「助けて、ブルー！」

「ヴィンクタスペンナ！」

「ペティエ・エト・グリフォン！」

眩い光の帯が巨大熊に向かって伸び、瞬時にその体を縛めた。
そして、どこからともなく羽音が響いて来、熊の頭上に大きな影が落ちた。

鳥のような獣のような甲高い鳴き声。
鋭い爪が熊の幅広い背を切り裂いた。

ぐわあああ。

熊が叫く。

そして、たたらを踏んでリンドブルムから離れた。
どおん、とその巨体は顔面から地面に倒れた。

そして、呆氣に取られた私たちの前に降り立ったのは、
獅子の体に鷲の翼を持った獣だった。

「ブルー！ ハル！」

まるで生まれたての子鹿のように、リンドブルムはよろけながら立ち上がると、

木々の中から従兄たちの姿を見つけ出し、駆け寄った。

彼らは幼い子を愛おしげに抱き締めると、
私たちの方へゆっくりと歩み寄ってきた。

「危なかったな」

「大丈夫ですか？ 皆さん、お怪我はありませんか？」

「リンド、肩が痛い」

彩がカンテラをリンドブルムの肩に近付けると、
おそらく幹に打ち付けられた時だろう、その小さな肩に矢のよう
な枝が突き刺さっていた。

「きゃあ。リンドちゃん！」

痛い、と彩が泣きそうな顔になった。
すぐに引き抜こうとしたイデアブルーをハルシオンが制する。

「抜けば、大量に出血してしまう」

「このままにしろって言うのか？ 可哀想じゃないか」

「それでも回復魔法が使える者のもとへ行くまで、この枝は抜けない」

ああ、と深く息を吐いて、イデアブルーはリンドブルムを抱き締めた。

痛い、と身を擦って、リンドブルムは細めた眼を従兄の肩越しに巨大熊の方へと向けた。

光の帯に動きを封じられ地面に伏している熊。

彩がカンテラを近付けると、その毛並みは様々な色がマーブル模様をつくっていた。

「彩ちゃん、この光は何？」

「緊縛の呪文だよ」

「じゃあ、あれは？」

私が指差したのは、巨大熊を足蹴にしている生き物だ。

彩はカンテラの上へ持ち上げて、その翼を生やした獅子の姿に光をあてた。

「グリフォンだわ。私も初めて見る！」

すごい、と彩が黄色い声を出すと、グリフォンが不快そうに顔を背けた。

ぐるる、と低く唸る。

ハルシオンが柔らかに微笑みながら歩み寄ってきて、
グリフォンの首を宥めるように撫でた。

「貴方のおかげで大切なイトコを救うことができました。
ありがとうございます。どうぞ、今日はお帰り下さい」

言うと、ハルシオンはグリフォンに向かって深々と頭を下げた。
ギィ、と短く鳴いて、グリフォンは翼を羽ばたかせる。
ハルシオンが地面に描いた魔法陣がきらりと輝き、
その光に呼ばれたかのようにグリフォンは魔法陣に向かって駆け
る。

グリフォンが魔法陣に飛び込み、
すっかりその大きな体が魔法陣に呑み込まれてしまうと、
ハルシオンは私たちに振り返って、ニコリと微笑んだ。

「彼はとても誇り高いのです。
他愛のないことで呼び付けるなど、叱られてしまいました」
「他愛もないこと、って……」

自分たちは窮地に陥っていたのだ。
特にリンドブルムはあともう少しで巨大熊の鋭い爪で切り裂かれ
るところだった。

それを他愛もないって……。
ちょっぴりやるせない。

そう言えば、とリンドブルムが怪訝な瞳を従兄たちに向けた。

「ところで……。なんで、ここに、ブルーとハルがいるんだ？」

もつともである。

イデアブルーはティファレト寮の寮生であるし、ハルシオンはケセド寮の寮生だ。

なぜネツァク寮の森にいるのだろうか。

しかも、リンドブルムの助けに応じて姿を現した。

映画や漫画ではあるまいし、そんな都合良く現れることができるものだろうか。

そう尋ねると、彼らは顔を見合わせて苦笑した。

「ネツァク寮で新歓をやるって聞いてさ。

新入生の歓迎会ってことは、リンドが主役ってことだろ？

リンドの雄姿を見たかったのと、

リンドがこれからお世話になるネツァク寮の人たちに、ここは保護者として、

挨拶をしておかなきゃと思ったんだ」

イデアブルーの言葉にリンドブルムの顔が、
いかにも“うんざり”というように歪む。

これは私の想像だが、

おそらくイデアブルーは響き谷にいた頃からリンドブルムに対してこんな感じだったのだろう。

リンドブルムに友人ができる度に

“うちの可愛い子をよろしく頼むな”と言って、挨拶をして回ったに違いない。

人間界の友達の中にもそういう過保護な母親がいて、

その母親から両手を握られ、“うちの子と仲良くして頂戴ね。

くれぐれもよろしくお願いね”なんてことを言われた覚えがあるが、

正直、どん引きだった。

“仲良く”だなんて、誰かに頼まれなくなつて“なる”時はなし、

“なれない”時はどうしようもない。

本人から言われるのならともかく

保護者から“くれぐれも”とお願いされることではないように思う。

その点では、イデアブルーよりはハルシオンの方が自制が利くらしく、

彼は柔らかに微笑みながら、僕はね、と口を開いた。

「ブルーが行き過ぎたことをしたら止めようと思って、一緒にネツアク寮に来たんだ。

でも、私たちがネツアク寮に着くと、君の姿はなかった。

どうしたのかと人に聞くと、ネックレスを探しに森に入った、っ

て。

血の気が引いたよ」

「それで、大慌てで追い掛けてきたってわけだ」

あ、とリンドブルムが短く声を上げた。

「エマのネックレスを探さないと！」

自分から体を離し、歩こうとした幼い体を
イデアブルーは抑え付け、抱き直した。

「リンド、ネックレスならあそこだ」

「え？ どこ？」

イデアブルーが指差した場所を

彩がカンテラを近付けると、巨大熊の尻に矢が突き刺さっていた。

エマが射た矢である。

「あった。リンド、矢があったぞ！」

「エマのネックレスもちゃんと付いている」

はるきとラックが矢に手を伸ばそうとする。

だが、その度に熊が低い唸り声を上げて、なかなか近付くことができない。

どうしたものか、と頭を悩ませていると、ハルシオンが綺麗な笑みを零した。

「大丈夫ですよ。その熊は、姿こそ熊ですが、熊ではありません。真実の姿はまるで違う姿なのです」

「真実の姿？」

「はい。その熊の正体は、エレファントキノコです」

ハルシオンが涼しげな表情で言い放った言葉に、ラックたちはなるほど頷いた。

彼らの目には、たちまち熊の姿が揺らぎ、キノコの姿に変わったのだと言う。

だが、私は一人、耳を疑った。

（はい？　なんだって？）

キノコと聞こえたようだ。

しかも、エレファント。

もしそれが英語であるのなら、日本語訳して“象”ということになる。

（ゾウキノコ？　……なんだ、それは！？）

だけど、冷静になってみよう。

ここソレンティアでは自動翻訳してくれる。

…ということは、エレファントは英語ではなく、

それ以上訳しようのない“エレファント”という言葉なのだろう。

あのう、と言って、私はハルシオンに尋ねた。

「それはどういうキノコなんですか？

というか、本当にキノコなんですか？ とてもキノコに見えませ
ん」

（熊だ。熊にしか見えない）

すると、答えたのは、はるきだった。

「エレファントキノコは、過去の学生が研究の末に生み出したキノ
コだ。

幻覚を見せる胞子を撒き散らす」

「幻覚？」

「そう。ですから、この熊の姿は胞子によって見せられている幻覚
なのです。

おそらく、皆さんの中で、熊が出てきそうだと考えた方がいた
のではないですか？

その考えを読み取ったエレファントキノコが皆さんに熊の幻覚を
見せたのです」

ぎくりとして私は顔を引きつらせた。
今にも繁みから熊が飛び出しそうだと思ってしまったのは、
他の誰でもない、私だ。

「胞子の届かない距離にいた時、俺たちにはお前たちが、
何にもないところでバタバタ暴れているように見えたぞ」

イデアブルーが言うと、ハルシオンも頷いて続ける。

「私たちの目には、エレファントキノコそのものの姿が見え、
その柄に矢が刺さっている様子が見えていました。
それなのに、皆さんが魔法を発動させ、何もない場所に向かって
戦っていらして……」

「下手に近付けば俺たちも幻覚にやられると思って様子を見ていた
ら、

「リンドにこんな怪我を負わせてしまった。ごめんな、リンド！」

ぎゅっとリンドブルムの体を抱き締めるイデアブルー。
すかさず、その腕の中で苦しげな声が上がった。

恐る恐るといったように、彩は熊に近付いた。
そして、驚いた表情で私に振り返る。

「本当だ。これ、熊じゃなくて、エレファントキノコだよ。

楓ちゃんも熊のイメージを頭から追い出して、ちゃんと見てみなよ」

「う、うん」

曖昧に頷き、私は彩がカンテラを向けた方をじっと見つめた。
それは小さなゾウだった。

いや、ゾウとはほど遠いヒョロリとしたピンク色の体。

片手で握れるほどのサイズで、足は根になっており、

地面からお尻、腹、長い鼻のついた顔、そして、大きな傘を開かせた頭が生えている。

「キモイ……」

「ええつ。可愛いよ」

「いや、キモイ！」

頑として譲らず、キモイと言い張ると、

彩は、むう、と低く唸った。

「可愛いと思うんだけどなあ」

彩はエレファントキノコの前にしゃがみ込むと、
ゾウのお尻に突き刺さった矢に手を伸ばした。

「ごめんね。痛かったよね」

優しく声を掛けて、一思いに引き抜いた。
ピー、と小鳥のような悲鳴を上げて、ゾウが身を振った。

（キモイ…）

ごめん、ごめん、と彩は謝りながら、ゾウの尻を指先で撫でてや
っている。

ゾウ…ではなく、本質はキノコなので、
傷ついた場所は穴があいているだけで、血が流れ出すことはない。
やがて自然治癒していくことだろう。

彩は手にした矢からエマのネックレスを取り外すと、
リンドブルムの顔の前で広げた。

「リンドちゃん、あったよ。ほら！」
「うん」

リンドブルムはネックレスを受け取ると、
それを物珍しげに眺め、眉を寄せた。
カンテラの光りを受けて、ネックレスについた藍色の石がキラリ
と輝いた。

「…リンド、エマに何か悪いことしたのかな？」

呟くような小さな問いだった。

従兄たちは、はっと息を呑んだ。

風が吹き抜けて、ざわり、と木々が陰口を叩く。

ハルシオンは膝を着いて、

リンドブルムと視線を同じくすると、静かに口を開いた。

「君に話しておきたいことがあるんだ」

「何？」

「君が生まれた日、嘆き谷に悲劇が起きた。

父上はすぐに兵を率いて嘆き谷に向かい、その惨状を目の当たりにした。

見渡す限りの死体の山だったと、父上は戻ってこられて後、そう私たちにおっしゃった」

何が起きたのか、誰にも分からない。

突然、嘆き谷で暮らしていたダークエルフたちは地に伏し、息絶えたのだという。

死体の中、ただ一人命を保っていたのは、生まれて間もないリンドブルムだけ。

イデアブルーとハルシオンの父であり、

響き谷の領主であるフリーゲルは、妹の死を悲しみながら、
リンドブルムを響き谷に連れ帰ったのだという。

ハルシオンの話を引き継いで、イデアブルーが静かに口を開き、
己の左肩に額を押し当てている幼子に語り聞かせた。

20・嘆き谷の悲劇

「父上が響き谷に戻った翌日、追って戻ってきた兵の一人がこう報告した」

『遺体が無くなりました！』

「嘆き谷には、死者を弔うために数人の兵士が残されていた。その晩、彼らは見張りを立てながら交代で眠りについたそうだが、翌朝。日が昇り明るくなつた谷のどこを探しても、あれほどたくさん転がっていた死体の一つもなくなっていた。もちろん、悲劇が夢だつたわけじゃない。死体は確かにあつたんだ。」

そして、響き谷の兵士たちの気が付かぬ間に消え失せてしまった」

そんなバカな、と側で聞いていたはるきが眉間に皺を寄せる。

「見張りの兵士はどうしたんですか？

寝ずに辺りを警戒していたのでしょうか？」

「おい、ハルキ」

「だって、死体が勝手に消えるなんてことあるわけがないだろ。誰かが運び出したに違いないんだ。けど、一人で運び出せるわけがない。」

軍を率いて運び出した者がいるはずだ。

それを気が付かないなんて、よほど響き谷の兵士は抜けている
しか思えない！」

一度は制したラックだったが、はるきの言い分も確かだと思った
ようで、

掴んでいたはるきの腕を放し、イデアブルーとハルシオンに向き
直った。

確かに、とハルシオンが口を開く。

「何者かが軍を率いて死体を運んでいったのでしたら、
いくら間抜けな兵士でも気付いたことでしょう。

けれど、その何者かは軍を率いて運んでいったのではないのです」

「じゃあ、どうやって死体を運んだんですか？

死体は山のようにあったのでしょうか？」

「魔法だ」

短くイデアブルーは言い放った。

そして、リンドブルムを抱く腕に力を込めた。

「…魔法だと、俺たちは考えている。

そうでなければ、多くの死体を一晩で運ぶなど不可能だ。
そして、俺たちはこうとも考えている。

死体を盗んでいった奴と嘆き谷の悲劇を起こした奴は

同一人物なんじゃないか、ってな」

「ええ、そうです。

一瞬にして嘆き谷の人たちは息絶えました。

何か強力な魔法を掛けられたのだと考えるのが妥当なのです」

しん、と静まり返った辺りに、

草の上を渡る虫の足音が小さく響いた。風が囁く。

『いったい誰の仕業だろうか。
いったい何が目的だろうか』

やがて風は木々を揺らして駆け抜けていった。

「それから間もなく経って、一つの知らせが響き谷にもたらされました。

“吹雪の原”がオーク《魔物》の群れに襲われたというのです。そのオークたちはゴブリン《醜く邪悪な小人》を大きくしたかのように、

人に近い姿をし、剣や斧、弓を扱うことができたそうです」
「それからすぐ“桜梅の泉”と“虹の麓”が次々とオークに襲われた。

人に近い姿をしていたことから、
吹雪の原を襲ったオークと同じだろうということになった」

オーク《魔物》と一言で言っても、その容姿は様々で、
また知能の有無もピンキリらしい。

そして、そのオークたちは、群れをなしていたこと、
武器が使えたということから、かなり高い知能を持っていたとい

うことになる。

「そんな賢いオークなら一匹だって警戒するだろうに、群れをなすまでその存在に気が付かなかったんですか？」

エルフは抜けていると言いたげにはるきが言うと、ハルシオンは首を横に振った。

「危険だと思われるオークは、その住み処を常に見張られ、近隣の郷に動向を報告されます。」

そのオークの群れはある日突然現れたのです」

「そんなわけが……」

あるんだ、とイデアブルーがはるきの言葉を遮った。聞け、と片手を振る。

「オークの顔を間近で見た虹の麓の者が言うには、

そのオークはダークエルフではないかと」

「1000年ほど昔、アルヘイムとアルカウムの間で戦争が起こりました。」

その際、アルヘイムが捕虜にしたダークエルフに

禁じられた魔法を掛けたという記述が残っています」

「禁じられた魔法？」

「オークに変身させてしまう魔法です。」

エルフたちはダークエルフをオーク化させ、

オーク兵士としてアルカウムを攻めさせたのです」

ひどい、と彩が自分の口を塞ぐ。

だが、こんなひどい話をハルシオンが話した真意は、彩を震えさせるためではない。

相手をオーク化させてしまう魔法が存在するということだ。

つまり、とはるきが口を開いた。

「吹雪の原や虹の麓を襲ったオークたちも、

何者かの魔法によってオーク化された何かだってわけだな？」

「何か……って？」

まさか、という言葉呑み込んで、一同は一斉にリンドブルムに振り返った。

ハルシオンの静かな言葉は続く。

「オークたちは次々にエルフの郷を襲い、

エルフたちを恐怖に陥れました。

しかし、ついに“眠り森”を襲った時、

その領主によって殲滅させられました」

「眠り森の者たちは、古くからアルヘイム王家に仕えている尊い血統の者たちだ。

さすがだな、オークの侵略を許さなかったんだ」

「そして、眠り森の領主は退治したオークたちを調べ、その中に嘆き谷のブルクハルトを見つけ出しました」

「ブルクハルト……？」

「君のお父上だよ、リンド」

リンドブルムは息を詰めて従兄たちの顔を見上げた。

やはりそうだったのだ、と私たちはそんなリンドブルムを無言で見守る。

エルフたちの郷を襲ったオークたちは、オーク化した嘆き谷のダークエルフたちだったのだ。

リンドブルムは愕然とし、震える声を上げた。

「なんで、そんな……」

「分からない！ 分からないんだ、リンド」

「それを調べに私たちは今ソレンティアにいる。

何かとんでもないことが妖精界に起きている。それは間違いないんだ。

そして、それらはすべて力を持った魔法使いがやったことなんだと思う」

「力はあるが、その力を正しく使っていない魔法使いだ。

魔法というのは、ソレンティアでしか学ぶことができない。

また、元の世界で魔法を使うためには、ソレンティアを正しく卒業しなければならぬ」

だから、もし本当に彼らが言うような魔法使いがいるのだとしたら、

その魔法使いはソレンティアの卒業生だということになる。

「…そいつは、リンドの親の仇だ」
かたき

ぼつりと、リンドブルムは零した。

「そんな奴が本当にいて、
リンドの父上の死体を辱めたのだとしたら、リンドは絶対に許さない！」

ああ、と息を漏らしてイデアブルーはリンドブルムを抱き締めた。
そして、悲しげに言う。

「リンド、お前に分かって貰いたかったことは、
お前に仇がいるということじゃないんだ。
嘆き谷の者たちをオークにした奴がすべて悪い。
それは確かだ。

だが、その一方で、オークとなつた嘆き谷の者たちに
郷を襲われたエルフが大勢いるということ。

それも拭い消えようのない事実だということを、お前に知って貰
いたい」

「きっとエマも、オークに襲われたいくつかの郷の一つから
ソレンティアにやって来たんじゃないのかな。

ううん。エマだけじゃないよ、リンド。

オーク化した響き谷の者たちに襲われたエルフは大勢いるんだ」

エルフたちがリンドブルムを疎ましく思うのも当然だ。それがリンドブルムのせいではないと分かっている、自分の郷が襲われ、親しい人たちが傷つけば、嘆き谷の生き残りであるリンドブルムを恨みたくなる。

そっか、とリンドブルムは額をイデアブルーの肩に押し付けて呟いた。

「エマたちがリンドを嫌うのも当然だ。

リンドが仇に思う者がいるように、エマたちも誰かを恨みたいんだ。

リンドの父上がみんなを傷付けたのなら、リンドがその罪を負うのも当然だな」

「リンド！」

私は憤りを感じて、リンドブルムの前に仁王立ちになった。

リンドブルムの声があまりにも悲しげで、あまりにも切なく、そして、あまりにも投げやりだったから、言わずにはいられなかった。

私は拳を握って、リンドブルムに向かって叫いた。

「何よそれ！ 罪って何よ。

リンドは何も悪いことしていないじゃないの！

ずっと2人の話を聞いてきたけれど、

いったいいつリンドが悪いことをしたっていう話が出てきたの？ 出て来なかったじゃないの！

だいたい、親の罪を子どもが負うっていう思考、古くさいわよ」

「古いとか、そういう問題じゃ……」

「うるさい！　そういう問題なの！」

第一、リンドのお父さん、ちつとも悪くないじゃない。

オーク化だか何だか知らないけど、変な魔法に掛けられて操られちゃったわけでしょ？

エルフたちを襲ったのは、リンドのお父さんの意思じゃないじゃない。

悪いのはすべてそんな魔法を掛けた魔法使いでしょ！」

言いまくと、すっきりして気持ちが落ち着いた。

私はずっと人差し指を立てて、リンドブルムの鼻先に突き付けた。

「今、リンドが考えていることを言い当ててあげようか？

エルフたちがリンドを嫌うのは当然だから、

リンドはネツアク寮を出て行こう。……違う？」

「うっ」

「だめよ。ネツクレスは見つかったんだから、

リンドはネツアク寮に残るのよ。

エマにネツクレスを返して言っただけでやらなくっちゃ。

リンドは悪くない、って。

ちゃんと話せば分かってくれるはずよ」

私も一緒に話すから、と言うと、

リンドブルムは困ったように視線を漂わせた。

彩がリンドブルムに向かって微笑む。

ラックも、はるきも、リンドに向かって笑みを浮かべる。

こくりと、リンドブルムは頷いた。

「帰るよ。そして、エマにこのネックレスを返すんだ」

そうと決まれば長居は無用。

リンドブルムの肩の怪我も早く治療しなければならない。
一同はネツアク寮に戻ることにした。

リンドブルムの小さな体をイデアブルーが背負うと、
リンドブルムの口から呻き声が漏らされた。

「痛いのか？」

心配になって顔を覗き込めば、無言で頷かれる。

私はリンドブルムの背をさすった。

辺りが暗くて良かったと思う。

とてもじゃないが、枝が肉を貫いている部分を直視することはできない。
想像しただけで、ゾツとした。

「リンド、意識があると痛いから、眠ってしまつといいよ」
「無茶だよ。寝られるものなら、寝るけどさ」

リンドブルムは銀髪の従兄の言葉に眉を寄せた。

痛みで寝ていられないと言うのだ。

大丈夫だよ、と言って微笑むと、ハルシオンは懷から小瓶を取り出した。

小瓶の中には液体が入っており、それを少し指先に垂らして、

リンドブルムの額に触れた。

塗れた指が魔法式を描く。

「お休み、リンド。……シエスタ！」

こてん、とリンドブルムの頭が力なくイデアブルーの首もとに沈んだ。

しばらくして、すうーすうーと規則正しい寝息が聞こえてくる。

「寝ちゃったの？」

リンドブルムの顔の前で手のひらをヒラヒラさせてみる。
反応がない。

「本当に寝ちゃったんだ」

私はその寝顔の穏やかさにホッと胸を撫で下ろした。

カンテラを持つ彩と並んで、寮への帰路を歩く。

“帰路”とは言いが、森の中では道はあって無きが如くというやつだ。

何となくこつちかな、という方角に向かって突き進むしかない。

そんな不案内でも、これだけの人数がいれば、ちつとも不安を感じないから不思議だ。

怖くはない。

木々のざわめきも、梟の声も、気にならなかった。

悪いな、と唐突にイデアブルーが言葉を放った。

驚いて振り向くと、彼は楓のすぐ隣を歩いていた。

「リンドのことでまた迷惑を掛けた。この通りだ、すまない」

「私からもお詫びします。皆さん、すみません」

面食らったのは私たちだ。

いきなり謝られても困る！

やめてください、と言って彼らの頭を上げさせると、ハルシオンの口からため息が漏れた。

「これからもきつとリンドがご迷惑をお掛けすると思います。

もし、どうしても手に負えないと思われたら、リンドと距離を置いて下さい。

リンドは傷つくでしょうが、それは仕方がないことなのです」
「どうして、そんなことを言っんですか？」

腹が立った。

“うちの子をよろしく”と頼み込んでくる母親にも呆れるが、

“うちの子とは距離を置いて下さい”と言つ従兄たちには
張り飛ばしてやりたくなつた。

21・自由であること

「迷惑を掛けるかもしれないと分かっているのなら、迷惑を掛けないように正せばいいじゃないですか」

リンドはまだ幼い。

私だって幼い頃は自分のことしか考えられなくて、いろんな人を傷付けたし、迷惑を掛けたと思う。

（うつん。

今だって、誰かに迷惑を掛けたなあと思う時がある。

それを申し訳なく思い胸が苦しくなったり、自分が嫌になったりする）

けれど、それでいいのだ。

苦しくなるのも、自分が嫌になるのも、正そうという気持ちがあるから。

問題なのは、他人に迷惑を掛けていることに気付いていない場合、気付いていても正そうとしない場合だ。

リンドがもしそうであるのならば、

リンドを正すことは、その周りにいる者たちの優しさであり、義務だと思う。

「私たちはリンドの育て方を間違えたのかもしれませんが」

ぼつりと、

零すように言ったハルシオンに、私は眉を顰めた。

「どういう意味ですか？」

「許されることなら、私たちもリンドを思い、

リンドが傷つかないように、苦しまないように、

助言を与え、求められるより早く力を貸して助けてあげたい。

けれど、それは許されないことなのです。

リンドは誰よりも孤独です」

意味が分からない、と無言の瞳をハルシオンとイデアブルーにぶつけた。

彩たちもじつと息を潜めている。

顔を俯かせ、ハルシオンは静かに言葉を紡いだ。

「父上が嘆き谷でリンドを見つけた時、

リンドは銀朱色の産着にくるまれていました。

銀朱という色は、嘆き谷では魔除けの色なのです。

そのためリンドは

悪しき魔法から免れることができたのではないかと、父上は考えています。

けれど、なぜリンドだけが生き残ったのかという原因を探るより

も、

リンドだけが生き残ったというその事実の方が父上には気掛かりでした。

そこに宿命的な意味があるのだろうか」と

「ないかもしれない。

いや、おそらくないだろうし、ない方がいいのだと思う。

だが、万が一あるのだとしたら、

リンドを養育するということは大変な役目を負うことになる」

「父上の養育法によって、リンドはどのようにも成長できるからです。

リンドに関わらず、子どもというのはそういうものなのでしょう。生まれ持った性質というものもありますが、育った環境によって影響を受け、

作り上げられていく性格というものがあります。

父上はリンドが受けるであろう響き谷の影響を恐れたのです」

それに、とハルシオンの言葉をイデアブルーが引き継いだ。

「リンドがくるまれていた産着には金糸でリンドの名前が刺繍されていた。

“リンドブルム《翼ある者》”と。

翼。それは“自由”を意味する」

「リンドに名を与えた者は、リンドが自由に生きることを望んだのです。

そうと知った父上は、ますますリンドの養育に頭を悩ませました。そして、決断したのです。自由に育てることを」

踏み出した足の下になった枯れ葉が、ガサリ、と身を擦った。
私はハルシオンの言葉の意味を計りかねて、首を傾げた。

「自由について…?」

「父上の思い通りに育てるという意味ではありません。
リンドの自由を尊重して育てるという意味です。」

父上は響き谷の者たちに、リンドに対して、
指図を与えることを禁じました」

「つまり、“ああしなさい”とか“こうしろ”“何々しなきゃダメだ”

といったことを言うてはいけないんだ。

リンドが一日中遊びほうけていて、まったく勉強をしないとする。
それでも、そこで“勉強しなさい”と言うてはならないんだ」

「リンドの“勉強しよう”という意味に任せて見守るしかありません」

それって、と彩が人差し指を自分の顎に押し当てた。

「自主性を重んじるってことよね？」

いいんじゃないの？ 素敵な教育方針だと思っけど?」

何が問題なの？ と小首を傾げた。

すると、はるきの口から重々しいため息が漏らされた。

「お前、よっぽど母親からあれこれうるさく言われて育ったんだな」

「えー。ひどい、何それ！

……むう。たしかにその通りだけどさあ」

頬を膨らませた彩に、はるきは肩を竦める。

「自主性を重んじるってくらいのレベルならいいけど、
リンドの場合まったく何も言われないってことだろ？

あれこれ言われないっていうことは、何でも自分で決めなければ
ならないってことだ。

自分で自分を律して、選択をする。それって、かなり大変なこと
なんだぞ」

「ええ、その通りです。

口うるさいと感じても、人は他人の指示を受けて動くことに
楽らくさを感じるものなのです」

果たしてそうだろうか、と私は考え込む。

私も彩と同じで、母親から口うるさく言われて育てられた方だ。

特に一番言われた言葉は“勉強しなさい”それから“早く寝なさい”だ。

そんなこと言われなくても分かっている。

だから、“これから勉強するつもりだったのに！”と言い返して
腹を立てたり、

“まだ眠くないもん！”と言って更に怒られたりするの、日常
茶飯事だった。

それを“楽だ”と感じたことはない。

むしろ煩わしいと思うくらいだ。

だけど、想像してみる。

母親があれこれ言わなくなり、

“どうしたらいいの？”と自分の方から尋ねてみると、

“あなたが自分で考えなさい”とそれしか言わなくなったら…？

突き放されたような悲しい気分になった。

小学校から中学校に上がるとき、何にも考えずに進学した。

そうすることが当然の成り行きで、何も悩むことがなかったからだ。

そして、決められた中学校に3年間、文句を言いながらも通い続けた。

中学校から高校に上がるとき、

数多くある高校から進学したい学校を選べと言われ、途方に暮れた。

けれど、母親が“私立に合格しても、授業料払えないから”と、非道なことを言ったので、だいぶ志望校が絞り込めた。

つまり、そういうことなのだろう。

それしか道がないときは不平を言いながらも、何も考えずにそれに従う。

選ぶ自由があれば悩み、その自由が無条件であればあるほど、途方に暮れる。

そして、いざ条件を出されれば、その制限に不満を持ちながらも、選択肢を選びやすくされたことに楽しさを感じる。

ならば、と思う。

自由とは何なのだろうか。

将来、何になりたいの？

はつきり言つて、聞かれて一番答えに困る質問だ。

そんなこと分らない。

職業なんてそれこそ数多くあるし、

自分に何ができるのなんてさっぱり検討が付かない。

それなのに大人は言つのだ。

『あなたにはあらゆる可能性があるのよ。
自由に職業を選ぶ権利があるのよ』

何にでもなれるのよ、と言われると、
何にもなれない気分になってくる。

『自由に絵を描きなさい』

『あなたの好きな物を自由に作つてね』

『作文に思つたことを自由に書いてみましょう』

そんなことを言われても、
何をどうしていいのか分からない。

「…ものすごく困る」

ぼつり、と私は零した。

声はたちまち闇に吸い込まれていった。

闇。

そう闇だ。

自由とは、上も下もない暗闇の宇宙で、
たった一人彷徨さまよっているようなものだ。

「孤独だ」

独り言と言い張るには些かハッキリと言いすぎたらしい。

皆、ぎよつとして私の方を振り返った。

私は一同を見渡し、それからイデアブルーとハルシオンに視線を
向けた。

「育て方を間違えたと言っていましたよね？」

まだ間に合うと思います。リンドを孤独から救ってください」

『絶対それは違う！ブルーは優しくない！』

リンドの声が私の脳裏に響いた。

それは出会ってすぐのことだ。

リンドを抱き上げたイデアブルーに対してリンドが叫んだ言葉。

その通りだ。

彼らはちつともリンドに優しくない。

一見すると、べたべたに甘やかしているように見える。

けれど、ちつとも甘やかしてはいない。

むしろ厳しく、冷たく突き放しているのだ。

「ああした方がいいと分かっている、俺たちがリンドに“ああしろ”とは言えない。

不可能なことを“不可能だ”と教えてやることはできても、可能である限り、その誤りを先に告げることとはできないんだ。

リンドが自ら選ぶ様子を見守るしかない」

「リンドが窮地に追い込まれてもですか？」

「ひどいと言われようと、それが響き谷の領主である父上の決められたことなのです。

私たちはそれに従うしかない」

けれど、とハルシオンは私の瞳を正面から受け止め、彼にしては強い口調で言い放った。

「父上は一度だけリンドに干渉された。
リンドの意思とは関係なく、リンドをソレンティアに送ったので
す」

そう言えば、リンドは言っていた。
伯父のフリーユゲルに騙され、ソレンティアの招待状を読んでし
まったのだ、と。

おそらくそれがリンドにとって
生涯初めて他人に指図されたことだったのだろう。

“中を開いて声を出して読んでみる”と言われて、
喜んで読んでしまったに違いない。

「リンドが嘆き谷に行きたいと言い出して、父上は頭を悩まされま
した。

嘆き谷の悲劇は未だ解明されていない謎です。

そんな危険な場所にリンドを行かせるなんてできません」

「それで父上は、リンド宛てに招待状が届いていたのを良いことに、
リンドをソレンティアに送り込んだというわけだ。

もっとも、リンドが本当に嘆き谷のことを調べたいと言うのなら、
そのための力を蓄えられる場所はソレンティアをおいて他にない」

そしてもう一つ、とハルシオンは続けた。

「響き谷の者はリンドを特別に扱います。

誰もリンドに指図を与えません。

けれど、ソレンティアにはリンドに対して遠慮無い者が大勢いる
ことでしょう。

ええ、そうです。カエデさん、貴女がその一人です」

「え？ 私？」

「はい。数日前、貴女がリンドに“謝りなさい”と言っている姿に、
ブルーと私は驚愕しました。

そのようなことを言われたのは、貴女が初めてなのです。
その瞬間、貴女はリンドにとって特別な人となりました」

「だから、カエデ。

リンドは君の側にいることを選んだんだ。

君には迷惑かもしれないが」

学生課での出来事を思い出した。

リンドが勝手に楓の学科を決めてしまった時のことだ。

あの時もこの美しい従兄たちは黙ってリンドのやることを見守っ
ていた。

そして、リンドは選んだのだ。私と同じ学科を専攻することを。

「リンドが自由であることは、リンドブルム《翼ある者》の宿命で
す。

けれど、自由であり続けることは苦しいことなのです」

「鳥も空を飛び続けることはできない。止まり木が必要だ」

「その止まり木に、カエデさん、貴女がなって下さいませんか？」

息を呑んだ。

そして、イデアブルーの背中でごんごんと眠り続けるリンドブルムを見やった。

そして、緩やかに頭を左右に振った。

「そんな大それたものには、私、なれません」

「いいえ、カエデさんになって下さると思ったからお話したのです。

そうでなければ、話の初めにも言ったように、

再度“リンドと距離を置いて下さい”と言ったでしょう」
「でも…」

袖を引かれた。振り返ると、彩が笑みを浮かべている。
ラックもはるきも私を見つめている。

「楓ちゃん、難しく考えなくっていいんだよ。

だって、それって、リンドとお友達になるっていうことだもん」
「そうだぞ。

友達として普通のことしか頼まれてないじゃねえか」
「カエデ、俺たちもいるだろ？」

そうか、と思う。

イデアブルーとハルシオンが楓に望んでいることは、
私がリンドの心の支えとなること。誤りがあれば正すこと。
それは友達であれば当然するであろうことなのだ。

私はリンドブルムの寝顔に視線を向けた。
胸の前に拳を押し付け、頷いた。

22・夜の始まり

長いこと森の中を歩いてきた者たちにとって、
食堂の明かりは昼間のように眩しかった。

その明かりの中からジッと森を見つめていた者がいて、
私たちの姿を暗闇から見つけ出すと、彼はマイクを片手に大声を
張り上げた。

「帰ってきたでえーっ！」

どよめき。

事の結末を見届けようと、寮生たちは窓辺に駆け寄った。

その騒ぎに意識を取り戻したらしい。

リンドはパチリと瞼を開くと、イデアブルーの背中から滑り降り
た。

「リンド、走っちゃだめ！」

小さい肩に枝が突き刺さっている様子が
食堂の明かりに照らされて、はっきりと見えた。

痛いはずだ。
ものすごく。

それなのに、リンドは食堂の中へと駆け込んで、
辺りをキョロキョロと見回し、エマの姿を探している。

美しい従兄たちは何も言わない。

私は慌ててリンドの背中を追った。

「うろろろしないの！」

誰か、リンドの傷を治して……」

やっとの思いでリンドの体を押さえつけると、
私は自分の視野に影が落ちたのを感じた。
顔を上げると、エマが目の前に立っていた。

「エマ！」

見付けた、と笑顔を浮かべて、
リンドは握り締めていた彼女のネックレスを差し出した。

「これ、エマのだろ？」

ちゃんと持って帰ってきたぞ」

「……」

エマは顔を歪めて、小さな手のひらに乗せられた自分のネックレス

スを見下ろした。

藍色の石がキラリと光を放つ。

「ズルだわ」

「え？」

「反則だわ！」

だって、あなたの力で拾ってきたわけじゃないでしょ！」

意味を計りかねて、私もリンドもエマの顔を見上げて啞然とする。
そうよ、と甲高い声が響いた。

エマの背後にエルフたちがずらりと並ぶ。

「彩ちゃんやラック君、はるき君の力を借りるなんて！」

「ズルよ、ズル！」

「他の寮に所属している従兄の力まで借りるなんてずるい！」

「この勝負は無効よ！」

「いいえ、リンドブルムの反則負けだわ！」

「ネツアク寮から出て行きなさいよっ」

なんてことを言うのだろう。

私は顔を強ばらせた。

リンドの左肩がぬるりと塗れている。

つうー、と腕を伝った赤いもの。

ポタリと落ちて、床を汚した。

(ひどい)

ふつつつと、怒りが込み上げてきた。

口々に言い立てるエルフたち。

出て行け、とリンドに向かって言葉を投げる。

(ちゃんとネックレスを持ち帰ってきたのに！)

夜の森の恐ろしさや心細さ。

エレファントキノコの幻覚相手に、

くたくたになるまで戦ったことを思い出して、私は拳を握った。

(リンドは、あなたたちと分かり合うために戻ってきたのに！)

怒りを吐き出してやろうと口を開いた。

その時だった。

がちやり、とアンティーク調の扉が音を立てた。

皆、振り返り、現れた人物に息を呑んだ。

コッソ、コッソ。

靴底の固い音を響かせて小柄な体が食堂の中に入って来た。
絹のような黄金色の髪を頭の高い位置で2つに結び、
大きな黒いリボンで飾っている。
ゆったりとした袖から覗いたブラウスには
レースが綺麗に付いており、フリルたくさんスカートの大きく
膨らんでいる。

(可愛い…)

まるで西洋人形だ。
ビスクドール

生きて動いていることが奇跡であるような愛らしい少女。
その姿を目にして真っ先に歩み寄った者がいた。
長い焦げ茶色の髪に、犬のような耳を生やした少女で、
寮長挨拶時にオードリーの不在を告げたあの物静かな少女だ。

女子寮の副寮長オルガ・マルシェフだと、彩が耳打ちして楓に教
えてくれた。

そして、この愛らしい少女こそが、
ネツアク女子寮の寮長オードリー・エブラールだと。

オードリーはちらりとオルガを一瞥すると、
鈴の音のような声を響かせた。

「随分と賑やかなのね」
「オードリー、気分はもう良いの?」

エマを先頭にエルフたちがオードリーの周りを取り囲んだ。

「心配したのよ。大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ。」

あなたたちの甲高い声を耳にしたら、部屋でじっとなんてしてられないもの」

「オードリー？」

オードリーはエマたちの顔をぐるりと見渡すと、キッと瞳を鋭くさせた。

「なんて愚かなの。」

あなたたちはネツアク寮生らしく勝負で事を収めようとしたのでしょう？

そして、リンドブルムはあなたたちが決めたとおり、

エマのネックレスを探して戻ってきた。

この勝敗、誰の目にも明かだわ」

「でも、オードリー。」

リンドブルムは一人でネックレスを探してきたわけじゃないわ」

「あら、あなたたちは、

リンドブルム一人で探し出してくるようという条件をつけたのかしら？

オードリーがオルガから聞いた話だと、そんな条件ついていなかったわよ。

それに、多くの人に助けて貰えるのは、その者の人徳だわ。

良い友達がいるということも、その人の能力なのよ」

でも、と言って、エマはなおも言い募った。

「オードリーだってリンドブルムが許せないと思うでしょう？
貴女のことを侮辱したのよ」

「侮辱？」

オードリーにとって貴女たちにそう言われることの方が“侮辱”
だわ。

オードリーを理由にみつともないことをするの、やめてくれない
かしら？」

ふん、と軽く鼻を鳴らして、オードリーはエマを見やった。
そして、リンドを見下ろす。
歩み寄り、片手をその顔の前に突き出した。

「リンドブルム、ネツアク女子寮はあなたを歓迎します」

リンドブルムはその陶器のような白い手とオードリーの顔を見比べた。

そして、その肩越しに、エマたちの歪んだ顔を見る。

エマはつかつかと2人の間に割って入ると、

伸ばし掛けていたリンドブルムの手を、バチンと叩き落とした。

「この子は“嘆きのリンドブルム”なのよ！
どうして仲間として受け入れることができるの？
この子のせいで私はとても悲しい思いをしたわ！」
「違う！ リンドのせいじゃない！」

すかさず私は叫んだ。

エマは振り返り、青く澄んだ瞳で睨んでくる。
ハッとする。

その瞳はとても悲しげだった。

「私は虹の麓ふもとの出身なの。

虹の麓がオークに襲われた時、私はまだ幼かったから、
実を言うと、あの時のことはあんまり覚えていないの。
だけど、とても怖かったということは覚えてるわ。

怖くて、怖くて、泣き叫んでやりたいんだけど、
不思議なの、本当に怖いときって泣き方を忘れてしまうものなの。
よ。

お父さんが床板を外して、私をその下に隠したの。
お母さんに、静かにしていなさいって言われたから、
私、ずっと一言もしゃべらなかつたわ。

うつん、しゃべれなかつたの。

オークが去ってからもしばらくしゃべり方を忘れてしまっていた
わ」

淡々と語られていく話に胸が締め付けられた。

リンドは声を震わせた。

「エマ、ごめん」

「あなたが悪いわけじゃないって、頭では分かっているの。だけど、胸が苦しいのよ！」

だって、オークに襲われたせいで、美しかった虹の麓はめちゃくちゃになってしまったんですもの。家を壊されただけじゃないの。

畑を荒らされて、その年の食べ物がなくなってしまったの。怪我を負ったり、亡くなった人も大勢いたわ。

オークに襲われた翌日、

畑を一つ潰して、みんなでいくつも穴を掘ったのを覚えているわ。その穴一つひとつに遺体を埋めるの。

昨日まで元気だったのにどうして、って思ったわ」

「……ごめん」

「だから、謝らないで。あなたのせいじゃないもの！」

「それでも、エマはリンドの顔を見ると、悲しかったその日のことを思い出すんだろ？」

「……」

うつうつ、とエマの口から息が漏れた。

そして、頬を涙が伝う。

リンドは腕を伸ばして、その雫を指先でそっと拭った。

「だから、いいんだ。」

エマもみんなも気が済むまでリンドを恨むといい。もしかしたら、リンドはそのため生き残ったのかもしれない」

「…バカね。そんなわけがないじゃない。

だいたい、その小さな体で全員分の恨みを背負い込めると思っているの？

できるわけがないじゃないの。

それに、そんなことをしたら、私はますます自分が許せなくなってしまうわ」

「エマ？」

エマはリンドに向かって右手を差し出した。

「ようこそ。 我らが翠玉の寮、ネツアク寮へ」

「エマ」

「私たちはあなたを歓迎するわ」

パシン、と音を立てて、リンドはエマの手を握った。

いつの間にか私の頬にも涙が伝っていた。

熱い何かが胸の内を支配する。

横を見やると、彩も袖で目元を拭っていた。

「楓ちゃん……」

「うん、よかったね」

「よかったあー」

よかった、よかった、と言いながら彩が抱きついてきた。

ラックもはるきも微笑んで、リンドとエマのもとに駆け寄ってい

った。

それから、オードリーの命令で
オルガがリンドの肩の傷に回復魔法を掛けることになったのだが、
誰が枝を引き抜くかで少しもめた。

イデアブルーが、

「ここは他の誰にも任せられないから自分が抜くと言い張ったのだ
が、

いざとなると、痛そうだなあ、可哀想だなあ、と、
涙目になっていつまで待っても抜こうとしない。

焦れたのは彼の弟のハルシオン。

「はいはい、邪魔なブルーはどいてね。
リンド、いくよ。――はい、抜けた！」

彼はあっさりと枝を抜いてみせて、みんなから拍手喝采を受けた。

夜はまだ始まったばかり。

ヴィンスが寮長挨拶をやり直すと言い出したり、
それを止めようとして乱闘が起こったり。

食堂に響く笑い声は、

青白い光を放つ月が沈むまで絶えることがなかった。

だが、食堂から離れた一室で、
一人腰掛けに座り、物思いにふける少年がいた。
やがて彼の部屋の扉が静かに開かれ、マリーゴールドの頭が覗い
た。

「ラディー？」

名を呼ばれた少年は長く伸びた銀髪を僅かに揺らして振り返る。

「なんだ、シユナか」

「なんだじゃない。食堂に顔を出さないか？」

みんな、楽しんでいるぞ」

「そうみたいだな」

廊下が静まり返っているということは、
誰も自室に帰ろうとしていないということだ。
よほど、歓迎会は楽しく進んでいるらしい。

「俺はいい」

「混ざり者がいるから？」

ヴィンスもオードリーも“嘆きのリンドブルム”を受け入れた」

マリーゴールドの髪の少年がそう報告すると、

銀髪の少年は、そうか、と短く言つて窓の外に視線を流した。すると、彼の金茶の瞳に、闇に紛れるようにして寮から抜け出す者の姿が映った。

赤毛のノックスペンナリアン。

すぐに何者であるか検討が付いたが、それきり彼は何も語らなかった。

一方、寮から抜け出した紅巳はエレベーターに乗ると、ティファレト寮に向かう。

ティファレト寮のサロンで彼を迎えたのは、

波打つ豪華な金髪を持った美しい少女だった。

滑らかな白い肌に、エメラルドの瞳。

紅巳は彼女の美貌の前で、優雅に、そして紳士的にお辞儀をしてみせた。

「眠り森のお嬢様にご報告」

「ネツアク寮のエルフたちはうまいことやってくれたのかしら？」

「残念ながら……」

紅巳の報告を受けて、少女は口惜しそうに眉を顰めた。

少女の名前は、ユリシュ・L・クロイツェン。

眠り森の領主ヴェルナーの一人娘だ。

彼女は手にしていた本を閉じると、すくりとソファから立ち上が

った。

「もう少し頑張ってくれるものだと思っていたのだけど。仕方がないわね」

「もう一つ仕方がないことが」

「何？」

「以後、うちの寮の者はリンドブルムを“寮の家族”として接するように、

との寮長たちのお達しです。

つーわけで、お嬢の目や耳になるのも今回限りや」

おどけた道化師のように笑うと、紅巳は無駄なほど丁寧にお辞儀をした。

そして、片手を振ってサロンを去る。

しばらくして、残されたユリシユは薄く笑みを浮かべる。
何やら滑稽に思えてきたのだ。

ふふふっ、と声を漏らすと、彼女は一人呟いた。

「嘆きのリンドブルム、会うのが楽しみだわ」

自由とは、自分の意志によって自分の行動を選択できることである。

人はあらゆるしがらみの中で“自由”に憧れるが、
真実“自由”である者は、自由であることによるあらゆる重荷を
背負う。

なぜなら、自分の意志によって選択した自分の行動は、
すべて自分のみに責任があるからである。

アルヘイムの哲学者ゲオルク・クニーゼル著『自由の刑』より

22・夜の始まり（後書き）

この小説は、SNG「紅炎のソレンティア」（<http://solen-tia.jp/>）の二次創作小説です。
オリジナル設定や独自の解釈をしている部分があります。

「紅炎のソレンティア」をプレイし始めたのは、2008年の1月。
「小説家になろう」の広告バナーのイラストに惹かれたのがきっかけで、かれこれ2年以上も遊んでいます。
課金までしてしまい、二次創作までして、どっぷりハマっていました。

もしこの小説を読まれまして、興味を持たれた方は、ゲームを遊んでみて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0965m/>

翼を抱く者 - 紅炎のソレンティア -

2010年10月10日16時04分発行